仙台市文化財調査報告書第130集

仙台市

茂ヶ崎横穴墓群

——発掘調査報告書——

1989・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第130集

仙台市

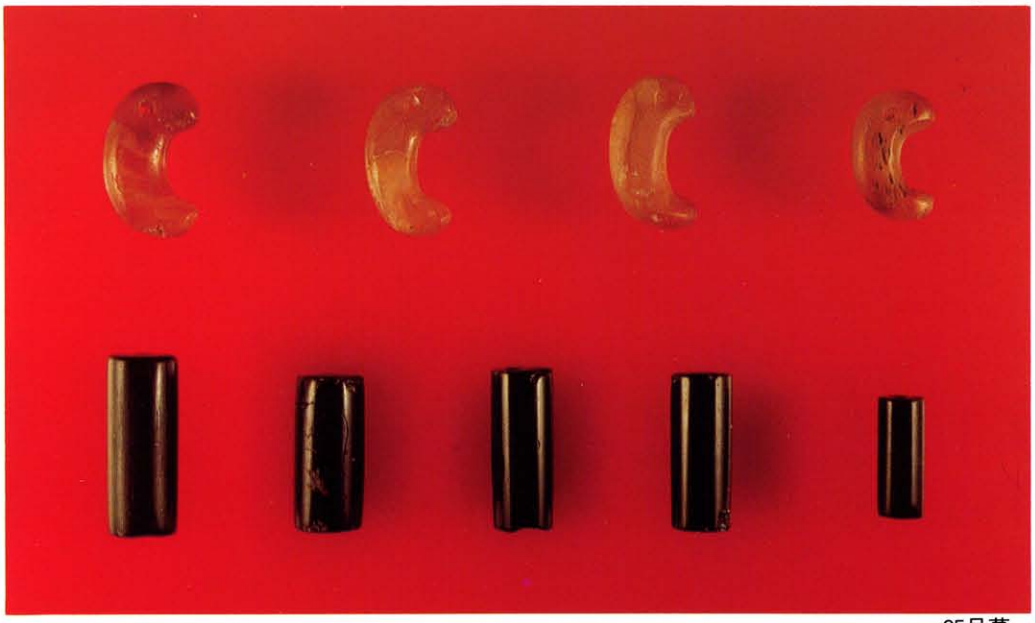
茂ヶ崎横穴墓群

——発掘調査報告書——

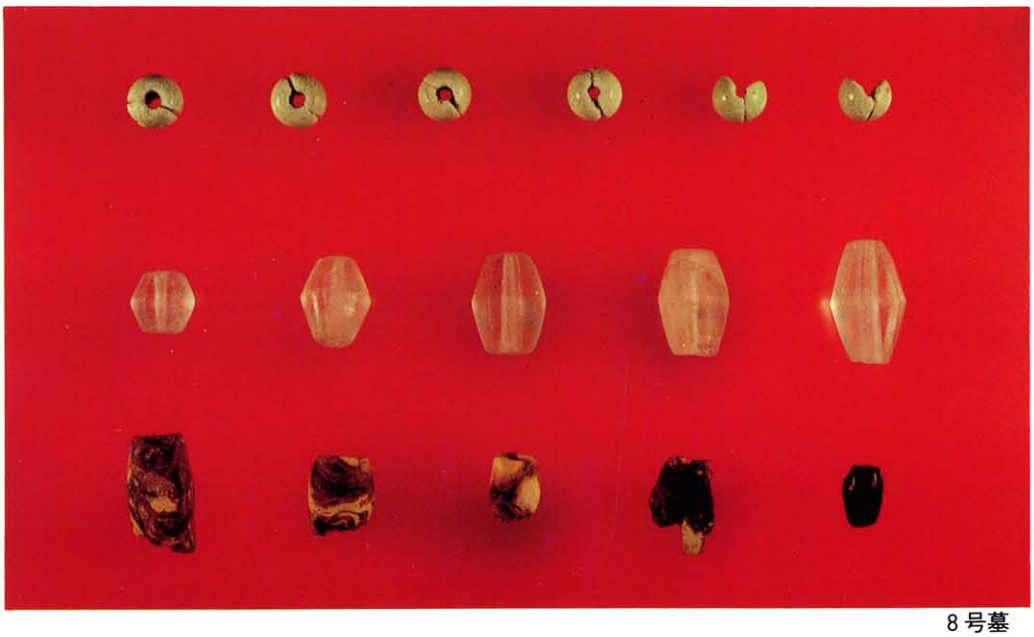
1989・3

仙台市教育委員会

4 号墓



25号墓



8 号墓

序　　文

仙台市大年寺山一帯は古くから多くの文化財のあるところとして知られております。江戸時代には仙台藩祖伊達家の霊廟が営まれ、中世には名取地方をおさめた栗野大膳の居城となった茂ケ崎城が造られております。古墳時代には山裾の平野部に兜部・一塚・二塚等の高塚古墳が造られた他、山裾斜面には愛宕山・大年寺山・宗禅寺・二ツ沢等多くの横穴墓群が知られておりました。

今回調査されました横穴墓群は東北工業大学の新キャンパス造成工事中に発見されたものでこれまで仙台市文化財台帳には登録されていなかったものでありますが、周辺地区での横穴墓群の在り方からみますと、広い範囲に分布する一大横穴墓群の中の一支群ともみられるものでありましょう。隣接する愛宕山横穴墓群の調査では全国的にも類例の少ない装飾横穴が発見されるなど極めて貴重な成果があがっております。本横穴墓群も工事中の発見ということもあり、遺存状況が必ずしも良好とはいえないにもかかわらず、数多くの貴重な出土品が発見されております。

本報告書もこれまでの横穴墓群の調査成果をふまえ、大年寺一帯に営まれた古墳時代末期の横穴墓の実態を明らかにする学術的調査資料となれば幸いです。調査の遂行に御努力、御協力いただいた多くの方々に対し厚く感謝申し上げますとともに、こうした記録が最大限に活用され郷土文化の向上に資することを願ってやみません。

平成元年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は東北工業大学のグランド造成工事中に発見された横穴墓群の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は東北工業大学と施工担当の株式会社間組との協議により、仙台市教育委員会が委託され行ったものである。

3．本遺跡は、発見当初未登録であったため、調査にあたり遺跡名を「茂ケ崎横穴墓群」、登録番号をC－055とした。

4．報告書作成にあたり、整理及び編集・執筆は次のとおり分担した。

本文執筆	木村浩二	Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．Ⅴ
	渡辺雄二	Ⅳ．
	前田裕志	Ⅳ．
遺構トレース	小野みや子、古賀克典	
遺物実測	古賀、在川宏志、下山田俊之、庄司　大、半澤明子、前田	
遺物トレース	小野、古賀	
遺構写真撮影	調査員全員があたった。	
遺物写真撮影	木村、前田、赤井沢進	
遺物補修復元	赤井沢進、赤井沢千代子	

編集は木村・渡辺・前田がこれにあたった。

5．遺構図の平面図は任意の原点に基づき、高さは標高値で記した。又方位は磁北を基準とする。

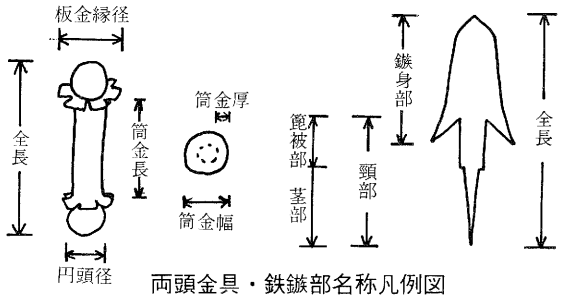
6．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

C　土師器（ロクロ不使用）	K　石製品
E　須恵器	N　金属製品

7．遺物実測図の中心線は、個体の残存率がほぼ50％以上は実線、ほぼ25～50％で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリーントーン貼り込みは黒色処理を示している。

8．両頭金具、鉄鏃の各部分名称は下図に示すとおりとする。

9．付章「仙台市茂ケ崎横穴墓群3号横穴出土の人骨について」は札幌医科大学の石田肇氏に鑑定・執筆を依頼したものである。



両頭金具・鉄鏃部名称凡例図

目　　次

序　文
例　言
I　はじめに……1
1．調査要項……1
2．調査経過……1
II　遺跡の位置と環境……3
1．地理的環境……3
2．歴史的環境……6
III　調査の方法……8
IV　遺構と遺物……11
V　まとめ……48
1．横穴墓の構造と編年……48
2．出土遺物の年代……51
3．造営年代と周辺社会……55
観察表・集計表……59
付章　仙台市茂ヶ崎横穴墓群3号横穴出土の人骨について……77
写真図版……79

Ⅰ　はじめに

1．調査要項

遺跡名　茂ヶ崎横穴墓群（新発見：新登録番号C－055）

所在地　仙台市太白区二ツ沢6

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　〃　文化財課調査係

調査協力　学校法人　東北工業大学

株式会社　間　組

調査期間　第1次　昭和63年4月11日～4月18日

第2次　昭和63年5月9日～5月16日

調査員　篠原信彦・木村浩二・吉岡恭平・工藤哲司・荒井　格・工藤信一郎

平間亮輔・渡辺雄二・佐藤　淳・渡部　紀

発掘調査、整理に際して下記の諸機関及び方々から適切な御教示・御援助をいただいた。記して感謝したい。

仙台市科学館、東北歴史資料館、札幌医科大学

大越道正、菊地芳朗、佐々木隆、村山斌夫、渡辺泰伸

2．調査経過

昭和63年4月5日　東北工業大学のキャンパス造成工事が行われていた仙台市二ツ沢6の大年寺山南東斜面で、横穴が数基発見され、中から人骨が見つかったとの報が、宮城県警から宮城県教育委員会を通じてもたらされた。現地調査の結果、古代の横穴墓であることが確認されたことから、事業主体である東北工業大学との協議により、施工担当である株式会社間組にも協力を要請のうえ、緊急発掘調査を実施することとなった。

4月7・8日、発掘調査の準備を進めるとともに、現地では横穴墓の分布範囲・総数を確認するため、重機にて周辺部分の崖面表土を排土し、横穴墓検出作業を実施した。その結果、発見当時は5基程度とみられていたが、未開口のものなど6基を新たに発見し、総数11基の横穴墓を確認した。また、発見された人骨は、県警での鑑識の結果、数十年前のものと判明し、横穴墓とは直接関係がないこととなった。

4月11日から各横穴墓の精査作業に入った。調査の結果、11基のうち1基は第2次大戦中に使用した防空壕であったが、調査最終日に西端部で1基を追加発見し、11基となった。このう

ち、当初発見された５・６・７号墓は玄門部まで削平が及び、遺存状況は極めて良くなかった。また、１・２・10号墓も玄門部から玄室天井部まで削平され、遺存状況は良くなかった。９号墓は大きく開口したものとみられ、玄室内には流入土・遺物等も全くみられず、数十年前のものと鑑定された人骨もこの９号墓から発見されたものであった。３・４・８・11号墓は未開口だったものとみられ、玄門から玄室の遺存状況はほぼ良好であったが、羨道前部まで遺存するものは全くなかった。各横穴墓の精査、遺物収納後、４月18日、調査成果について報道関係に発表した。発表後、西端で１基を追加確認したが、同日夜、発見した11基の調査を全て終了した。

４月28日、造成工事施工担当の間組青葉山作業所より仙台市教育委員会に、調査済地区の上方西側の斜面を掘削工事中に、新たに横穴墓が見つかったとの連絡が入った。現地調査の結果、横穴墓であることが確認され、再度、東北工業大学・株式会社間組との協議により、連休明けの５月６日から第２次調査として、発掘調査を実施することとなった。

５月６日、重機により崖面の表土・残土を排除し、遺構確認調査を行った結果、５基の横穴墓が確認されてたが、調査が進むにつれて、次々と追加発見され、９日―１基、10日―３基、11日―４基、13日―１基で、第２次調査分だけで14基が確認された。第１次調査と同様の調査を行ったが、遺構の遺存状況は第１次調査の１号～11号にくらべ良くなかった。このうち、玄室から玄門までの状況が観察されるものは15・16号墓の２基のみで、他は玄室天井部が殆ど削平され、玄室も前半部分が殆ど遺存していない。特に21号・22号・23号墓は玄室床面と奥壁の一部が遺存するのみで詳細は殆ど知り得ない。また、14号・19号墓もかろうじて奥壁幅が計測でる程度の遺存状況である。20号墓は玄門から羨道部にかけて遺存し、削平された崖面下方から須恵器完形品が採集されたが、玄室は上方からの重圧により押しつぶされており、調査不能であった。第２次調査分の14基は12号・17号・20号墓を除く11基が、高低差５ｍ、東西幅16m程の範囲に極めて密集していた。５月16日、14基の調査を全て終了した。

尚、第１次・第２次を通じて、重機・事務所の使用、作業員の援助の他、横穴墓群全体の測量については、間組青葉山作業所の全面的な御協力をいただいた。また、調査機材の使用・運搬、工事担当の間組との折衝・調整等、万般にわたって東北工業大学の御協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

II　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

茂ヶ崎横穴墓群は仙台駅南方約3 km、仙台市二ツ沢6地内に所在する。

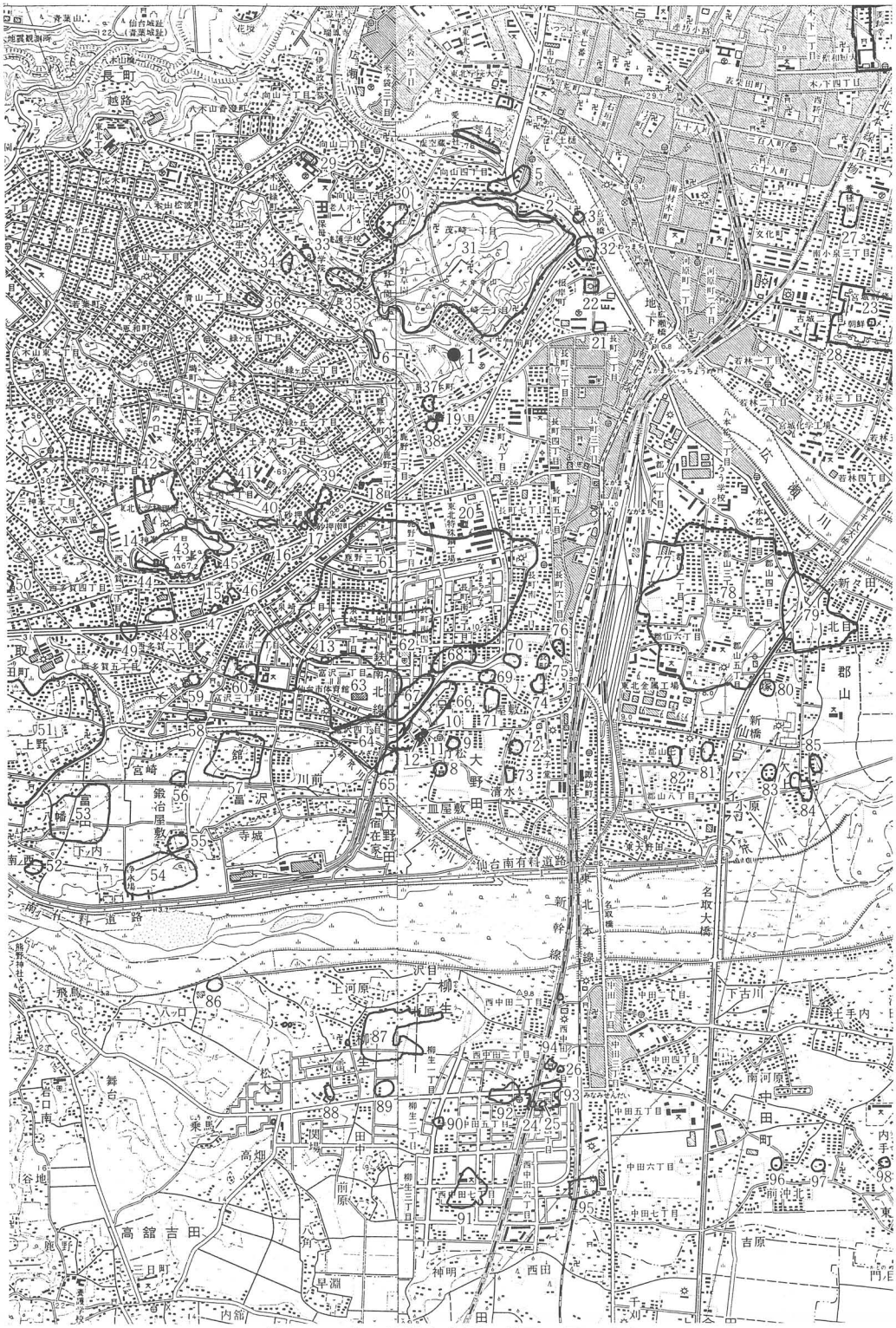
仙台市の地形は西半部と東半部とに大きく二分される。西半部は奥州山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と名取川支流の広瀬川が中流域に形成した河岸段丘からなっている。この段丘は古い段階から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘とよばれ、仙台藩開闢以来、現在に至るまでの市街地の中心はこの段丘面上に形成されている。これに対し、東半部は仙台湾沿いに幅約10kmに及ぶ宮城野海岸平野が、仙台市を中心に南北約40 kmにわたって三日月形に広がっている。この平野は七北田・名取・阿武隈の三河川の沖積作用によって形成されたもので、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道などの沖積地特有の複雑な地形がみられる。

この平野は地理的条件・成因・地質などから地形区分がなされている。仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点から西側の河間低地を郡山低地、広瀬以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地とよんでいる。郡山低地はほぼ三角形を呈する扇状地性の沖積面で、その範囲は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町—利府構造線で画されている。

長町—利府構造線を介して郡山低地の北西には青葉山丘陵が続いている。長町—利府構造線の北西は、それに平行な幅1 km・長さ10kmの隆起帯となっており、さらにこの隆起帯の北西縁には大年寺断層群が走っている。また、この隆起帯の南東縁には、とう曲構造があり、急崖や急斜面をなして平野部に至る。

横穴墓群の分布する大年寺山南東斜面はこの隆起帯南東縁にあたる。大年寺山一帯は地表から厚さ1～2 mの黄色火山灰層・段丘礫層があり、その下に基盤岩層が堆積している。基盤岩層の最上層は、第3紀鮮新世末期の大年寺層（軟質の青灰色もしくは灰黄色凝灰質シルト岩ないし砂岩：絶対年代B.P.100～200万年）であり、その下には八木山層（細粒凝灰岩、軽石質凝灰岩が主で中に厚さ1 m内外の亜炭層を含む）がある。大年寺層・八木山層とも河川ないし浅海性の堆積層で層中に多量の貝や木葉化石等を含んでいる。本横穴墓群は黄色火山灰層・段丘礫層の深い個所をさけ、大年寺層が地表近くまであがっている部分に集中して造られている。この大年寺はクラックが多く、また特に本地区では二枚貝の化石が多い。下層の八木山層が不透水層であることから涌水も多く、そのため崩落が激しい。

茂ヶ崎横穴群は標高120m程の大年寺山に南東から入り込んだ沢の北側斜面に位置しており、標高50～70m程の急崖面に分布している。この沢の南側張り出しが大年寺山の南端で、南側に二ツ沢とよぶ沢が入り込む。また、この沢の北側には平行して、山頂付近まで深く入り込



第１図　茂ヶ崎横穴墓群の位置と周辺遺跡

表1　周辺遺跡地名表

No	遺跡名	種別	立地	年代	No	遺跡名	種別	立地	年代
1	**茂ケ崎横穴墓群**	横穴墓群	丘陵斜面	古墳(末期)・奈良	50	八幡遺跡	包含地	台地	古墳・平安
2	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵北斜面	古墳(後期)	51	上野遺跡	包含地	台地	縄文(中期)・奈良・平安
3	宗禅寺横穴墓群	横穴墓群	段丘	古墳(後期)	52	富田南ノ西遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
4	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓群	丘陵北東斜面	古墳(末期)	53	南ノ東遺跡	包含地	沖積地	弥生・奈良・平安
5	〃　B・C地点	横穴墓群	丘陵南東斜面	古墳(末期)奈良	54	六本松遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
6	二ツ沢横穴墓群	横穴墓群	丘陵西斜面	古墳	55	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安
7	土手内横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳	56	鍛冶屋敷A遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安
8	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳	57	富沢館跡	城館	自然堤防	戦国時代
9	大野田古墳群		沖積平野	古墳(中期～後期)	58	堀ノ内遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
10	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳(中期～後期)	59	富沢上ノ台遺跡	包含地	河岸段丘	縄文・平安
11	五反田石棺墓	箱式石棺	自然堤防	古墳	60	富沢清水遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安
12	〃　木棺墓	割竹形木棺	自然堤防	古墳	61	富沢遺跡	水田跡	沖積平野	縄文～近世
13	教塚古墳	円墳	沖積平野	古墳(中期～後期)	62	泉崎浦遺跡	水田跡	沖積平野	縄文・古墳・平安・近世
14	三神峰古墳群	円墳	丘陵	古墳	63	山口遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	縄文～近世
15	裏町古墳	前方後円墳	台地	古墳(中期)	64	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
16	金洗沢古墳	円墳	台地	古墳	65	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・奈良・平安
17	砂押古墳	円墳又は 前方後円墳	台地	古墳(中期)	66	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世
18	二塚古墳	前方後円墳	沖積平野	古墳	67	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
19	一塚古墳	円墳	沖積平野	古墳(後期)	68	袋東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
20	金岡八幡古墳	円墳	沖積平野	古墳	69	元袋Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
21	小兜塚古墳	不明	自然堤防	古墳	70	元袋Ⅲ遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
22	兜塚古墳	帆立貝？	自然堤防	古墳(中期)	71	大野田遺跡	包含地	自然堤防	縄文(後期)弥生(中期)
23	若林内所在古墳	円墳	自然堤防	古墳(中期～後期)	72	北屋敷遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
24	安久東古墳		自然堤防	古墳	73	長町清水(皿屋敷)遺跡	包含地	自然堤防	古墳？
25	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)	74	新田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
26	伊豆野権現古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)	75	長町南遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
27	養種園遺跡	包含地	沖積平野	平安(後期)	76	長町六丁目遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
28	若林城跡	城館及び 集落跡	自然堤防	平安・戦国時代～江戸	77	西台畑遺跡	包含地 カメ棺墓	自然堤防	縄文、弥生(中期)、古墳
29	向山高裏遺跡	包含地	丘陵北東斜面	縄文(中期)	78	郡山遺跡	官衙跡	自然堤防	古墳(末期)～奈良(初期)
30	萩ヶ丘遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文・奈良・平安	79	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸
31	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵頂部 及び斜面	南北朝～室町	80	矢来遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
32	根岸遺跡	集落？	丘陵斜面	縄文	81	的場遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
33	八木山緑町遺跡	包含地	丘陵	縄文・奈良・平安	82	籠ノ瀬遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
34	二ツ沢遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文	83	欠ノ上Ⅰ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
35	萩ヶ丘B遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文	84	欠ノ上Ⅱ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
36	青山二丁目遺跡	包含地	丘陵斜面	奈良・平安	85	欠ノ上Ⅲ遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
37	鹿野屋敷遺跡	包含地	丘陵南斜面	古墳？奈良・平安	86	八ツ口遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
38	鹿野一丁目遺跡	包含地	沖積平野	縄文・弥生？奈良・平安	87	柳生台畑遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
39	砂押屋敷遺跡	包含地	台地	奈良・平安	88	雷遺跡	包含地	自然堤防	平安
40	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	奈良・平安	89	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安
41	土手内遺跡	包含地	丘陵	縄文・奈良・平安	90	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
42	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文(早期末～前期初頭) 弥生(初頭、後期末)平安末	91	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
43	三神峰遺跡	集落跡	丘陵	縄文(前、中期)平安	92	安久遺跡	集落跡	沖積平野	奈良・平安
44	富沢窯跡(木戸口窯跡)	窯跡	丘陵南斜面	古墳・奈良・平安	93	安久東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳(前期)・奈良～近世
45	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳	94	中田神社裏遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
46	裏町東遺跡	包含地	台地	平安	95	前田館跡	城館	沖積地	中世
47	原東遺跡	包含地	台地	古墳・奈良・平安	96	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳・奈良・平安
48	原遺跡(西台遺跡)	包含地	台地	弥生・古墳・平安	97	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
49	西台窯跡	窯跡	丘陵末端	奈良・平安	98	内手遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安

む沢があったが、北側の沢は現在造成され茂ケ崎団地となっている。山裾には近世に開削された木流堀を介して、郡山低地面上に発達した仙台市南部の中心街である長町の市街地が広がっており、南方には富沢・大野田・長町・郡山等を含む郡山低地のほぼ全域から、広瀬・名取両河川の合流点および名取低地・太平洋までを一望できる。

2．歴史的環境

茂ケ崎横穴墓群の立地する大年寺の南方に広がる郡山低地は、近年、仙台市地下鉄の建設開業を契機に様々な開発事業がおこされ、それに伴って遺跡の調査件数も年を追って増加し、市内でも最も発掘調査の進んだ地域となっている。ここでは大年寺山から郡山低地周辺について、古墳時代から奈良時代の遺跡を中心に概観しておきたい。

旧石器時代の遺跡では、台ノ原あるいは上町段丘上に立する山田上ノ台遺跡・北前遺跡、青葉山段丘上に立地する青葉山遺跡、低地沖積面上に立地する富沢遺跡があり、段丘上の遺跡からは前期・後期旧石器時代の遺物が出土している他、近年実施されている沖積平野部での調査でも富沢遺跡から後期旧石器時代の生活面とともに生活をとりまく自然環境を具体的に示すような樹木・植物遺体・昆虫・動物の存在を示すフンも確認された。

縄文時代の遺跡は、段丘上に立地する北前遺跡・山田上ノ台遺跡・三神峯遺跡、上野遺跡などがあり、自然堤防上には六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・下ノ内浦遺跡などがある。中期から後期の集落の様子が明らかになりつつある他、最大級の土偶や配石墓なども発見されている。

弥生時代の遺跡は、低地内の自然堤防・後背湿地に立地する富沢遺跡・船渡前遺跡・山口遺跡・西台畑遺跡・郡山遺跡などがある。水田跡が富沢遺跡の各地点で検出されているが、この時期の集落跡は不明である。自然堤防上では包含層が検出される他、西台畑遺跡では中期の甕棺墓や、下ノ内浦遺跡では後期の土壙墓が発見され、後背湿地周辺の自然堤防上や段丘縁辺部には集落の存在が想定される。

古墳時代前期の遺跡は、伊古田遺跡・六反田遺跡がある。また、この時期の墳墓は、方形周溝墓が名取川右岸の名取低地で安久東遺跡・戸ノ内遺跡から発見されている。古墳は広瀬川左岸の霞ノ目低地に主軸長110m の前方後円墳である遠見塚古墳がある。茂ケ崎横穴墓群の南前面 — 郡山低地ではこれまでこの時期の古墳・方形周溝墓は発見されていない。

中期の遺跡は、富沢遺跡・下ノ内遺跡・泉崎浦遺跡がある。富沢遺跡では遺跡北東部で水田跡が検出された他、下ノ内浦・家崎浦遺跡では住居跡が発見されている。古墳はこの中期から後期にかけて、郡山低地の北西縁辺部に数多く分布する様になる。兜塚古墳は帆立貝形で、円丘部直径50m、埴輪を有する。一塚古墳は直径20～30m の円墳で、竪穴式石室に家形石棺を有

する。二塚古墳は主軸長30m程の前方後円墳で、刳抜石棺と埴輪を有する。砂押古墳は円墳もしくは前方後円墳とみられ、周溝内縁径は42mで、埴輪を有する。金洗沢古墳は直径15m程の円墳である。裏町古墳は主軸長50～60mの前方後円墳で、竪穴式石室・埴輪を有する。これら大年寺山裾に立地する古墳の他には、段丘上に立地する、円墳2基からなる三神峯古墳や、平野部に立地する古墳がいくつかある。教塚古墳は直径15m程の円墳で埴輪を有する。金岡八幡古墳は直径15m程の円墳である。大野田古墳群は当初は墳丘の削平された大野田1号墳・2号墳の調査を契機に命名されたが、周辺では以前から知られていた春日社古墳・鳥居塚古墳・大野田3号墳・同4号墳があった。この6基は群在しており1つの古墳群として捉えられよう。さらにこの東には王の壇古墳があり、北西200m程の所には五反田古墳・五反田石棺墓・五反田木棺墓がある。また、王の壇古墳東方の長町清水遺跡、春日社古墳西方の伊古田遺跡からはそれぞれ埴輪が採集されていることから、大野田古墳群の範囲は長町清水遺跡から伊古田遺跡までの東西800m程に広がっている可能性が高い。五反田古墳は直径20m程の円墳で埴輪を有する。五反田石棺墓は墳丘削平を受けた円墳とみられ、周溝内縁は3.6×4.5mの楕円形を呈する。五反田木棺墓も墳丘削平を受けたものとみられ、形状規模は不明である。春日社古墳は周溝内縁径31mの円墳とみられ、埴輪を有する。鳥居塚古墳は周溝内縁径22m程の円墳とみられ、埴輪を有する。大野田1号墳は周溝最深部での径22m程の円墳とみられ、埴輪を有する。同2号墳は詳細不明であるが、1号墳と同規模の円墳とみられ、同じく埴輪を有する。同3号墳は周溝内縁径16m程の円墳とみられる。同4号墳は周溝内縁径31m程の円墳とみられ、埴輪を有する。王の壇古墳は周溝内縁径18.5mの円墳で、埴輪を有する。郡山低地及びその北西丘陵の縁辺部に分布するこれらの古墳の特徴は、埴輪を有するものが多いことや、縁辺部に並ぶ古墳は前方後円墳が多く、石棺も発見されていることであろう。前代の弥生時代から開始された後背湿地の開拓による水田経営は、この時期には安定した収穫をあげるまでに成長し、首長層の台頭を促すに至ったものと考えられ、郡山低地北西部は本地域の中心的地域となっていたものとみられよう。

後期の遺跡は富沢遺跡で、河川の氾濫土砂に覆われた水路や水田跡が広範囲に検出されたが集落は現在までの時点では確認されていない。古墳時代後期から奈良時代にかけては高塚古墳に代わって横穴墓の造営が盛んになる。茂ケ崎横穴墓群の所在する郡山低地の北西縁辺である長町—利府構造線に沿う青葉山丘陵の山裾崖面には多くの横穴墓が群在する。北から愛宕山・大年寺山・宗禅寺・茂ケ崎・二ツ沢・土手内の各横穴墓群があり、総数では100基を超えるものとみられる。このうち愛宕山C－1号横穴墓は装飾を有している。また、これら横穴墓の造営とほぼ同時期に郡山低地東部の郡山遺跡で多賀城造営以前の官衙・寺院が発見され、7世紀後半、この地区が中央政府による陸奥国支配の重要拠点となっていたことが知られる。

III 調 査 の 方 法

発掘調査は大年寺に南東から入り込んだ沢の北側崖面を対象に行った。当該地は沢の両側丘陵地を削平し、この沢を埋め立て、平場を造り出す造成工事と対象となっており、横穴墓の発見された崖面は造成後は地中になる部分であるが、崖面は一担表土を全く除去し、さらに丘陵基盤岩層を段階状に掘り下げた後、盛土を行う工法をとることになっていた。このため横穴墓は殆ど破壊されてしまうことから記録保存措置をとることとなった。調査は第1次と第2次にわけて行ったが、いづれも重機により基盤岩層を掘削中に発見されていることから、横穴墓前面については遺存状況が極めて悪い。

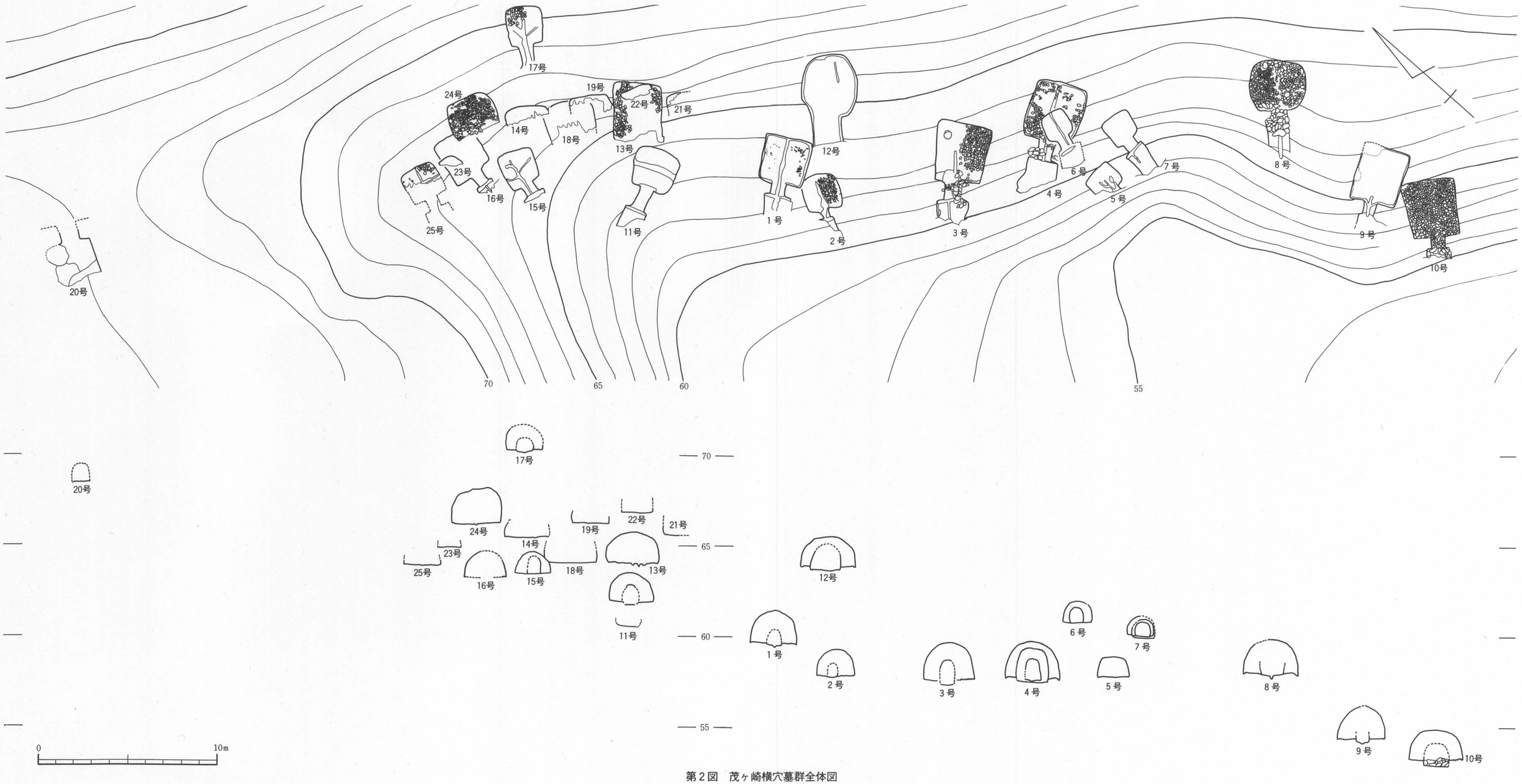
第1次調査では当初10基を発見し、斜面上方むかって西側より1～10号の番号を付したが、1号のさらに西上方にもう1基発見したことから、これを11号とした。(当初8号の東上方に隣接して11号があったが、調査の結果、第2次大戦中の防空壕と判明し、欠番としていた。)

第2次調査では14基を発見したが、位置は第1次調査地区の西側斜面上方にあたり、当初発見された5基に東側から12～16号の番号を付したが、調査中に次々と発見され、その都度17号～25号まで付した。

検出された横穴墓は工事中発見ということもあり、遺存状況が極めて悪く、詭弱な基盤層で安全性の確保が困難であったこと等から、玄室内堆積土の観察・記録が行えなかった。

出土遺物についてはその都度、出土状況写真や1/10、1/20の実測図を作製し、記録化したが、極小の玉類等については出土地点のみ記録したものや、各横穴墓ごとに一括して取り上げたものもある。これら玉類については遺漏のない様、玄室内堆積土の床面直上層を全て採集し、水洗作業を行った。精査終了後の各横穴については1/20の平面図・縦断面図・横断面図、玄門部の遺存するものについては玄門立面図等の実測図を作成し、全景写真・細部写真を撮影した。壁面のノミ工具痕については十分な記録化ができず、実測図に幅・単位・方向等を記入するにとどめた。

調査区全体の測量については、造成工事に先だって、施工担当の株式会社間組により地形測量が行われていたことから、各横穴の実測基点を2点づつ、1/100で測量し、あらかじめ作製してあった1/1000地形図にあわせた。実測基点測量は間組青葉山作業所の御協力をいただいた。また、今回調査した部分に隣接する同斜面上を重機で表土排除し、可能な限り遺構確認作業を行ったが、すでに基盤層まで掘削されていたことや、存在が十分予想される斜面東下方についても掘削後の埋め戻し工事まで終了しており、確認することができなかった。



第２図　茂ヶ崎横穴墓群全体図

IV 遺構と遺物

今回の調査によって発見された横穴墓は総計25基であるが、第１次で11基(第１～11号)、第２次で14基（第12～25号）である。第１次では斜面西側より１～番号を付し、１号の西に追加発見された１基を11号として終了した。第２次では第１次調査地に隣接するものに12～番号を付したが、調査中発見のものについてはその都度番号を付した。

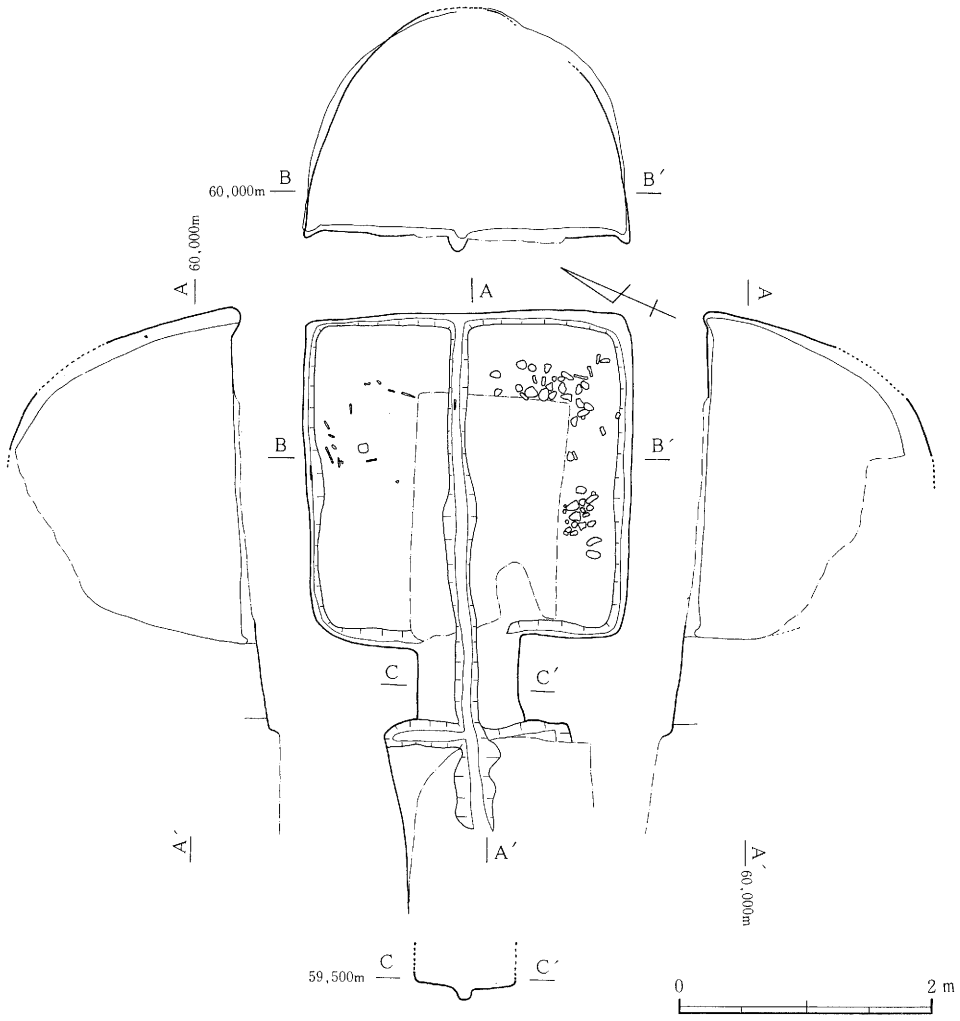
１　号　墓

玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄室天井から玄門、羨道は削平され不明である。

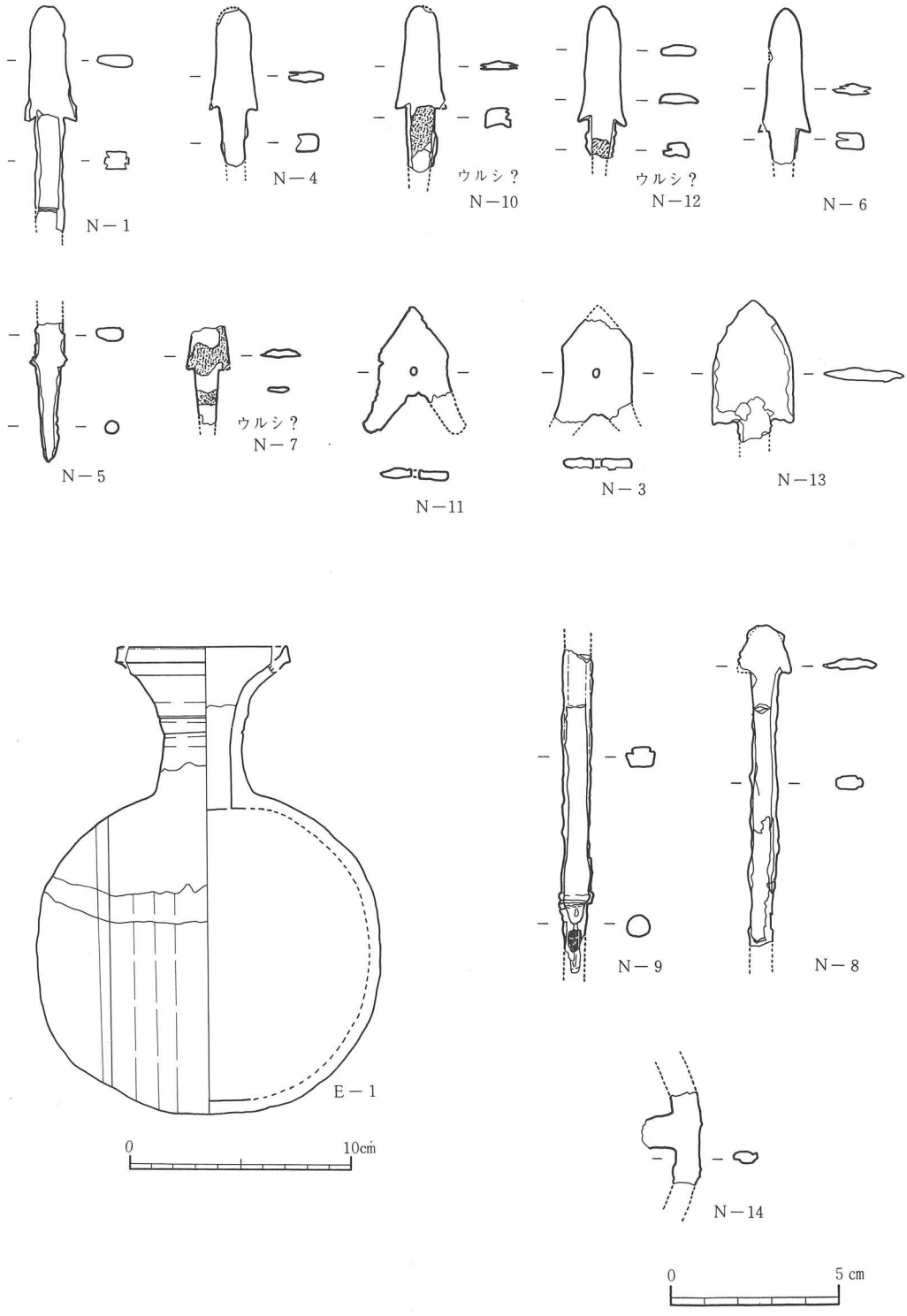
〈玄室〉　平面形はほぼ方形を呈し、奥行2.65m、最大幅2.60m を測る。

立面形はドーム形で、高さ1.75m である。

床面は中央部分に撹乱を受けており、玄門に向かってわずかに傾斜している。壁面と中軸線



第３図　１号墓実測図


N－1
N－4
ウルシ？
N－10
ウルシ？
N－12
N－6
N－5
ウルシ？
N－7
N－11
N－3
N－13
E－1
0
10cm
N－9
N－8
N－14
0
5 cm

第４図　１号墓出土遺物

に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅5 cm～15cmで、深さ約5 cmである。わずかに小礫が床面右側に遺存している。

玄室内壁のノミエ具痕は10cm～13cmの幅広のものと5 cm程の楔形のものの2種類がみられる。

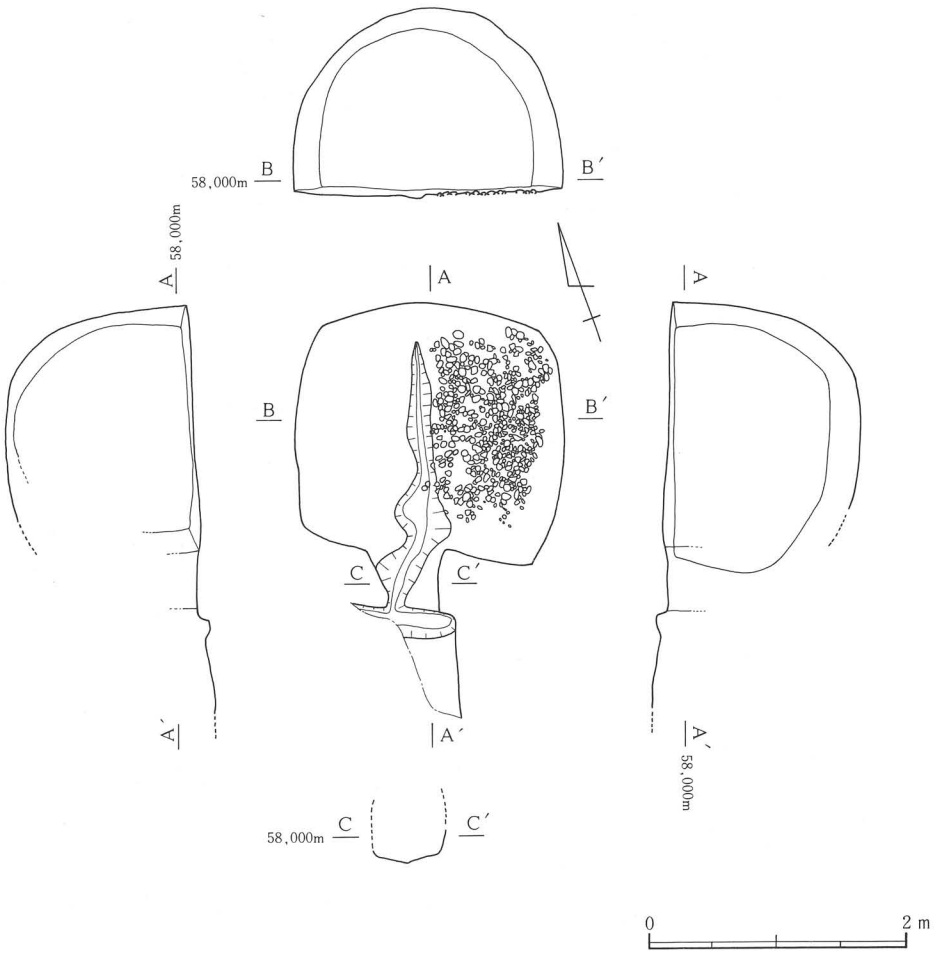
〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、奥行55～65cm、幅80cmである。上部は削平のため立面形は不明である。

排水溝は玄室から続いており、上幅17cm、深さ7 cmである。

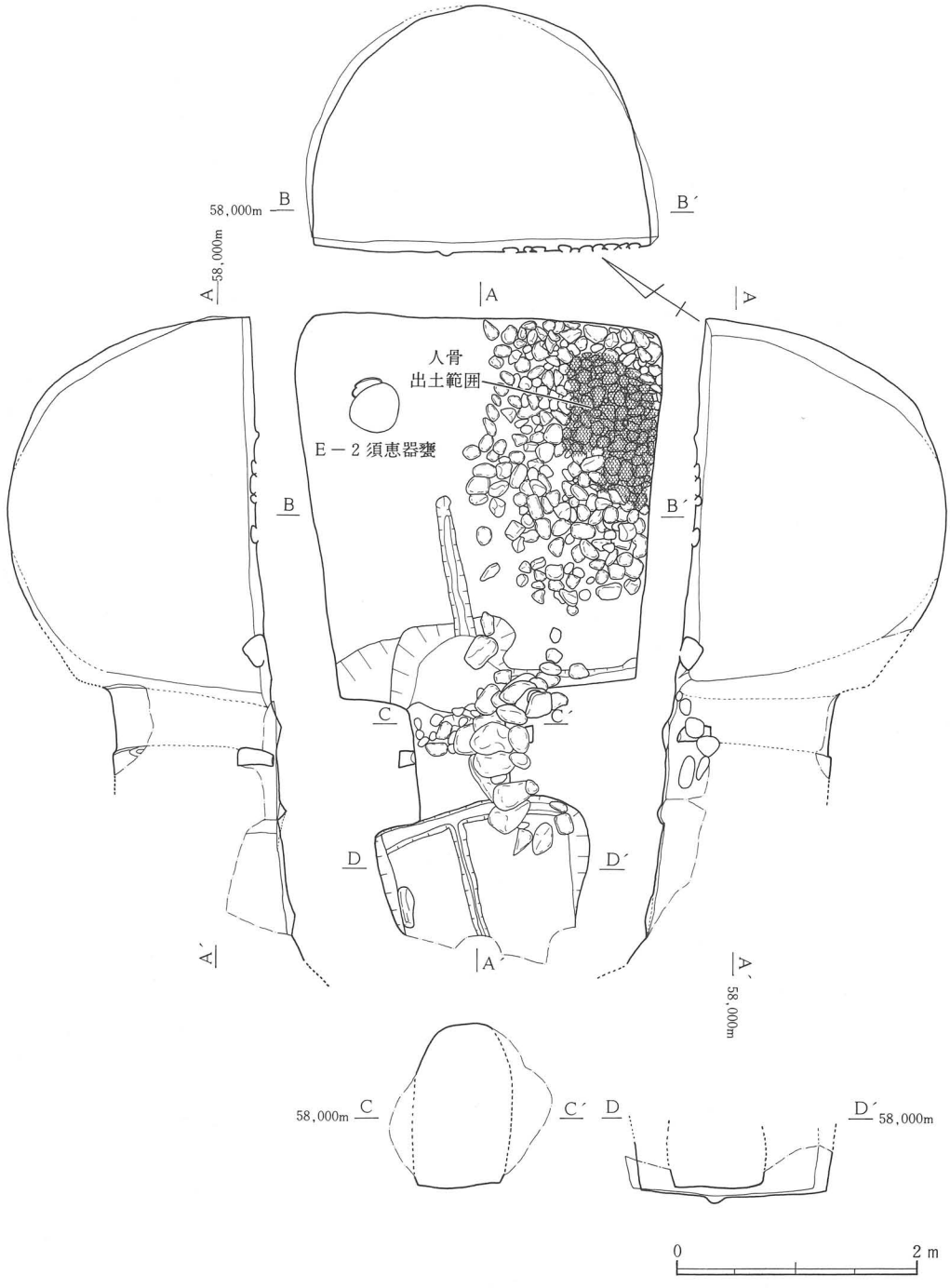
玄門前壁床面には、上幅22cm、深さ4 cm～9 cmの閉塞溝がある。

〈羨道〉　奥行1.50m以上、幅1.45mであるが、前方・上方は削平され不明である。

〈出土遺物〉　土器類は土師器C－4甕、須恵器E－1長頸瓶（第4図）が玄門前から、金属製品はN－14刀装具・刀装具の小破片5点、N－1～13鉄鏃（第4図）・鉄鏃小破片9点、種



第5図　2号墓実測図


58,000m
B
B´
A
58,000m
A´
人骨
出土範囲
E－2 須恵器甕
C
C´
D
D´
58,000m
C
C´
D
D´
58,000m
0
2 m

第6図　3号墓実測図

別不明の鉄片が多数玄室内から出土している。

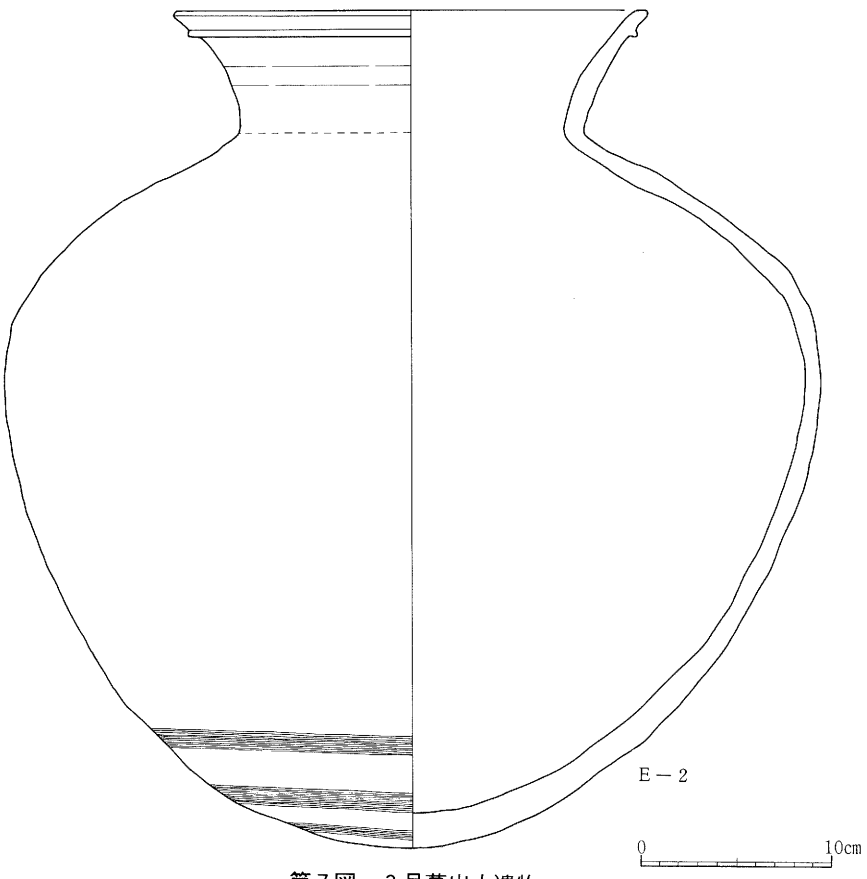
須恵器　E－1長頸瓶は体部ロクロナデ後下部回転ヘラケズリ調整上部に粘土板を張り付けたもので、全体に自然釉が付着している。

金属製品　N－1・4～10・12・13・50は有茎鉄鏃で、特にN－5・9は棘篦被を持つ。N－50鉄鏃は篦被のみ遺存しており、糸状のものが巻かれた跡がある。N－3・11は無茎鉄鏃で鏃身部中心に孔が穿たれている。N－5・7・10～12には黒褐色の樹脂状のもの（ウルシ？）が付着している。

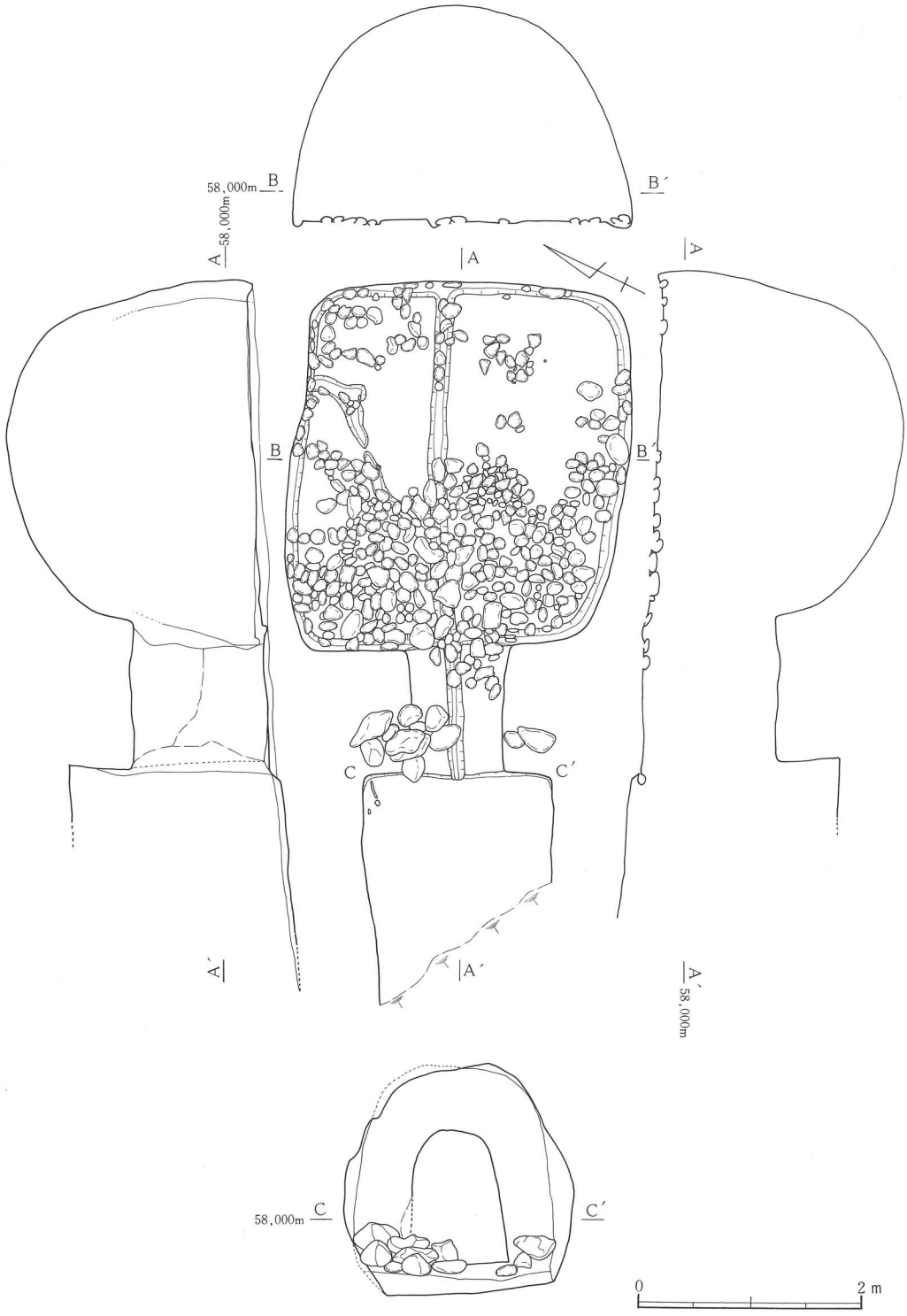
2　号　墓

1号墓の東南側に隣接しており、南東西方向に開口している。玄室レベル差は約2mである。6m上方には12号墓が位置している。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄門から羨道は破壊が著しく詳明は不明である。

〈玄室〉　平面形は中膨らみのほぼ方形で、奥行1.95m、最大幅2.10mを測る。壁は15cm程奥のほうへ膨らんでいる。



第7図　3号墓出土遺物



第8図　4号墓実測図

立面形は変形アーチ形で、高さ1.50mである。

床面はほぼ平坦であり、中軸線に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅10cm～20cmで、深さ約4 cmである。床面右側にのみ石敷がみられる。

玄室内壁のノミ工具痕は10cm～13cmの幅広のものと5 cm～7 cmの楔形のものの2種類がみられ、ほとんどが上下方向であるが天井部分は入口から奥方向にみられる。

〈玄門〉　玄室中軸よりやや左側に寄っており、奥行50cm、幅40～60cmである。上部は削平のため立面形は不明である。

排水溝は玄室から続いており、上幅27cm、深さ5.70cmである。

玄門前壁床面には、上幅23cm、深さ6～7 cmの閉塞溝がある。

〈羨道〉　奥行80cm以上であるが、左側、上方は削平のため幅・立面形は不明である。

〈出土遺物〉　種別不明の鉄片が14点、玄室内から出土している。

3　号　墓

2号墓の東約6 mに位置し、玄室床面レベルはほぼ同一である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、羨道の上方・前方は削平のため不明である。

〈玄室〉　平面形は奥行が広く、やや羽子板状の方形を呈し、奥行3.30m、幅2.50～3.10mを測る。

立面形はドーム形で、高さ2.10mである。

床面は玄門に向かって傾斜しており、中軸線から10°左にふれて排水溝が施されている。排水溝は、上幅12cm～15cm、深さ約5 cmである。右奥の1.5×2.4mの範囲に径10～15cm程の円礫による石敷がみられる。

玄室内壁のノミ工具痕は上から下へ約10cmの幅広の縦方向のものと右上から左下へ7 cmの斜め方向のものの2種類ある。

〈玄門〉　玄室中軸より15cm程左側に寄っている。両側壁が崩落しているがアーチ形を呈しており、高さ1.35m、床面は幅75cm、奥行90cmである。

玄門前壁床面には、上幅15cm、深さ2 cmの閉塞溝が施され閉塞石が一部残存する。

〈羨道〉　奥行1.45m以上、幅1.40～1.50mで、前方・上方は削平のため立面形は不明である。

〈出土遺物〉　玄室右奥より須恵器E－2大甕（第7図）、玄室右側石敷上より人骨が出土している。須恵器E－2大甕は外面は格子叩き、内面は平行当て具痕がみられる。人骨は4体分とみられる頭蓋骨等でやや散乱状態であり遺存状況は良くない。

4　号　墓

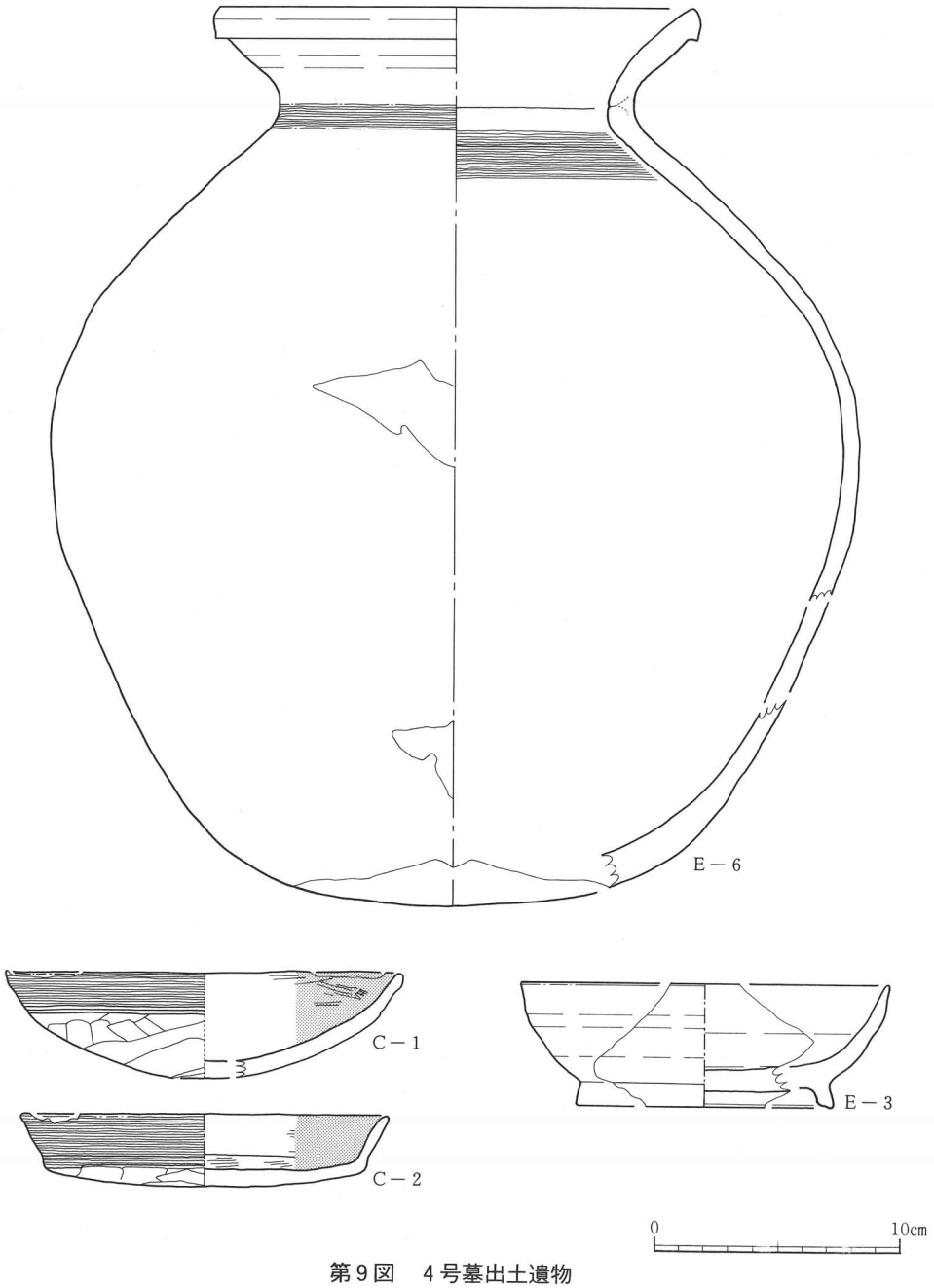
3号墓の東約4.50mに位置し、玄門で約2.50m奥に入っているが玄室床面レベルはほぼ同一

である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、羨道前方は削平のため不明である。

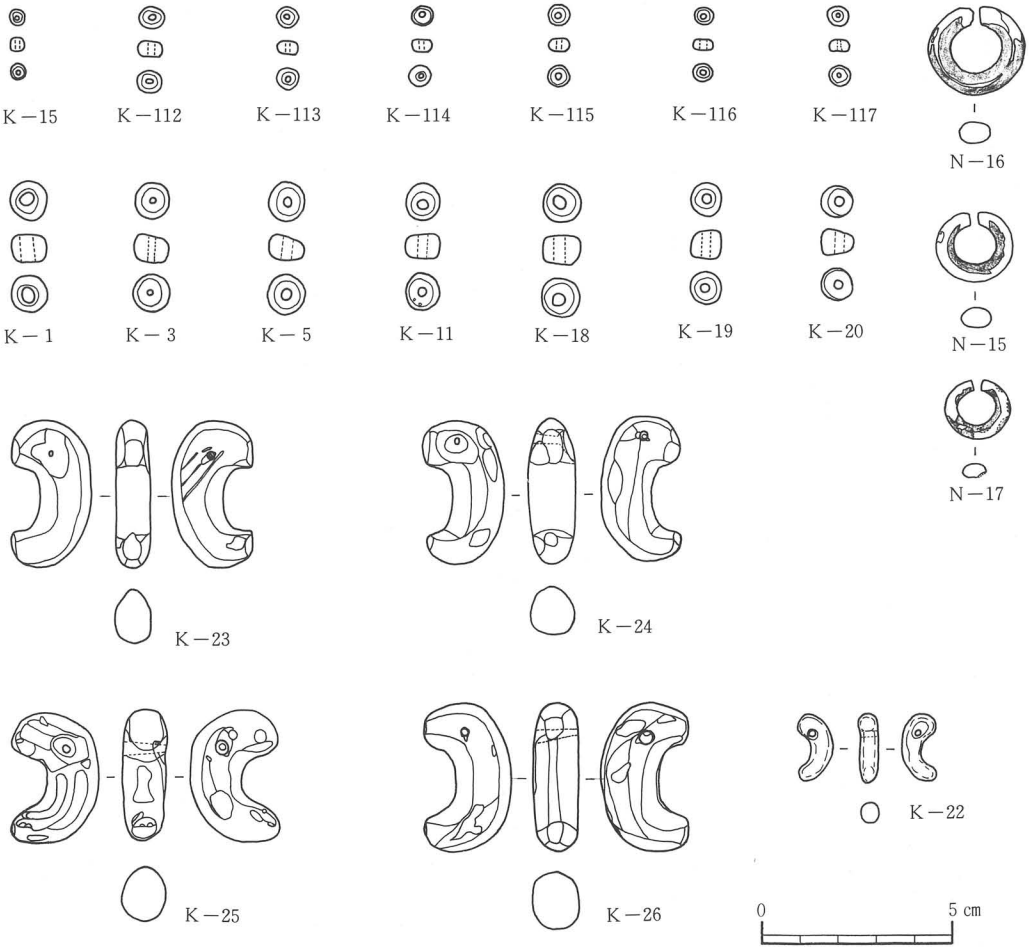
〈玄室〉　平面形はほぼ正方形を呈し、奥行3.25m、最大幅3.00m を測る。

立面形はドーム形で、高さ2.18m である。

床面は前半部に径10～20cm 程の円礫による石敷がみられる。石敷下面の床面は玄門に向かってわずかに傾斜しており、壁面四周と中軸線に沿うように排水溝が施こされており、左側



第９図　４号墓出土遺物



第10号　4号墓出土遺物

部分には壁際の排水溝から真中の排水溝へ斜めに排水溝がある。排水溝は上幅13cm～16cmで、深さ6 cm～8.5cmである。

玄室内壁のノミ工具痕は全て縦方向で、11cm～12cmの幅広の仕上げのものと6 cmぐらいの荒掘りのものの2種類がみられる。

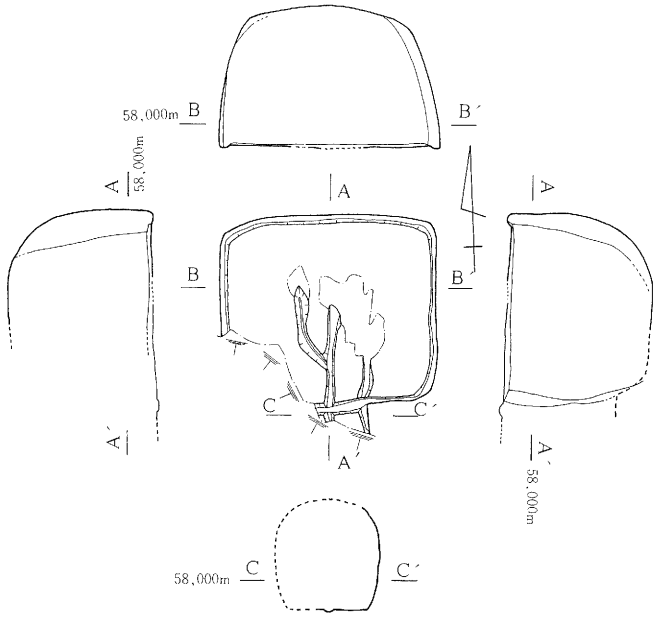
〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、立面形はアーチ形を呈する。床面は奥行1.10m、幅80～110cm、高さ1.20mである。

排水溝は玄室から続いており、上幅14cm、深さ5 cmである。閉塞石が一部残存する。

〈羨道〉　玄室・玄門のほぼ中央に位置し、立面形はアーチ形を呈する。奥行2.05m以上、幅1.65～1.70m、高さ1.90mであるが、前方は削平のため不明である。

〈出土遺物〉　土器類は土師器C－1・2（第9図）・3坏、須恵器E－3坏・E－6大甕（第9図）・E－7短頸壷、E－8甕が玄門前から、金属製品はN－15～17耳環（第10図）、刀子の

破片１点、玉類はＫ－２・４・６～10・13～17・21小玉（小）、Ｋ－112～117小玉（中）（第10図）、Ｋ－１・３・５・11・18・19小玉（大）（第10図）、Ｋ－22～26勾玉（第10図）、Ｋ－20臼玉（第10図）がそれぞれ玄室内から出土している。



第11図　５号墓実測図

土師器　Ｃ－１・２坏はいずれも外面ヨコナデ後ヘラケズリ、内面ヘラミガキ黒色処理が施されている。

須恵器　Ｅ－３坏は高台付きで全体をロクロナデ調整している。Ｅ－６大甕は外面格子叩き、内面同心円当て具痕がみられる。Ｅ－７短頸壷は外面ロクロナデ調整で、肩部分に横沈線で区画される２列の櫛描文が断続的に施されている。

金属製品　Ｎ－15～17耳環はいずれも銅環に鍍金を施したもので、外形はほぼ円形で、断面形の扁平円形である。

玉類　Ｋ－２・４・６～10・13～17・21小玉（小）は直径が3.70mm前後、孔径が約１mmで材質はガラスである。Ｋ－112～117小玉（中）は直径5.10～6.20mm、孔径が1.20～1.50mmで材質はガラスである。Ｋ－１・３・５・11小玉（大）は直径が8.50～10.0mm、孔径が1.70～3.50mmで材質はガラスである。Ｋ－18・19小玉（大）は、材質が蛇紋岩である。Ｋ－22勾玉は長さ17.3mm、幅9.05mmと小型で、材質はガラスである。中に気泡があり、それが流れていることからガラスを引き延ばして作ったと思われる。Ｋ－23～26勾玉は材質は瑪瑙で、いずれも一方から孔が穿たれている。

5　号　墓

4号墓の東南約4 m程に位置し、開口方向が4号墓にほぼ直交する南向きである。隣接する6・7号墓を含む3基はほぼ同方向に開口し、規模も近似している。5号墓床面レベルは4号墓とほぼ同一である。玄室、玄門からなっているが、玄室天井から左前部及び玄門の左側大部分、羨道の全ては削平され不明である。

〈玄室〉　平面形はほぼ正方形を呈し、奥行1.50m、最大幅1.70m を測る。

立面形はアーチ形で高さ1.15m である。

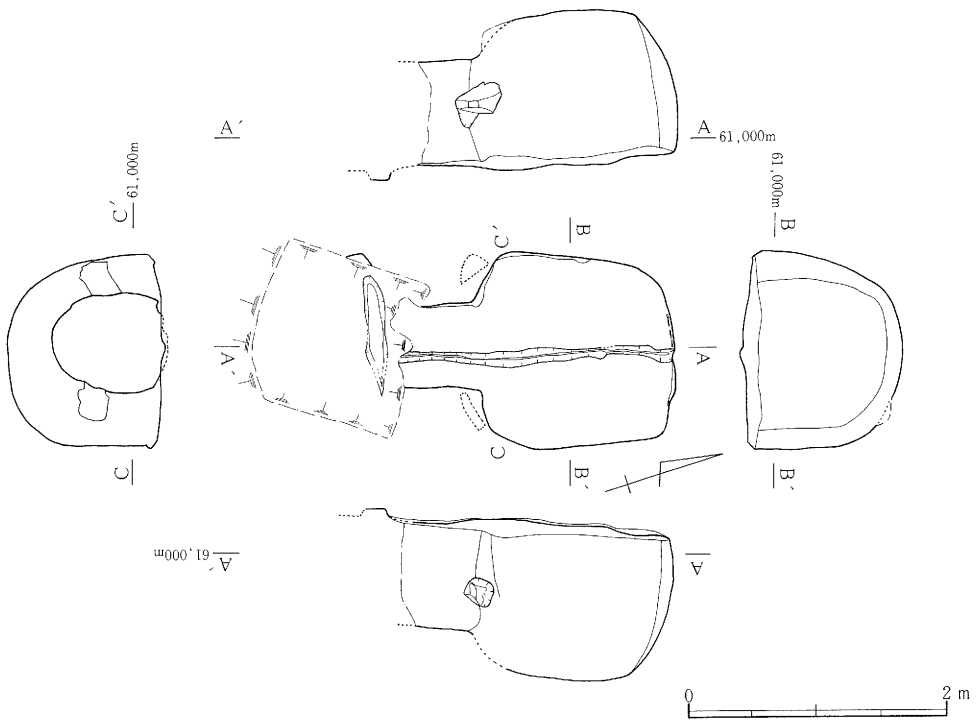
床面は左前部が削平されて不明であるが、現存部はそれぞれ平坦であり、壁面際と中軸線に沿うように排水溝が施され左側部分には真中の排水溝へ斜めに排水溝がある。排水溝は上幅4 cm～6 cm、深さ約3 cm である。

玄室内壁のノミ工具痕は奥壁は5 cm～11cm で縦方向に上から下へ、右壁は8 cm～11cm で斜め方向に右上から左下へ、左壁は4 cm～5 cm で縦方向に上から下へ、天井部分は右側部分が右から左へ、左側部分が左から右へ、それぞれ10cm 幅でみられる。

〈玄門〉　右端の一部が残っているが、幅・奥行・高さ等詳明は不明である。

〈羨道〉　削平のため不明である。

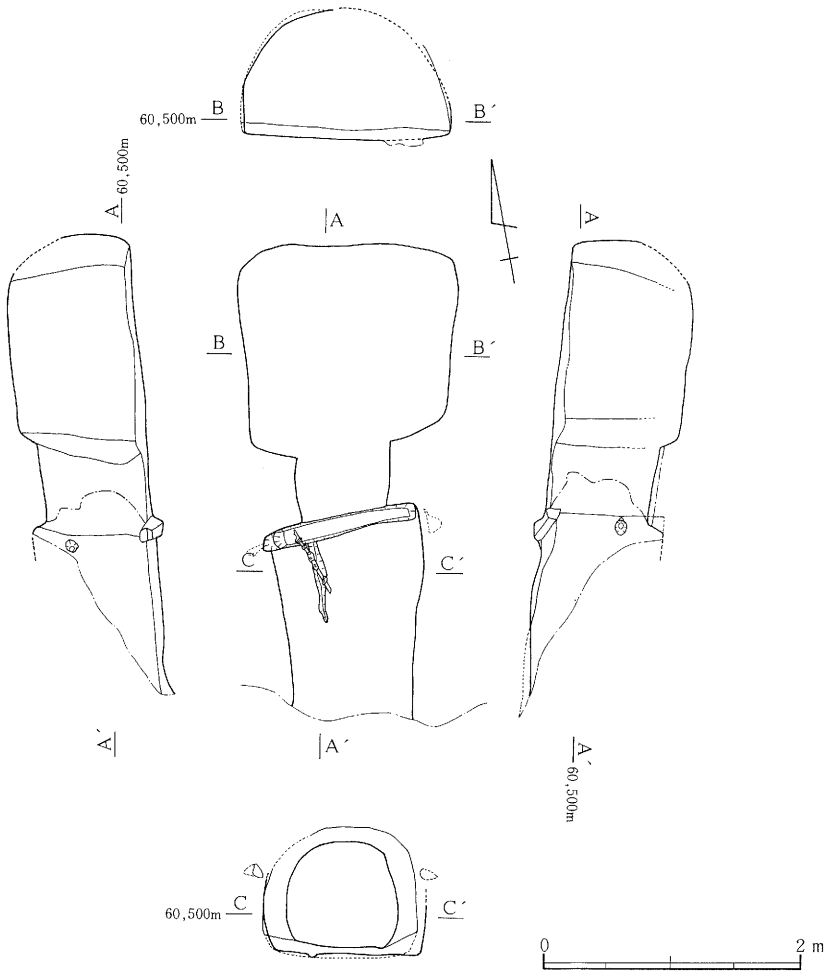
〈出土遺物〉　玄室床面より、炭化物が若干出土しているのみである。



第12図　6号墓実測図

6 号 墓

5号墓の北、斜面左上方4 m程にほぼ同方向に開口して位置しており、玄室は4号墓のほぼ真上3 mにあたる。玄室・玄門からなっているが、羨道は全て削平され不明である。



第13図　7号墓実測図

〈玄室〉　平面形はやや歪んだ正方形を呈し奥行1.55m、最大幅1.55m を測る。

立面形はアーチ形で、高さ1.23m である。

床面は玄門に向かってやや傾斜しており、中軸線に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅8 cm～9 cm で、深さ5 cm である。

玄室内壁のノミ工具痕は奥壁では中央部9 cm、両側では6 cm～7 cm で縦方向に上から下へ、右壁は9 cm～12cm で斜め方向に右上から左下へみられる。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、立面形はアーチ形で、床面は奥行70 cm、幅65cm、高さ

83cm である。

排水溝は玄室から続いており、上幅 8 cm、深さ約 3 cm である。羨道移行部分は両側とも開き出すものとみられるが、右前端は削平のため不明である。玄門前壁床面には上幅約15cm、深さ約 7 cm の閉塞溝がある。

〈羨道〉　削平のため不明である。

〈出土遺物〉　N－18刀子（第15図）が出土している。N－18刀子は錆化が著しく、遺存状況は不良であるが、一部に布目状圧痕がある。

7　号　墓

6 号墓の東南 3 m 程、5 号墓の右上方2.50m 程に位置し、6 号墓とほぼ同方向に開口している。玄室床面レベルは 5 号墓より2.30m 高く、6 号墓より0.80m 下である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、羨道前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形はやや歪んだ正方形を呈し、奥行1.65m、幅1.55～1.72m を測る。

立面形はアーチ形で、高さ1.00m である。

床面は玄門に向かって傾斜している。

玄室内壁のノミ工具痕は幅10cm で縦方向にみられる。

〈玄門〉　玄室中軸よりやや左側に寄っており立面形はアーチ形で、床面は奥行50cm、幅75cm、高さ85～90cm である。

玄門前壁床面には、上幅約14cm、深さ 6 cm の閉塞溝がある。

〈羨道〉　玄室、玄門より更に左側に寄っており、立面形はアーチ形で奥行1.70m 以上、床面幅0.93～1.18m、高さ0.95m である。前方は削平のため不明である。

〈出土遺物〉　金属製品のN－19刀子（第15図）、平根の鉄鏃破片が 1 点玄室内より、N－20直刀（第15図）が羨道左側より出土している。

金属製品　N—19 刀子は鉄製で区が付いており、茎部に木質が遺存している。N—20 直刀は鉄製で、錆化が著しいが鉄製の鍔も伴っていた。茎部に木質が遺存している。

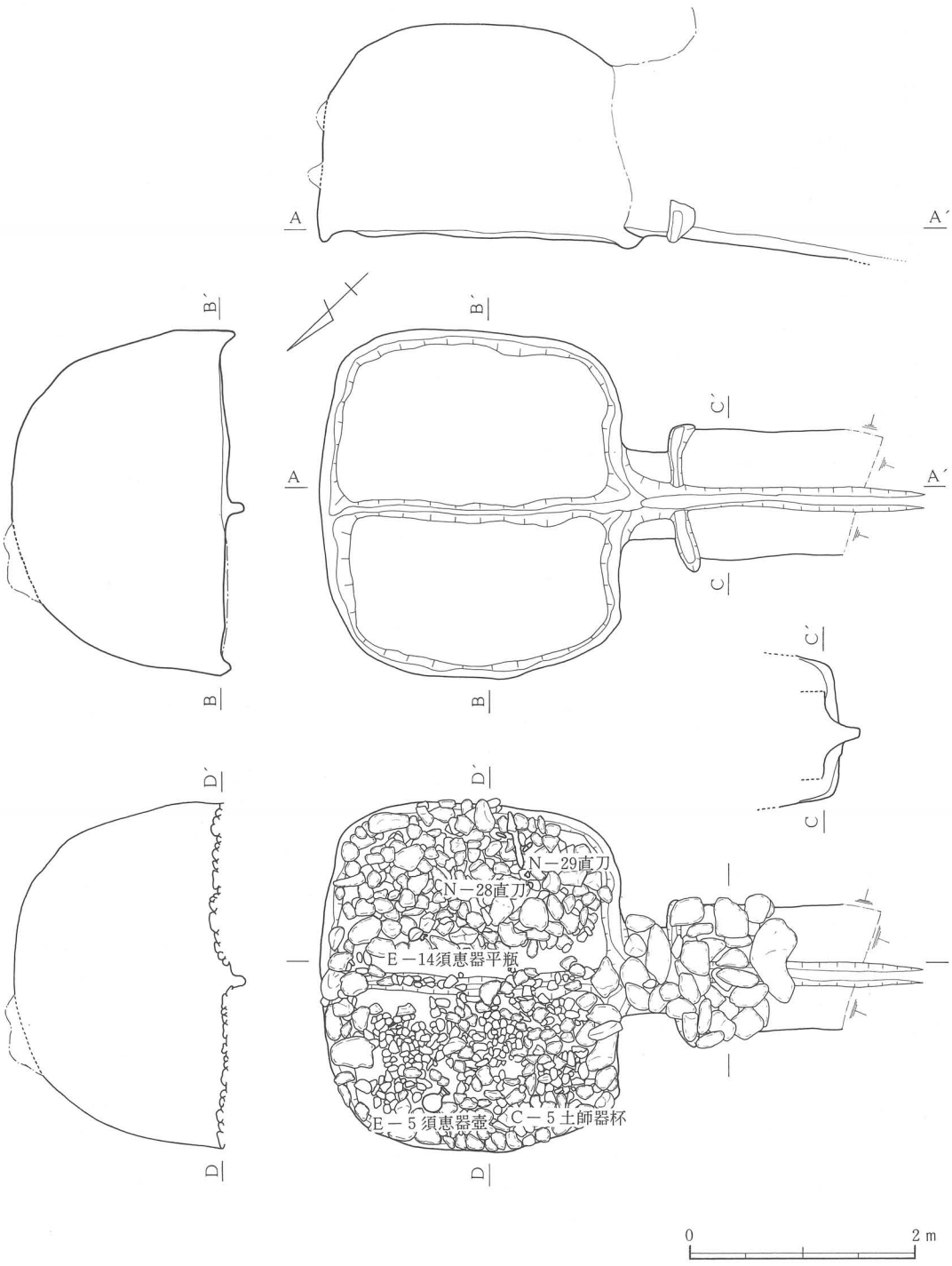
8　号　墓

7 号墓の東南 7 m に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは 2・3・4・5 号墓とほぼ同一である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄門天井から羨道前方は削平され不明である。

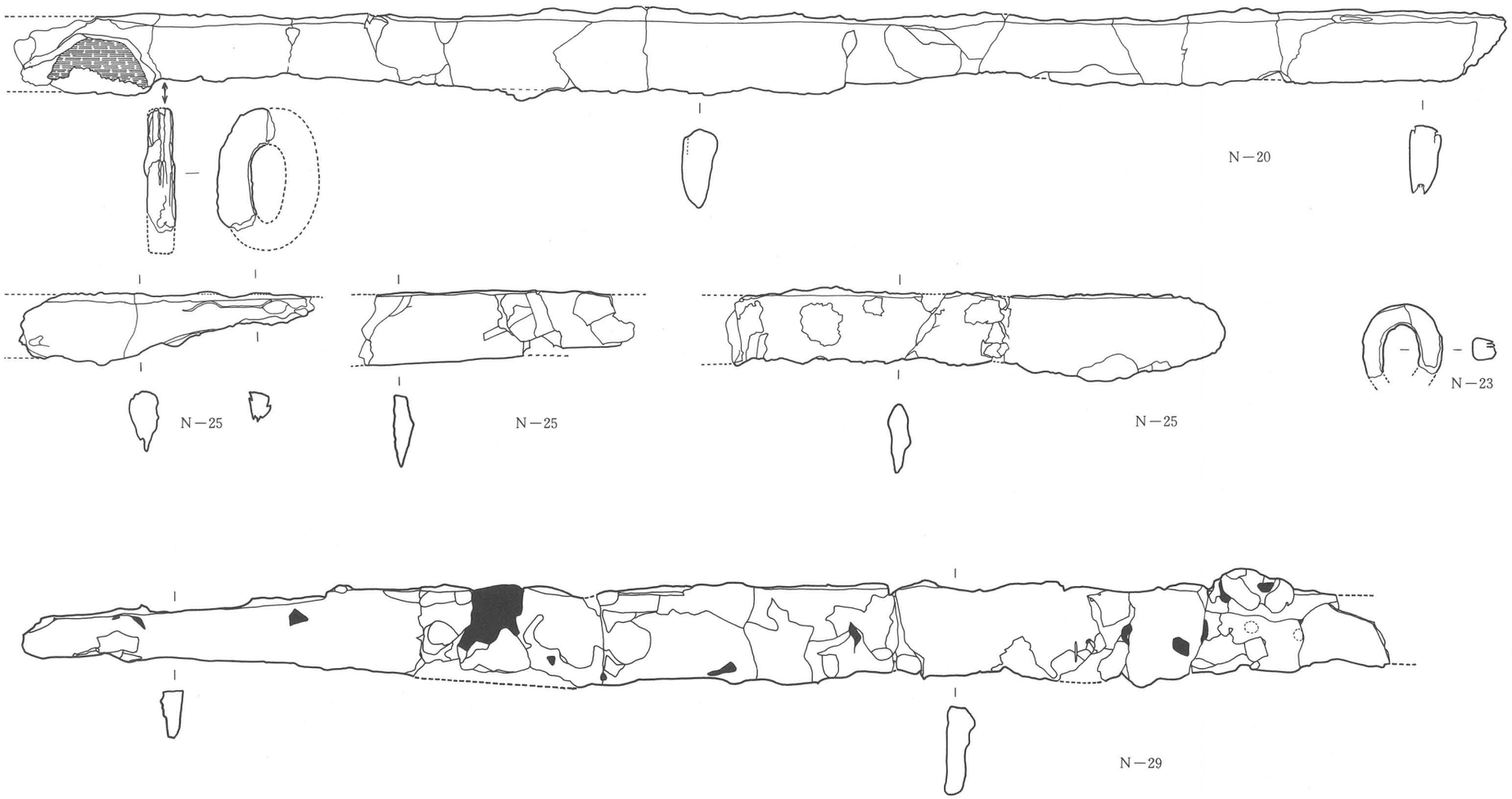
〈玄室〉　平面形はやや歪んだ円形に近い隅丸方形を呈し、奥行2.70m、最大幅3.10m を測る。

立面形は変形アーチ形で、高さは石敷上面で1.80m、下面で1.90m である。

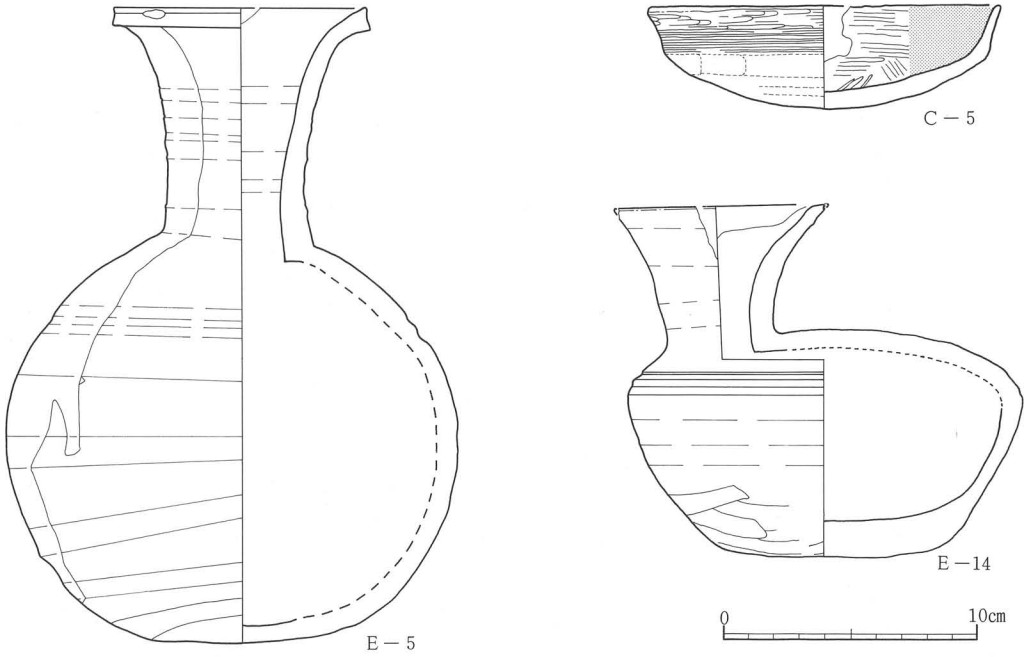
床面上には全面に拳大から人頭大の円礫による石敷がされており、床面はほぼ平坦である。



第14図　8号墓実測図



第15図　6・7・8号墓出土遺物



第16図　8号墓出土遺物

壁面と中軸線に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅15cm～25cmで、深さ約14cmである。

玄室内壁のノミ工具痕は最大幅10cm、長さ30cmで床面から90cmの高さ以上に、縦方向と斜め方向のものの2種類ある。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置しているが、天井部は削平のため立面形は不明である。

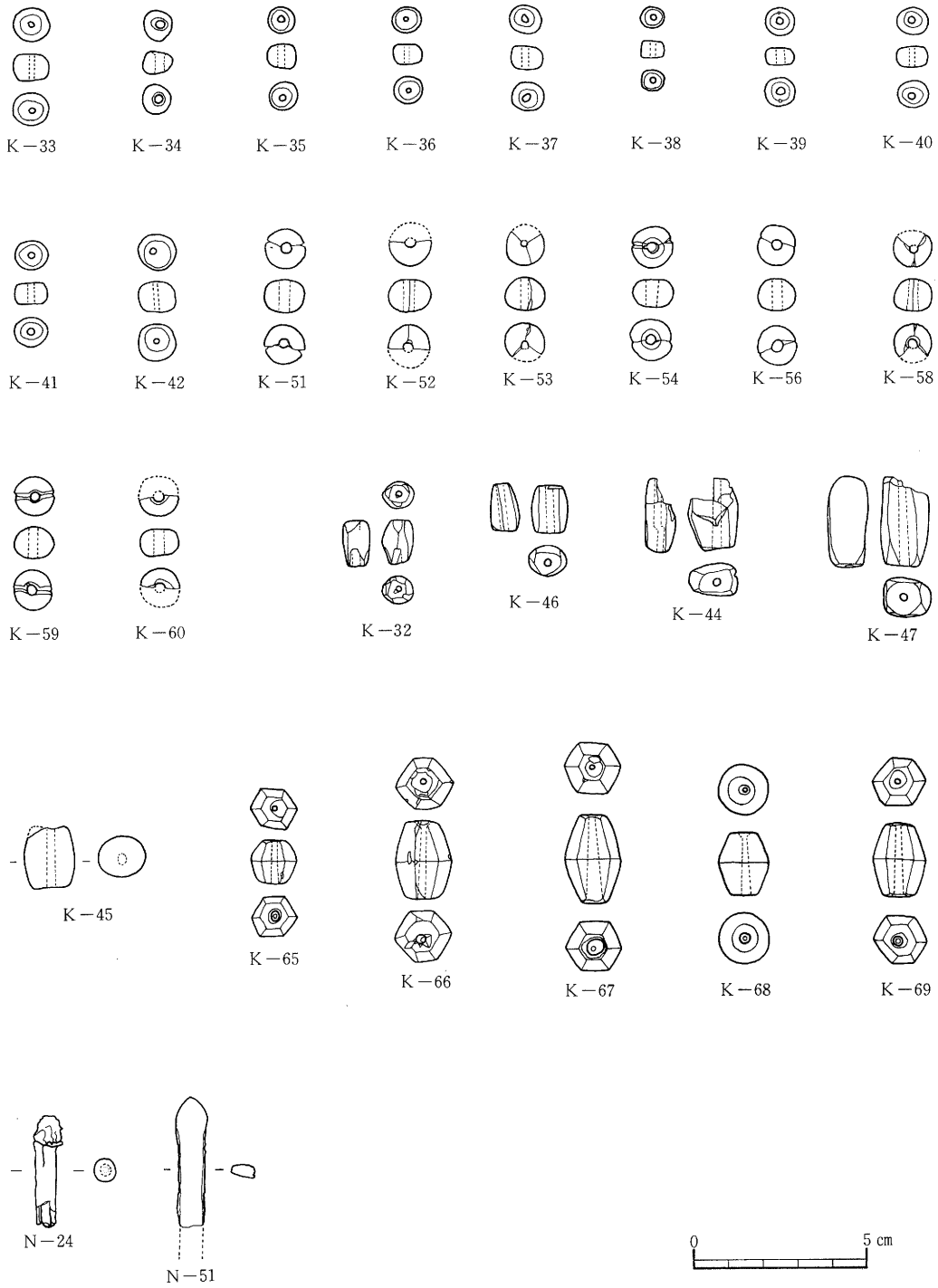
床面は奥行40cm、幅80cmである。

排水溝は玄室から続いており、上幅約33cm、深さ8.40cmである。

玄門前壁床面には、上幅10～17cm、深さ9 cmの閉塞溝がある。又、人頭大以上の礫による閉塞石がみられる。

〈羨道〉　玄室、玄門のほぼ中央に位置しており、前方・上方は削平のため立面形は不明である。奥行1,75m以上、床面幅1.10～1.15mである。

〈出土遺物〉　土器類は土師器C－5坏（第15図）、須恵器E－5長頸壷（第16図）、E－14平瓶（第16図）が玄室内から出土し、金属製品はN－21・23・27鍔（第15図）、N－25・28・29直刀（第15図）、N－26刀装具、N－24両頭金具（第17図）、刀子の小破片が5点、種別不明の鉄片が多数、玉類はK－27～29・31・43・118小玉（小）・K－30・33～42小玉（大）（第17図）、



第17図　8号墓出土遺物

K－44～47扁平棗玉（第17図）、K－32棗玉（第17図）がそれぞれ玄室内から出土している。

土師器　C－5坏は外面ナデ後口縁部ヘラミガキ底面ヘラケズリ調整、内面ヘラミガキ黒色処理が施されている。

須恵器　E－5長頸壷は外面ロクロナデ後回転ヘラケズリ調整で、全体に自然釉が付着している。E－14平瓶は外面頸部ロクロナデ、体部回転ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ調整が施されている。

金属製品　N－21鍔は長径63mm、短径47mm、身厚5 mmである。N－23鍔は比較的小型の鉄製喰み出し鍔と思われる。N－27鍔は長径80mm、短径65mm、縁厚4～7 mm、身厚3 mmで倒卵形を呈し錆化が著しいが6窓である。N－28直刀は錆化が著しいが、刀身の一部と茎部に木質が遺存しており、刀身部に小型に金銅製鍔と金銅製吊手孔付足金具の一部が残存する。N－29直刀も錆化が著しく、刀装具の痕跡はみられない。N－26刀装具は、金銅製の吊手孔付足金具で、N－28直刀のものと思われる。

玉類　K－27～29・31・43・118小玉(小)は直径3.70mm前後、孔径約1 mm、材質はガラスである。K－30・33～42小玉(大)は直径8 mm前後、孔径約1.90mm、材質はガラスである。K－65～69切子玉は長さ12.8mm～24.8mm、径が11.6mm～16.3mm、K－65～67・69は断面形が六角形であるが、K－68は断面形円形の算盤玉状である。材質はいずれも水晶である。K－51～54・56～60・64丸玉は直径8.90mm前後、孔径1.15mm、材質は淡黄緑の翡翠である。K－44～47扁平棗玉は風化が著しく、一部破損したものが多い。材質は琥珀である。K－32棗玉は長さ12.2mm、直径は7.50mmの黒色であるが、材質は不明である。

9　号　墓

8号墓の南5 m程に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは8号墓より約3.50 m下である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄門天井から羨道前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形は長方形を呈し、奥行3.05m、最大幅2.65mを測る。

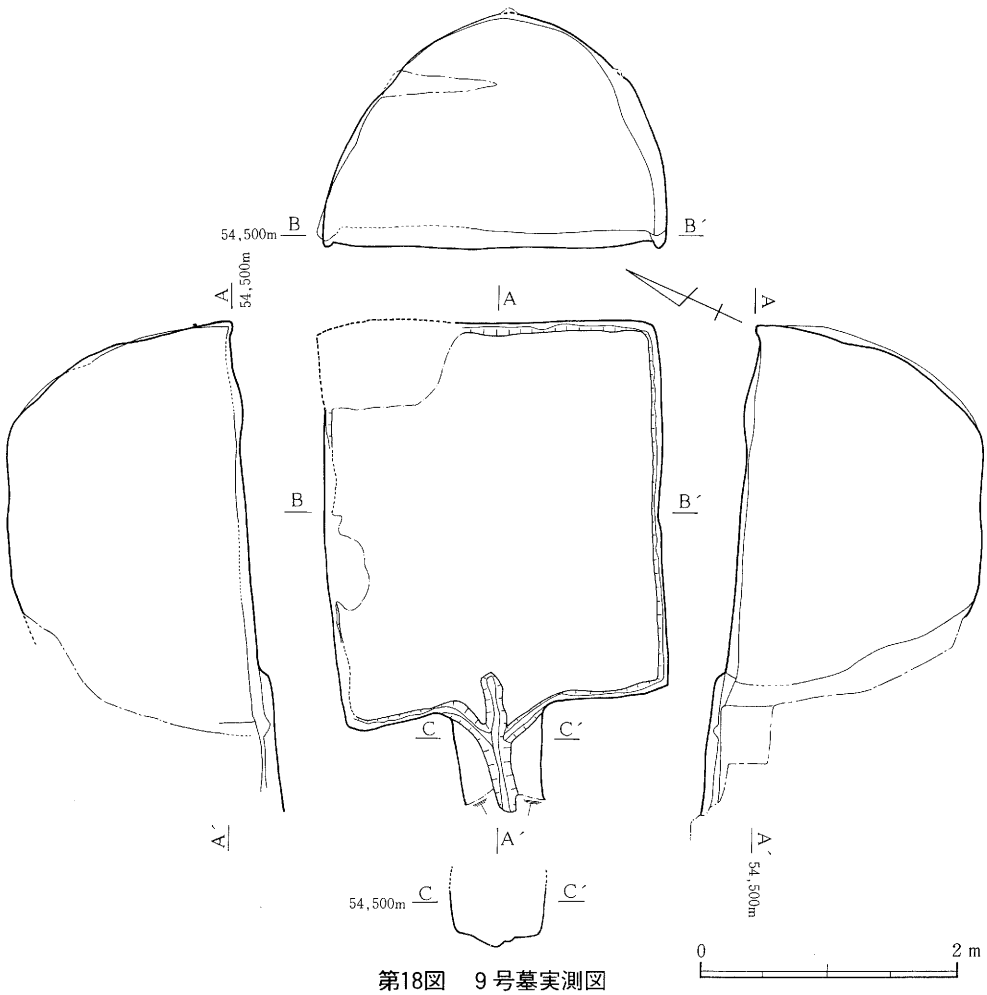
立面形はアーチ形で、高さ1.83～1.88mである。

床面は玄門に向かって傾斜しており、壁際の一部と中軸線に沿う入口付近に排水溝が施されている。排水溝は、上幅6 cm～9 cmで、深さ約6 cmである。

玄室内壁のノミ工具痕は幅14cmと幅5 cmのものの2種類がみられる。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、奥行70cm、床面幅60～70cmを測るが、上部削平のため高さ形状は不明である。

排水溝は玄室から続いており、両側壁際からの溝が中央溝と玄室との境界部分で三叉状に交わり、一本の溝となっている。上幅19cm、深さ9 cmである。



第18図　9号墓実測図

10　号　墓

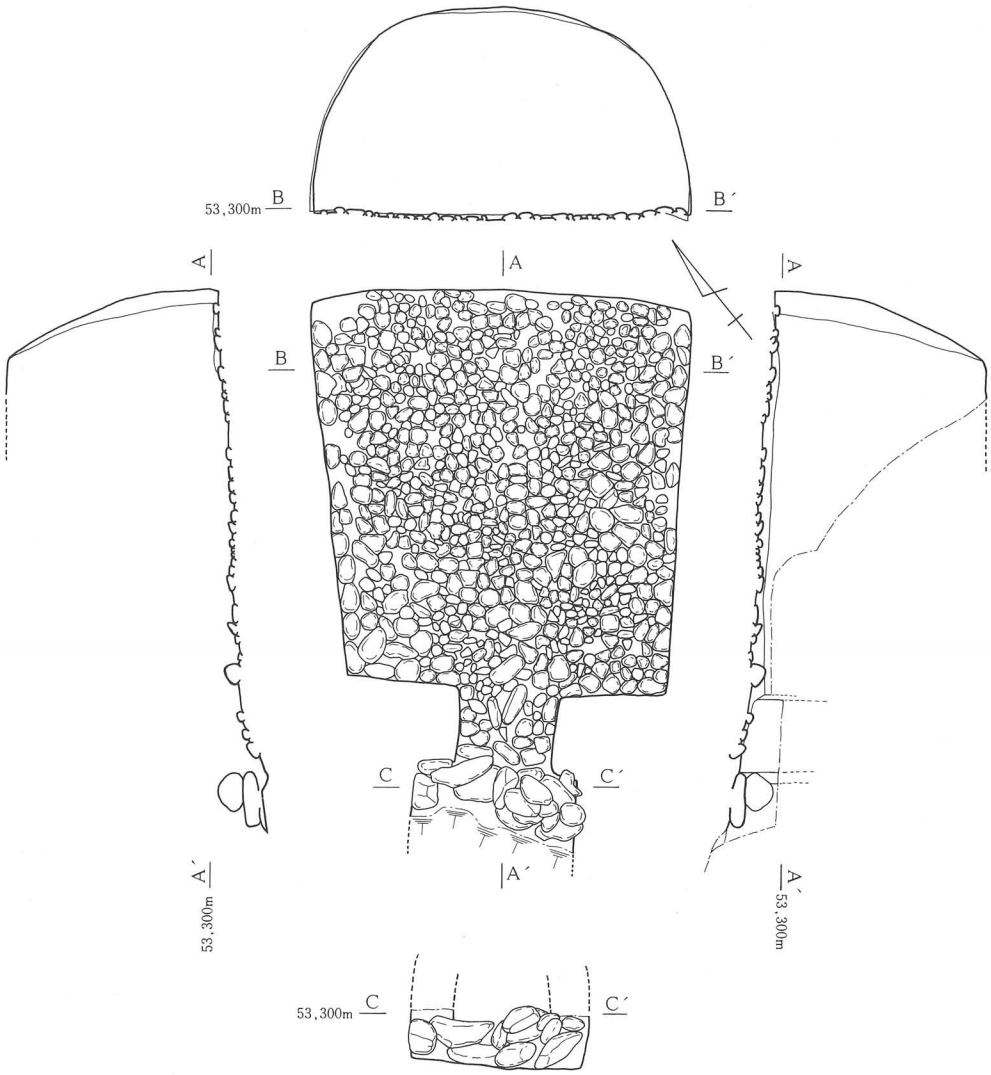
9号墓の南4 m程に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは9号墓より約1 m下である。今回発見した横穴墓群中で南端最下方に位置し、玄室床面標高は53.3m程である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄室天井から羨道前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形はやや歪んだ方形を呈し、奥行3.20m、幅2.50～3.00mを測る。

立面形はアーチ形で、高さは石敷上面で1.70m、下面で1.75mである。

床面には全面に挙大の石敷がある。石敷下面は玄門に向かってわずかに傾斜しており、壁面と中軸線に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅11cm～17cmで、深さ4 cmである。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、奥行60cm、床面幅75cmを測るが、上部削平のため高さ形状は不明である。



第19図　10号墓実測図

床面には、玄室内と同様の石敷が続いている。石敷下面には玄室から続く排水溝がみられ、上幅13cm、深さ 6 cm を測る。

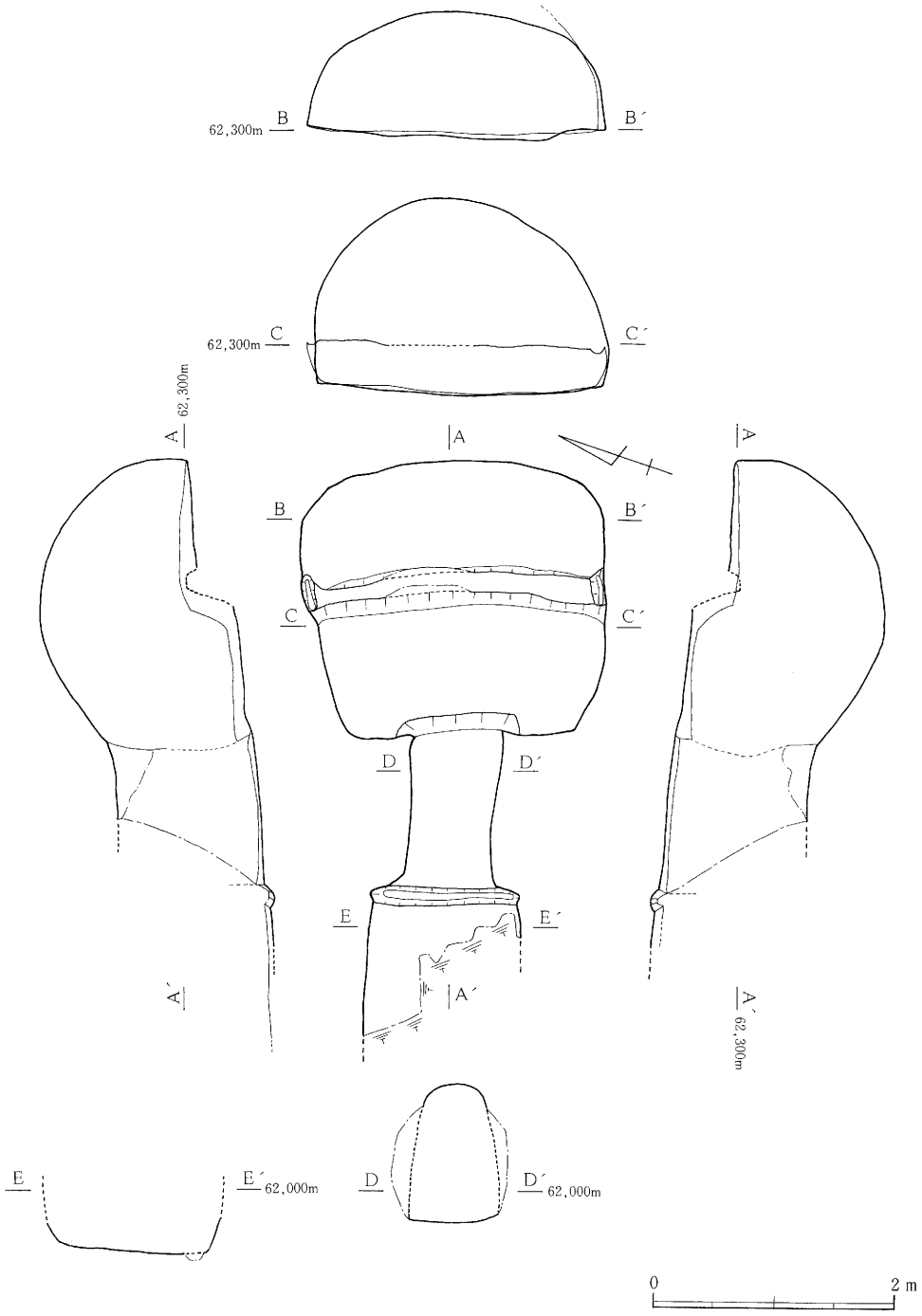
玄門前壁には、人頭大、枕状の閉塞石がみられ、床面には上幅 6 cm～13cm、深さ 6 cm 閉塞溝がある。

〈羨道〉　床面幅80cm、奥行65cm 以上であるが、前方・上方は削平のため不明である。

〈出土遺物〉　種別不明の鉄片が 7 点、玄室内より出土している。

11 号 墓

1 号墓の北西 8 m 程に位置し、西方向に開口している。玄室床面レベルは 1 号墓より2.50m

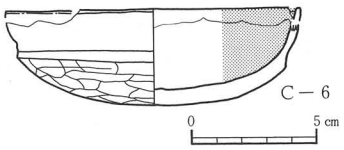


第20図　11号墓実測図

程上である。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、羨道前方は削平され不明である。

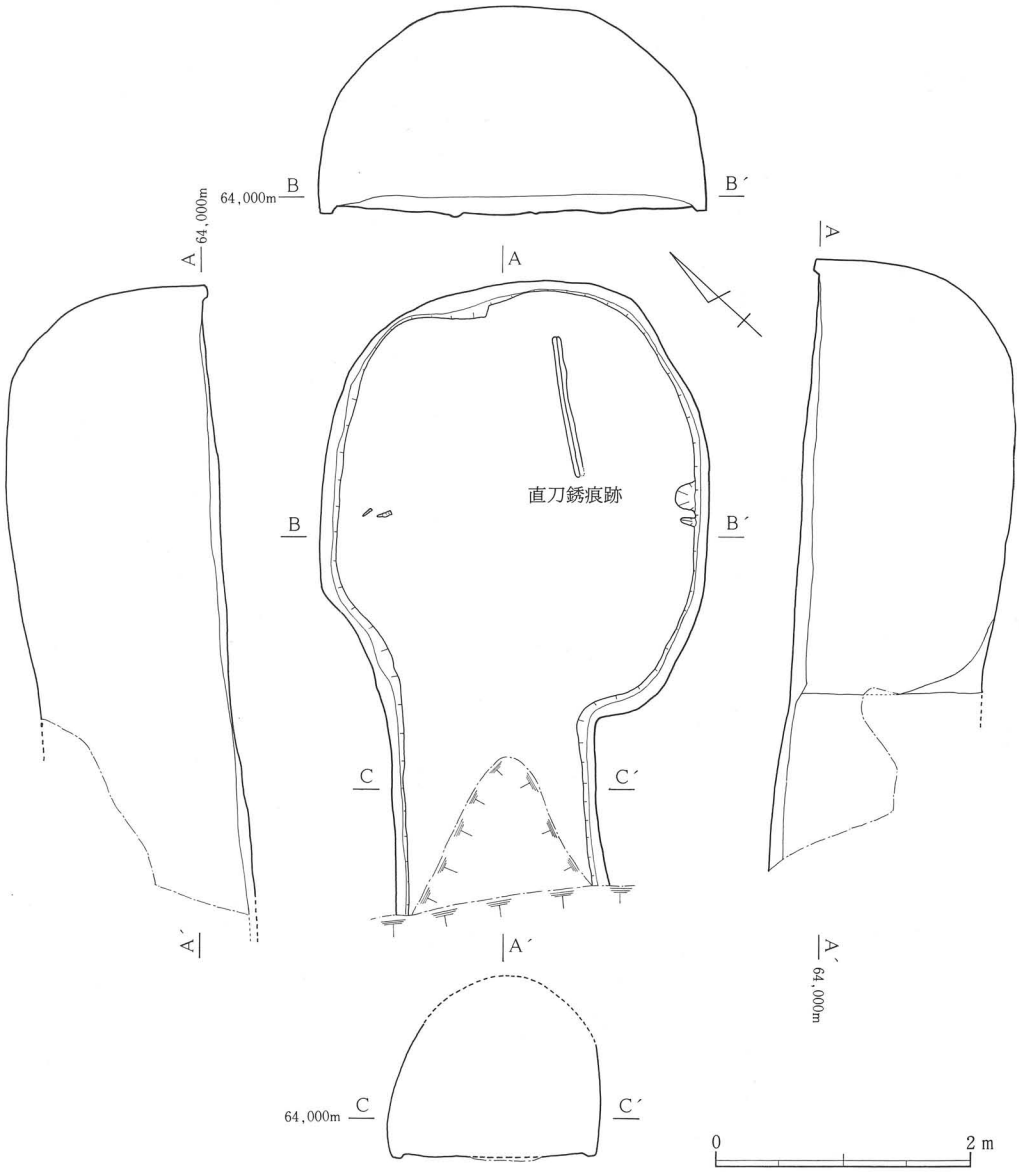
〈玄室〉　平面形は歪んだ隅丸方形を呈し、奥行2.25m、最大幅2.53m を測る。

立面形はドーム形で、高さ1.60m である。



第21図　11号墓出土遺物

玄室奥半には内法幅85～90cm、高さ30cm 程の台床施設があり、台床端部には幅18～20cm、高さ 8 ～ 9 cm 程の縁が付く。



第22図　12号墓実測図

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置し、奥行1.30m、床面幅70～75cm を測る。

立面形はアーチ形で、高さ1.17m である。

玄門前壁床面には、上幅 5 cm～10cm、深さ 5 cm の閉塞溝がある。

〈羨道〉　奥行1.25m 以上、床面幅0.78m であるが、前方・上方は削平のため不明である。

〈出土遺物〉　土器類は土師器C－6坏（第16図）、C－7高坏が出土している。

土師器　C－6坏は外面底部へラケズリ調整、内面の調整は摩滅しているので不明、黒色処理が施されている。C－7高坏は脚部の一部のみ残存し、脚柱部に縦長の透孔がある。

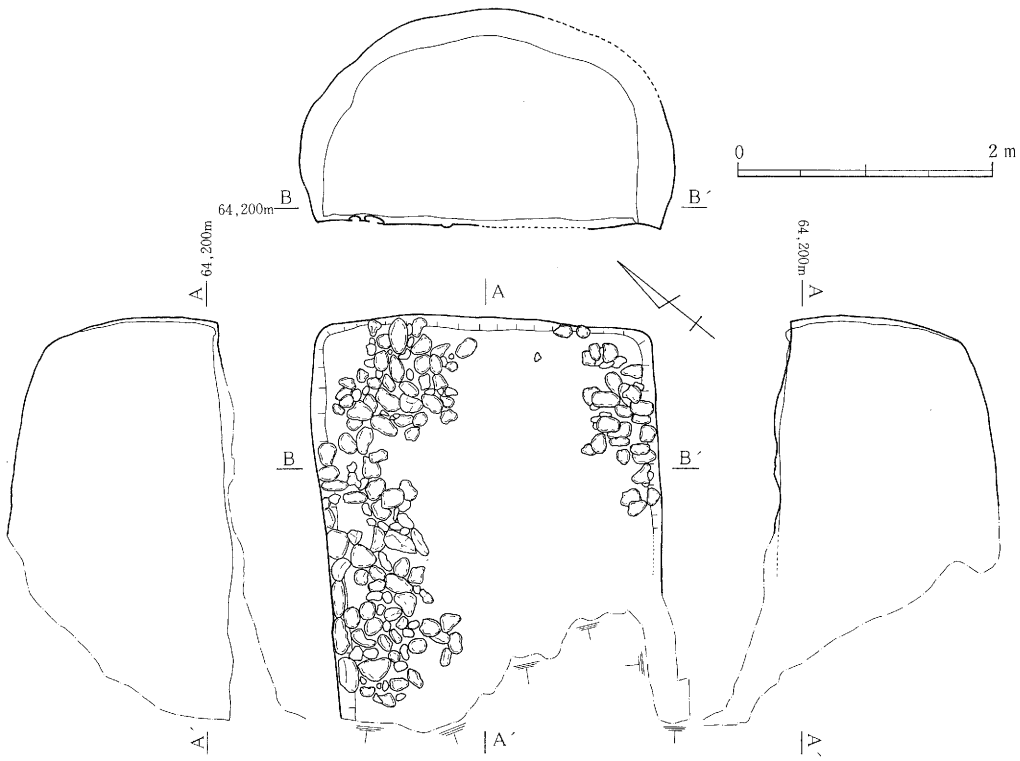
12 号 墓

11号墓の東11m 程、2号墓の斜面上方に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは2号墓より約6 m 上位にある。玄室、玄門の各部からなっているが、玄門天井から羨道前方は削平され不明である。

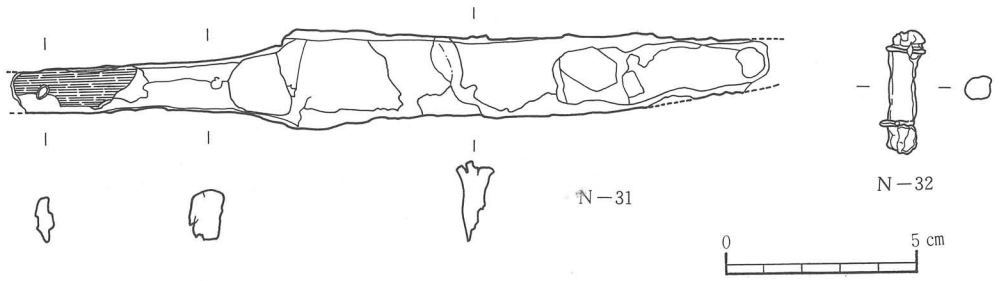
〈玄室〉　平面形は不正楕円形を呈し、各壁の境界は判然としない。奥行3.45m、幅3.07m を測る。

立面形は変形アーチ形で、高さ1.65m である。

床面は玄門に向かって傾斜しており、壁面に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅 8 cm～15cm で、深さ 9 cm である。



第23図　13号墓実測図



第24図　12・13号墓出土遺物

玄室内壁のノミ工具痕は縦方向で、幅は右壁が11～13cm、左壁が 8 ～12cm である。

〈玄門〉　玄室の左側に片寄っており、玄室との壁境界が判然としない。天井・前方は削平され不明である。

床面は幅1.60m、右壁で長さ1.30m 以上である。

排水溝は玄室から続いており、上幅約 9 cm、深さ約 3 cm である。

〈出土遺物〉　N－31刀子（第24図）、種別不明の鉄片が玄室内堆積土中より出土している。N－31刀子は茎部に目釘があり、木質が遺存している。

13　号　墓

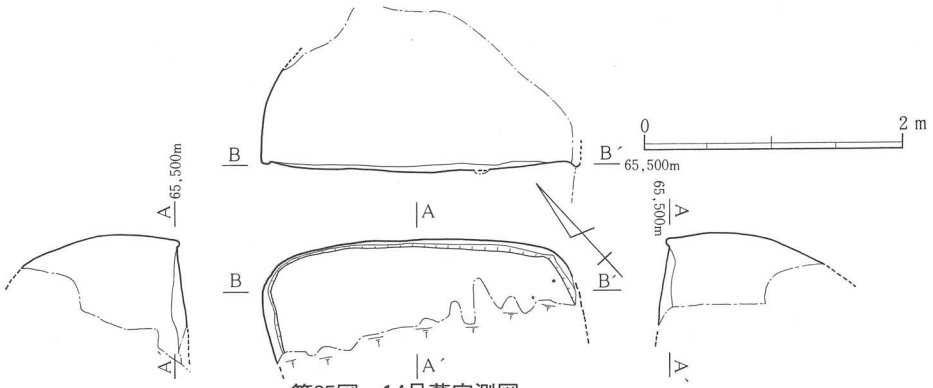
12号墓の北西10m 程、11号墓の斜面直上に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは12号墓とほぼ同一で、11号墓より約 2 m 上位にある。玄室だけが遺存するだけで、玄門から前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形は長方形を呈するとみられ、奥行3.20m 以上、最大幅2.72m を測る。

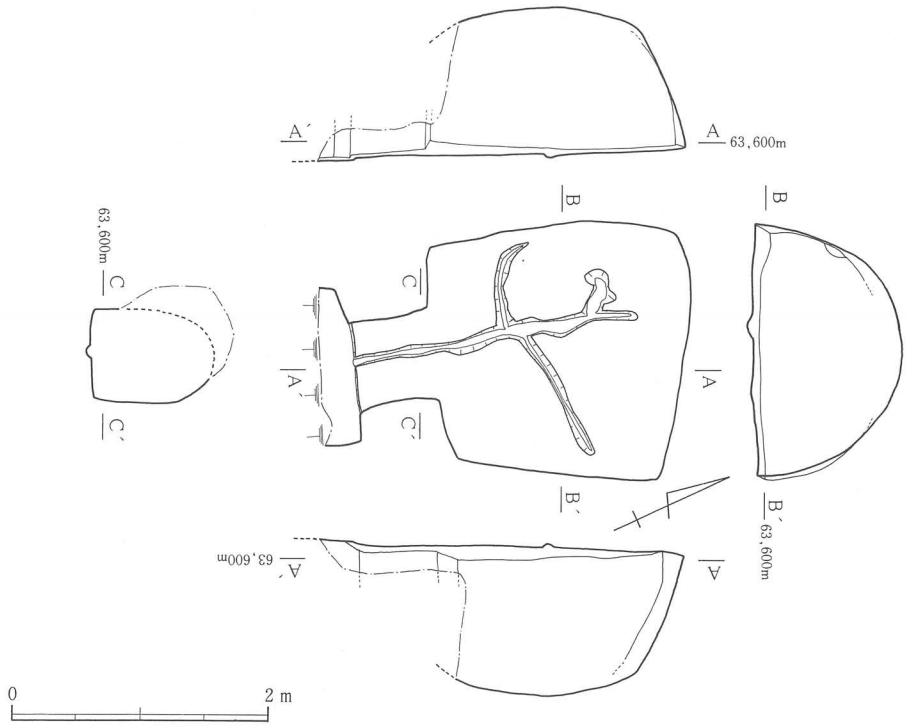
立面形はアーチ形で、高さ1.70m である。

床面は玄門に向かってわずかに傾斜しており、拳大の円礫がほぼ全面に敷かれている。石敷下部には壁面に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅 5 cm～10cm で、深さは6.50 cm である。

玄室内壁のノミ工具痕は奥壁の上半部は縦方向、下半部は斜方向に中央から左右へ、右壁は天井から縦方向、下半部は斜方向に外から内へ、左壁は天井から縦方向に、それぞれ 6 cm



第25図　14号墓実測図



第26図　15号墓実測図

～11cm の幅でみられる。

〈出土遺物〉　N－32（第24図）両頭金具・両頭金具の小破片が 6 点、種別不明の鉄鏃片が多数玄室内堆積土中より出土している。

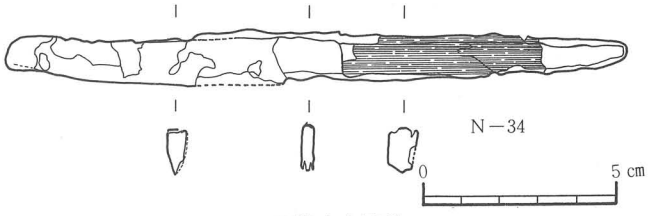
14　号　墓

13号墓の北西 6 m 程に位置し、南南西方向に開口している。玄室床面レベルは13号墓より 1.50m 程上位にある。玄室奥壁の下半が遺存するのみで、大部分は削平され、詳明は不明である。

〈玄室〉　残存幅2.43m であるが、その他規模・形状等は不明である。

現存部分の床面は玄門に向かって傾斜しており、壁面に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅 5 cm～10cm で、深さ 3 cm である。

〈出土遺物〉　K－12小玉（小）が玄室内敷石直上より出土している。材質はガラスである。



第27図　15号墓出土遺物

15 号 墓

14号墓の斜面直下方に位置し、南南西方向に開口している。玄室床面レベルは14号墓より 2 m 下位にあり、玄室奥壁位置は14号墓より 2 m 程前方に位置している。玄室、玄門、羨道の各部からなっいるが、天井部分から羨道前方は削平されており不明である。

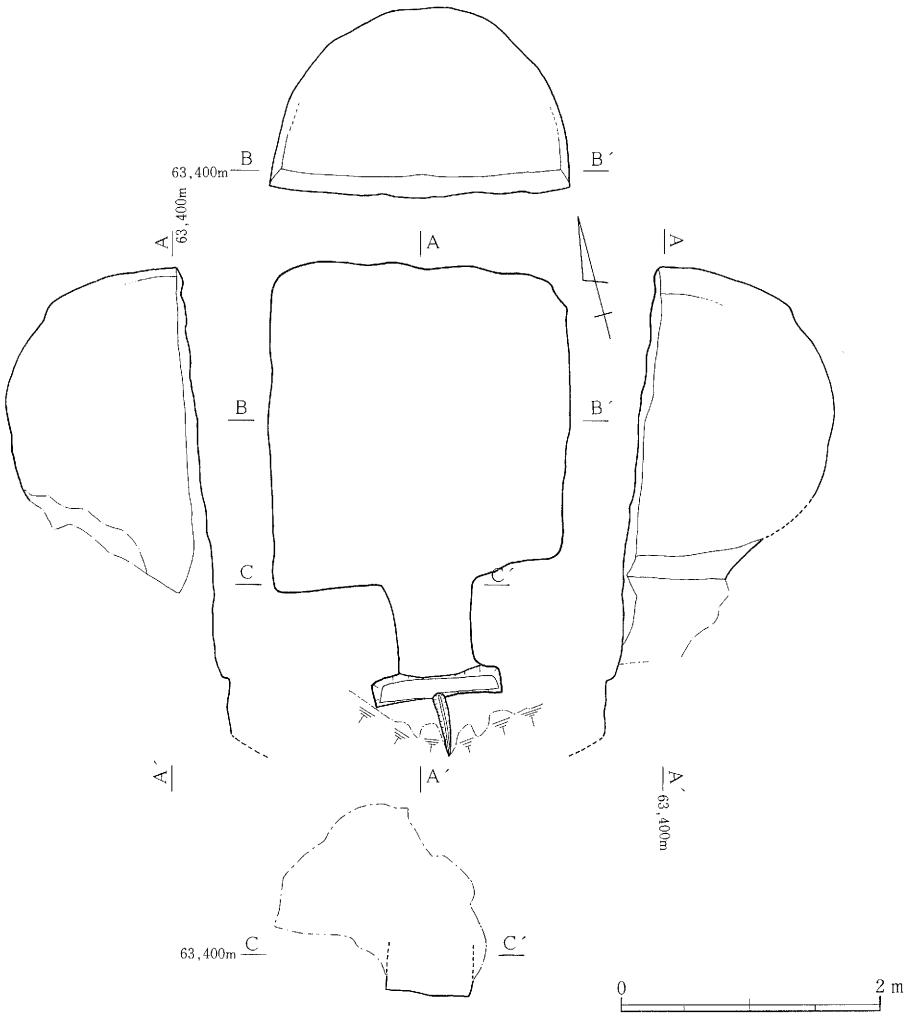
〈玄室〉　平面形は歪んだ方形を呈し、奥行2.05m、幅1.67～2.03m を測る。

立面形は変形アーチ形で、高さ1.15m である。

床面はほぼ平坦であり、中軸線より約10°左に傾いて玄室中央で三叉状に交わる排水溝が施されており、排水溝は、上幅 8 cm～17cm で、深さ 4 cm である。

玄室内壁のノミ工具痕は天井の中央から放射状に幅 8 cm 程のものがみられ、各壁の床面から20cm 程上方までは横方向に 6 cm 程のものがみられる。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置しているが、玄室中軸より右に10°程傾いており、奥行60cm、



第28図　16号墓実測図

幅65～70cm である。

左壁から上部は削平されているが、立面形はアーチ形とみられる。

排水溝は玄室から続いており、上幅約10cm、深さ 3 cm である。

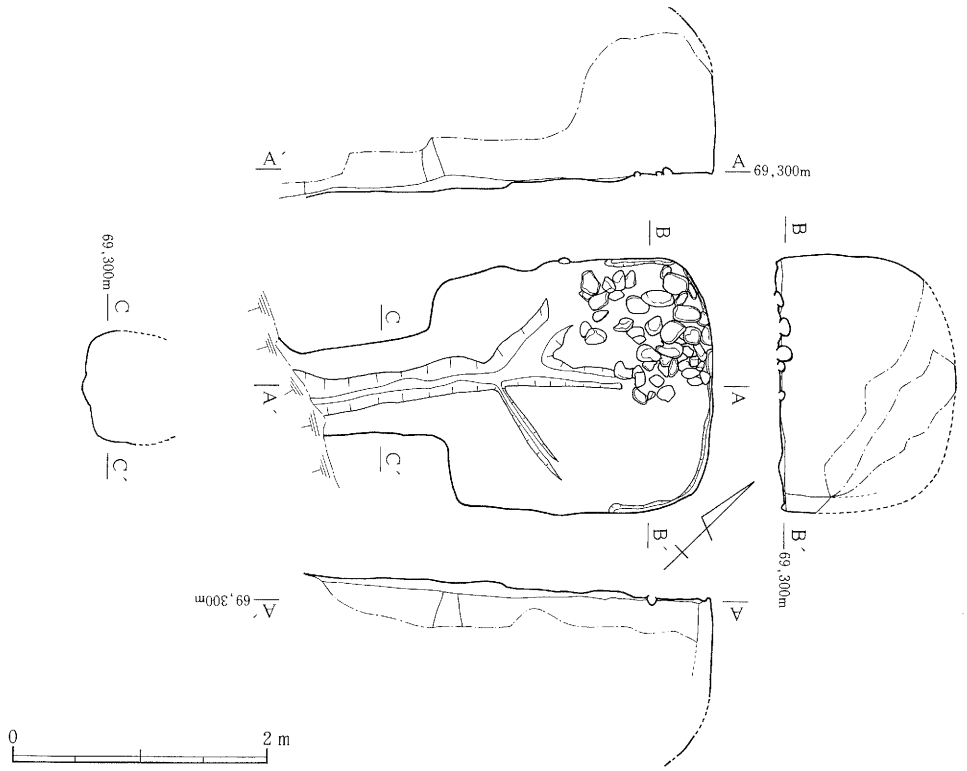
〈羨道〉　玄門付近で幅1.30m を測るが、前方削平のため長さ等は不明である。

〈出土遺物〉　N－34刀子（第27図）が玄室内より出土している。茎部に一部木質が遺存する。

16 号 墓

15号墓の北 3 m程に位置するが、主軸位置で15号墓の左側 2 m、斜面奥に 2 m程入り込んだ位置にあたり、同じ南南西方向に開口している。玄室床面レベルは15号墓より30cm 程下位にある。玄室、玄門、羨道の各部からなっているが、玄門天井から羨道前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形は歪んだ正方形を呈し、奥行2.20～2.60m、最大幅2.35m を測る。



第29図　17号墓実測図

立面形はドーム形で、高さ1.50m である。

床面は玄門に向かって傾斜している。

玄室内壁のノミ工具痕は奥壁で幅約10cm のものが縦方向にみられる。

〈玄門〉　玄室中央より15cm 程右にずれており、奥行70cm、床面幅58～70cm であるが、左

壁から上部は削平されており、高さ・形状は不明である。

〈羨道〉　玄門付近で幅1.00m を測るが、前方削平のため長さ等は不明である。

17 号 墓

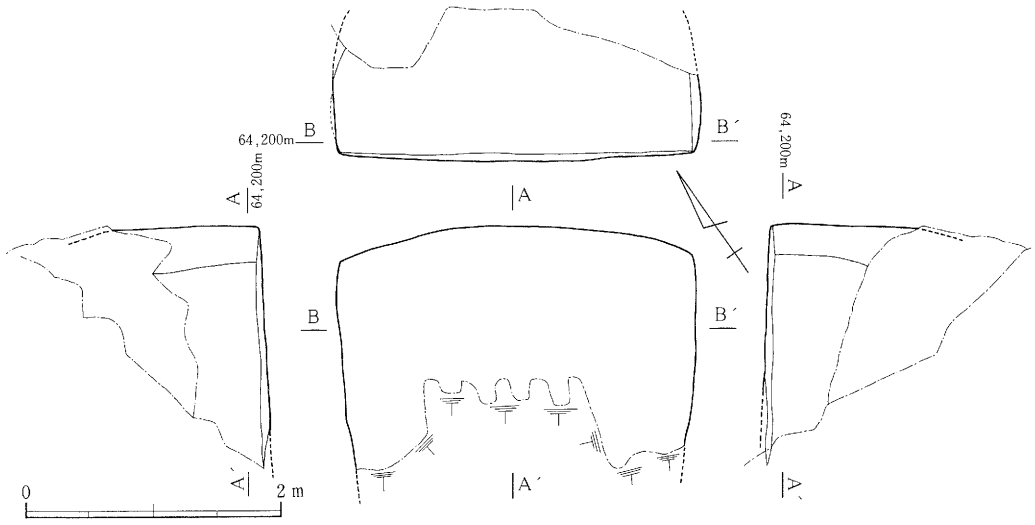
14号・15号墓の斜面直上方に位置し、南西方向に開口している。玄室床面レベルは14号墓より4.70m 程上位にあり、本横穴墓群中では最高位の標高70.3m である。奥壁位置では14号墓より5.50m 程奥に位置する。玄室、玄門の各部からなっているが、天井から玄門前方は削平され不明である。

〈玄室〉　平面形は歪んだ隅丸方形を呈し、奥行2.15m、最大幅2.00m を測る。

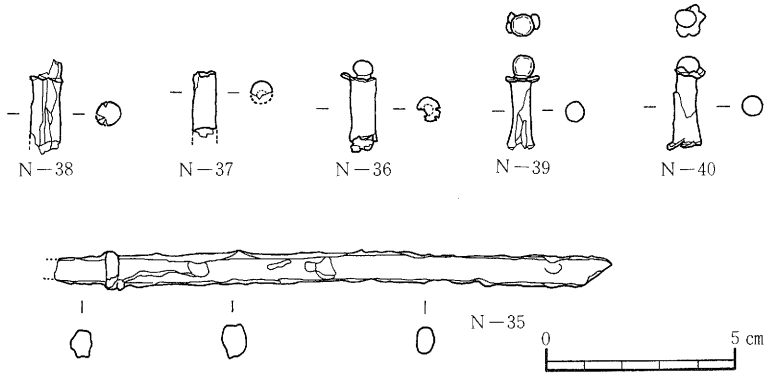
天井部削平のため立面形は不明である。

床面はほぼ平坦であり、玄室ほぼ中央で三叉状に交わる排水溝が施されている。

排水溝は、上幅15cm～25cm で、深さ 3 cm である。



第30図　18号墓実測図



第31図　18号墓出土遺物

玄室内左奥には、拳大から小児頭大の扁平な円礫により石敷がみられるが、全域にあったものかは不明である。

〈玄門〉　玄室のほぼ中央に位置しており、奥行は1.00m、床面幅68～80cmを測るが、羨道と接続部分が削平され不明である。

18　号　墓

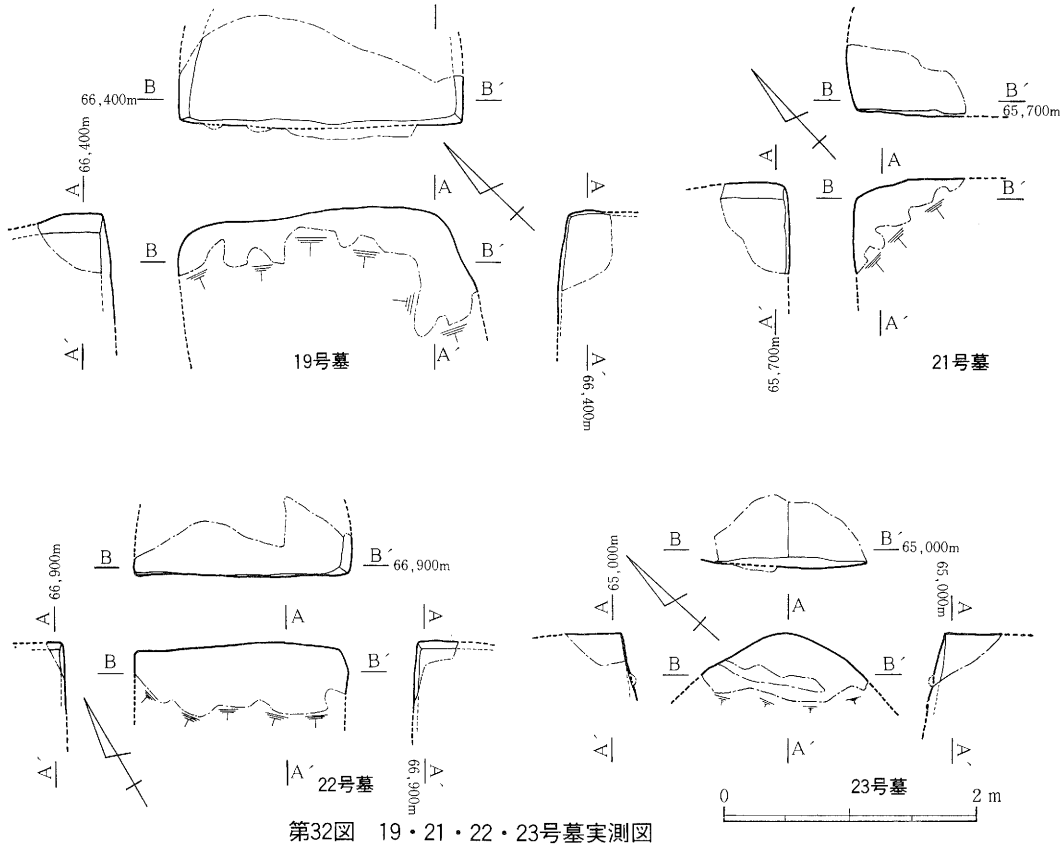
13号墓の北西（左隣）4 m程に位置し、玄室壁は1 m以内と接している。他、14号・19号墓ともほぼ接する位置にある。南南西方向に開口している。玄室床面レベルは13号墓とほぼ同一である。玄室奥半部が遺存するのみで、玄室前方は削平されさ不明である。

〈玄室〉　最大幅2.80mを測るのみで、規模・形状は不明である。遺存する奥半部の床面は玄門に向かってわずかに傾斜している。

立面形はアーチ形とみられる。

〈出土遺物〉　N－35鉄鏃（第31図）、N－36～40両頭金具（第31図）、刀子小破片が1点鉄鏃の棘篦被部3点、細根鉄鏃片1点、種別不明の鉄鏃が18点、種別不明の鉄片が多数、それぞれ玄室内より出土している。

金属製品　N－35鉄鏃は棘篦被を有する細根鉄鏃である。



第32図　19・21・22・23号墓実測図

19 号 墓

18号墓の斜面右上方にほぼ接する様に位置し、南南西方向に開口している。玄室レベルは18号墓より2.20m 程上位である。玄室奥壁の下半がわずか遺存するのみで、大部分は削平され詳明は不明である。

〈玄室〉　残存幅2.20m を測るのみで、規模・形状等は不明である。

床面も奥壁際にわずかに残っているが、詳明は不明である。

20 号 墓

本横穴群中の西端に位置しており、密集する群の西端から更に18m 程離れて 1 基単独である。玄室から玄門部は、上部からの重量圧により崩落し調査不能であった。羨道の一部がわずかに遺存していたが、羨道前方は削平され不明である。南南西方向に開口していたものと考えられる。

〈玄門〉　床面と右壁下部がわずかにみられるのみで、幅 1 m 程である。

〈羨道〉　床面と右壁下部がわずかに認められ、奥行2.00m 以上、幅1.75m 以上で床面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉　土器類は土師器Ｃ－８坏（第34図）、須恵器Ｅ－９・15平瓶（第33図）、Ｅ－10長頸壷（第34図）、Ｅ－12・13長頸瓶（第33図）が、それぞれ玄門前から出土している。

土師器　Ｃ－８坏は外面、内面共にナデ後ヘラミガキ調整、両面黒色処理が施されている。

須恵器　Ｅ－９平瓶は頸部ロクロナデ、体部ロクロナデ後回転ヘラケズリ調整で、全体に自然釉が付着している。Ｅ－12・13長頸瓶は、外面体部ロクロナデ後下部回転ヘラケズリ、上部粘土板張り付け後ロクロナデ調整で、全体に自然釉が付着している。

21 号 墓

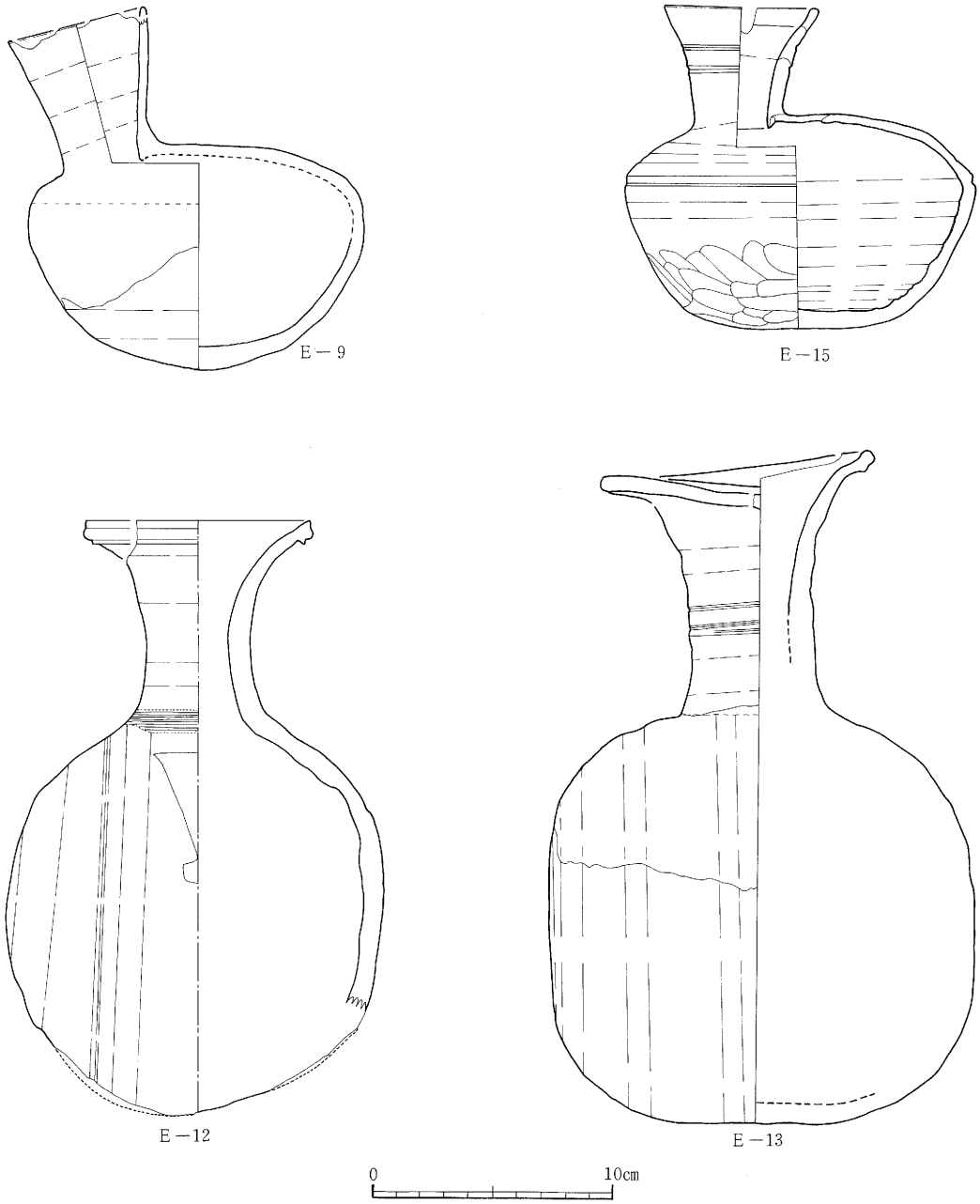
13号墓の斜面右上方に並び接する様に位置し、南南西方向に開口していたものと考えられる。玄室床面レベルは13号墓より1.70m 程上位で、14号墓とほぼ同一である。玄室左奥隅部分がわずかに遺存するのみで、詳明は不明である。

〈玄室〉　規模・形状は不明である。内壁ノミ工具痕は奥壁、左壁とも斜方向に右上から左下へ幅６～７ cm でみられる。

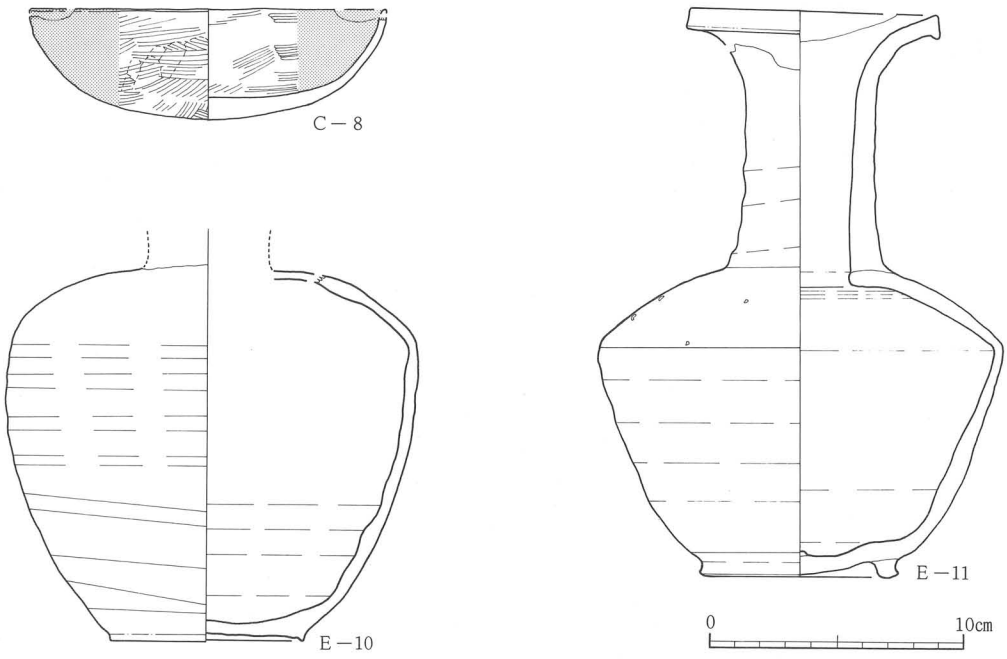
22 号 墓

13号墓の真上2.90m に位置し、21号墓の斜面左上方に接する位置にあたっている。南南西方向に開口していたものと考えられる。玄室奥壁下端がわずかに遺存するのみで、詳明は不明である。

〈玄室〉　残存幅1.70m を測るのみで、規模・形状は不明である。奥壁のノミ工具痕は斜方向で右上から左下へ幅９ cm でみられる。



第33図　20号墓出土遺物



第34図　20号墓出土遺物

23　号　墓

16号墓の斜面左上方に接する様に位置し、後述する24号・25号墓とも極めて近接している。南南西方向に開口していたものと考えられる。玄室床面レベルは16号墓より1.60m 程上位にある。玄室右奥隅部分がわずかに遺存するのみで、詳明は不明である。

〈玄室〉　規模・形状とも不明である。

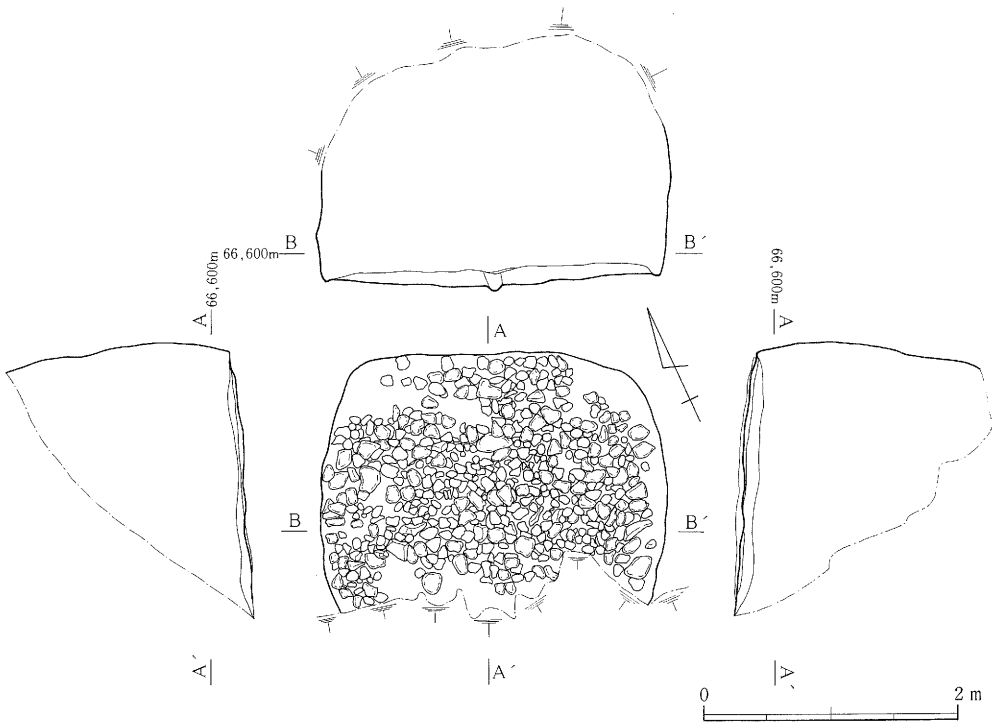
24　号　墓

16号墓の斜面右上方 3 m 程に位置し、14号墓の左上方に接する位置にもあたっている。南南西方向に開口している。玄室床面レベルは16号墓より 3 m 程、23号墓より1.30m 程上位にある。玄室奥半部が遺存するのみで、前半部・玄門・羨道は削平され不明である。

〈玄室〉　左右両壁とも中央で外側に膨らみ、やや歪んだ隅丸方形を呈するものと考えられる。奥行2.10m 以上、最大幅2.75m を測る。

立面形はアーチ形とみられ、高さは1.65m 以上である。

床面は、拳大の円礫による石敷がされており、石敷下面は玄門に向かって傾斜している。中軸線と壁面に沿うように排水溝が施されている。排水溝は、上幅 7 cm～12cm で、深さ約 5 cm である。



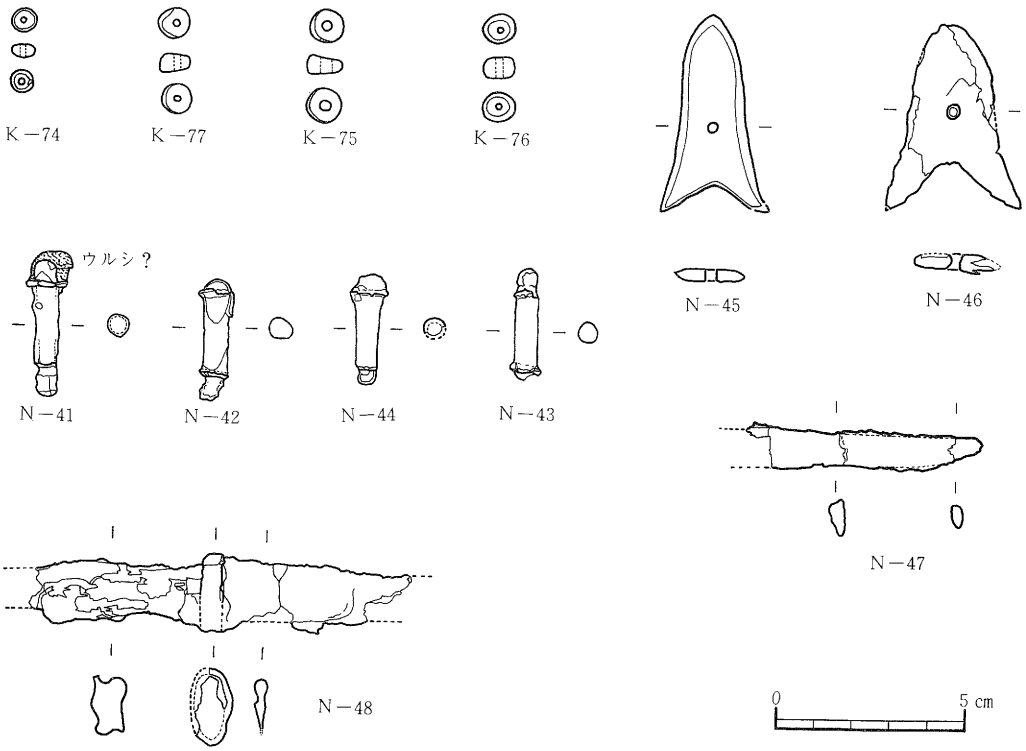
第35図　24号墓実測図

〈出土遺物〉　土器類は須恵器Ｅ－11長頸壷（第34図）が金属製品はＮ－47・48刀子（第36図）、Ｎ－45・46鉄鏃（第36図）、Ｎ－41～44両頭金属（第36図）、刀子の破片１点、鉄鏃の破片10点、種別不明の鉄片が多数、玉類はＫ－70～73小玉（小）、Ｋ－74小玉（中）（第36図）、Ｋ－75～77臼玉（第36図）、Ｋ－110・111扁平棗玉が、それぞれ玄室内敷石直上堆積土中より出土している。

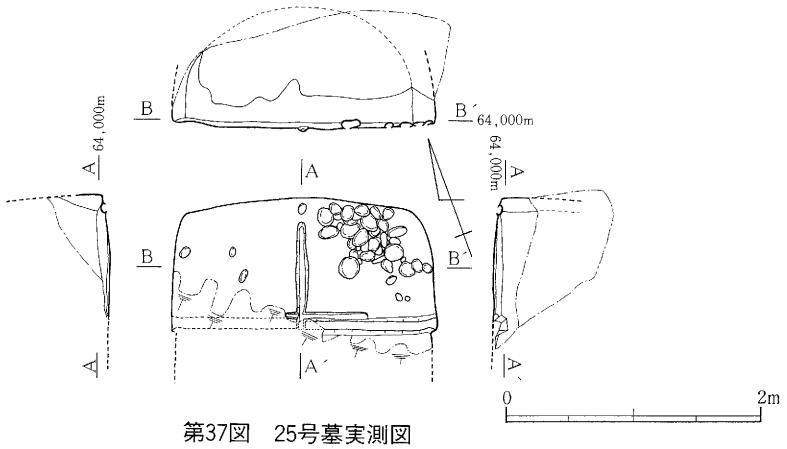
須恵器　Ｅ－11は外面回転ヘラケズリ調整で、全体的に自然釉が付着している。

金属製品　Ｎ－48は錆化が著しく残存部分が少ないが、刀身部に鎬が有り、茎部に木質が遺存している。Ｎ－45・46鉄鏃は、どちらも有孔無茎鉄鏃で、鏃身部中央に2.0～3.5mmの孔が穿たれている。Ｎ－41両頭金具は、円頭部に黒褐色の樹脂状のもの（ウルシ？）が付着している。

玉類　Ｋ－70～73小玉(小)は直径3.7mm前後、孔径は約１mm、材質はガラスである。Ｋ－74小玉（中）は直径6.25mm、孔径1.30mm、材質はガラスである。Ｋ－75～77臼玉は直径7.60mm前後、材質は不明で、Ｎ－76には黒色塗料が付着している。Ｋ－110・111扁平棗玉は、材質は琥珀であるが、風化が著しく、法量は測定不可能である。



第36図　24号墓出土遺物

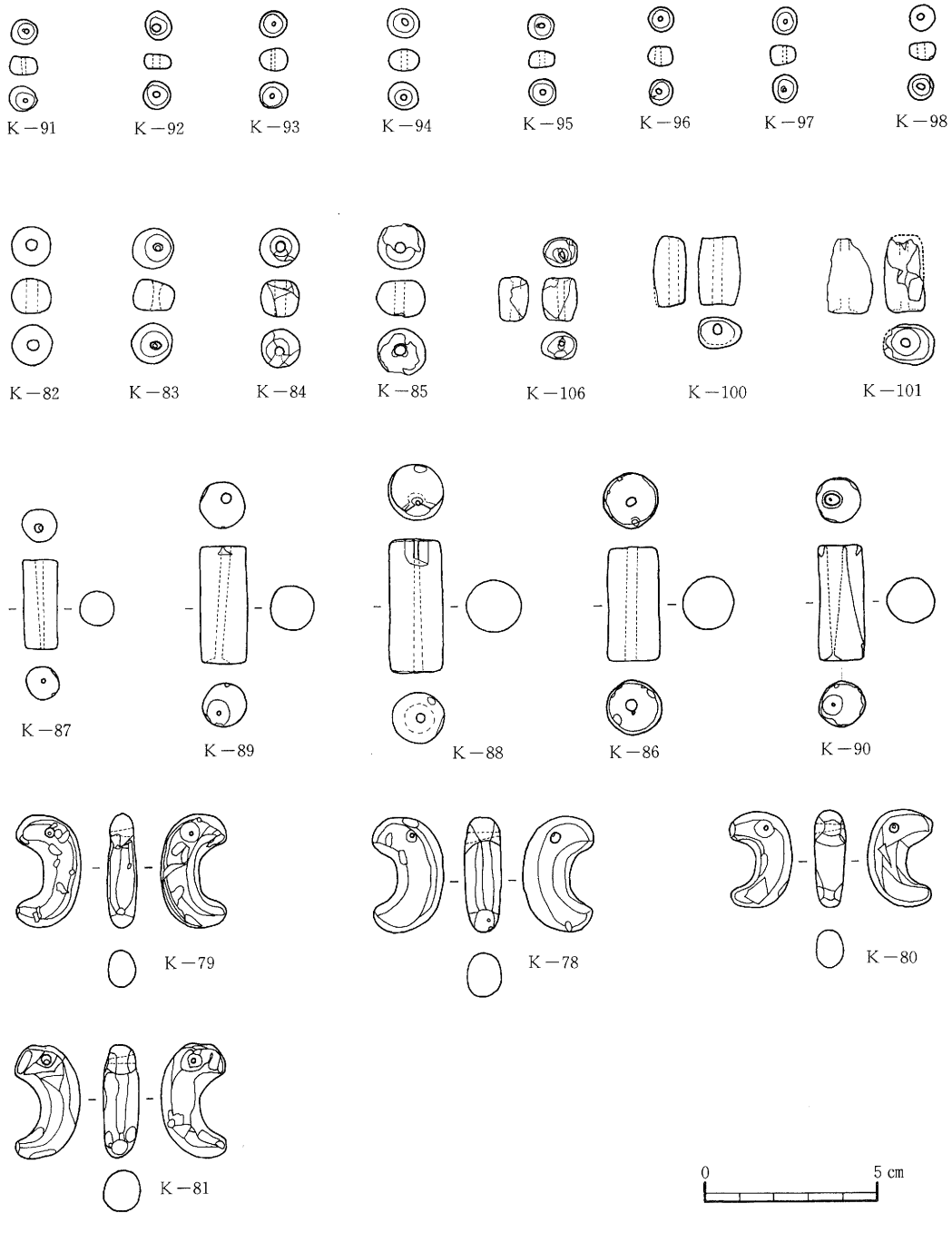


第37図　25号墓実測図

25　号　墓

23号墓の斜面左下方に接しており、玄室床面レベルは23号墓より１ｍ下位である。隣接する16号・23号墓と同方向の南南西に開口している。玄室奥半部が遺存するのみで、前半部前方は削平され不明である。

〈玄室〉　残存幅2.05m を測るのみで、規模・形状は不明である。



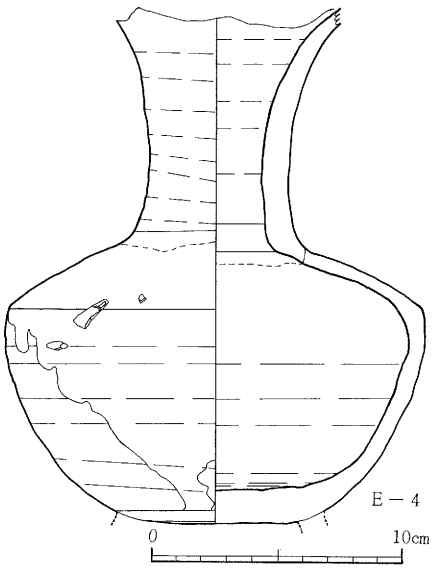
第38図　25号土墓出土遺物

玄室奥には、内法幅85～100cmの棺座がみられる。棺座区画帯は幅14cm、高さ2～5cmで、棺座内外の床面レベル差は無く、平坦である。棺座内の玄室中軸線に沿って、上幅6～9cm、深さ2cmの排水溝がみられる。棺座内右奥床面上には、拳大の扁平な円礫が敷かれている。

〈出土遺物〉　玉類K－107～109小玉（小）、K－78～81勾玉（第38図）、K－82～85丸玉（第38図）、K－91～99臼玉（第38図）、K－86～90管玉（第38図）、K－99～105扁平棗玉（第38図）、K－106棗玉（第38図）それぞれ玄室内より出土している。

K－107～109小玉（小）は直径3.80mm前後、孔径1mm材質はガラスである。K－78～81勾玉は長さ28.3～33.2mmでコ字型、材質は瑪瑙である。いずれも一方向から孔が穿たれている。K－82～84丸玉は直径7.50～10.2mmで、材質は蛇紋岩である。K－85丸玉は風化が著しく、材質は不明である。K－91～98臼玉は材質は不明で、K－91・93・94・96～98には黒色塗料が付着している。K－86～90管玉は、長さ26.0～38.3mm、直径9.60～15.2mmで材質は碧玉である。それぞれ両方向から孔が穿たれている。K－99～105扁平棗玉は風化が著しく、そのほとんどが小破片である。材質は琥珀である。K－106棗玉は長さ12mmで材質は不明である。

その他、重機によって破壊された横穴墓にあったと思われる須恵器E－4長頸壷（第39図）が表土より採集された。



第39図　表土採集遺物

V　ま　と　め

1．横穴墓の構造と編年

今回の調査で発見された横穴墓は総数で25基であるが、そのうち、玄室・玄門部の構造がある程度知り得るものは1号～13号・15号・16号の計15基で、その他の横穴墓は玄室まで削平を受けているため、おおよその位置を確認し、わずかな出土遺物を発見したにすぎない。ここでは構造・規模・形態について検討可能な前述15基について、その特徴をまとめ、編年の可能性についても検討していきたい。

15基の横穴墓は基本的には玄室、玄門、羨道からなっているとみられるが、玄門、羨道の形態や構造などが明確でないものもある。ここでは主に玄室の構造・規模から各横穴墓を分類しておきたい。分類項目はこれまでの横穴墓の調査で通常行われてきた(1)玄室平面形、(2)玄室立面形の他に、本横穴群中で特に玄室規模のバラエティーが認められたことから、(3)玄室床面積についても分類を試みた。床面積の算出にあたっては、中軸奥行計測値と中央幅（前壁奥壁に差があるものは平均値）計測値を使用した。

これら3つの分類項目にしたがって15基の横穴墓を分類すれば、次のとおりである。

(1)　玄室平面形

A　類：方形を呈するもの。さらに2つに細分される。

A_1　類：台形を呈するもの　……3号・10号

A_2　類：正方形・長方形を呈するもの　……1号・4号・9号・13号・16号

B　類：隅丸方形・不整形を呈するもの……2号・5号・6号・7号・11号・15号

C　類：フラスコ形を呈するもの……8号・12号

(2)　玄室立面形

I　類：ドーム形を呈するもの……1号・3号・4号・11号・16号

II　類：アーチ型を呈するもの……5号・6号・7号・9号・10号・13号

III　類：変形アーチを呈するもの……2号・8号・12号・15号

(3)　玄室床面積

1　類：8 m^2 以上のもの……3号・4号・9号・10号・12号・13号

2　類：5 m^2 以上、8 m^2 未満のもの　……1号・8号・11号・16号

3　類：3 m^2 以上、5 m^2 未満のもの　……2号・15号

4　類：3 m^2 未満のもの……5号・6号・7号

これを各横穴墓毎に整理すれば、次のとおりである。

1　群：平面形 A_1 類、立面形Ⅰ・Ⅱ類、床面積１類のもの

A_1 — Ⅰ — 1 …… 3 号

A_1 — Ⅱ — 1 ……10号

2　群：平面形 A_2 類、立面形Ⅰ・Ⅱ類、床面積１類のもの

A_2 — Ⅰ — 1 …… 4 号

A_2 — Ⅱ — 1 …… 9 号・13号

3　群：平面形 A_2 類、立面形Ⅰ類、床面積２類のもの

A_2 — Ⅱ — 2 …… 1 号・16号

4　群：平面形Ｂ類、立面形Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、床面積２・３・４類のもの

Ｂ — Ⅰ — 2 ……11号

Ｂ — Ⅱ — 4 …… 5 号・６号・７号

Ｂ — Ⅲ — 3 …… 2 号・15号

5　群：平面形Ｃ類、立面形Ⅲ類、床面積１・２類のもの

Ｃ — Ⅲ — 1 ……12号

Ｃ — Ⅲ — 2 …… 8 号

さらに各群の特徴を概観すれば、以下の様にまとめられよう。

１群は平面形が台形を呈し、床面積８ m^2 以上と大型で、ドーム・アーチの両方がみられる。この A_1 類には変形アーチ型がみられず、整正形で、床面積８ m^2 未満のものを含まず、比較的大型のものに限定される。床面には石敷がみられる。

２群は平面形が正方形・長方形を呈し、床面積８ m^2 以上と大型で、ドーム・アーチの両方がみられる。１群と同様、この A_2 類にも変形アーチ形がみられず、整正形で、床面積８ m^2 未満のものを含まない。９号は調査前から開口していたと見られ、撹乱が著しいが、４号・13号は床面に石敷がみられ、１群とほぼ同様の様相を呈している。

３群は平面形が２群同様、正方形・長方形を呈し、ドーム形のものである。前述したＡタイプの２者と異なって、床面積が８ m^2 に満たない。実際には１号＝6.9m^2、16号＝5.6m^2 と狭く、平面・立面形は１・２群と同形態をとっているが、規模の点では明らかに区別されることから、ここでは３群とした。

４群は平面形が隅丸方形・不整形を呈し、立面形はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類と本調査での全ての様式を含み、床面積の点でも２・３・４類と大型から小型のものまで多くを包括するが、Ⅰ—２（ドーム形、5.6m^2）の11号を除けば、他の５基（５号・６号・７号＝Ｂ—Ⅱ—４、２号・15号＝Ｂ—Ⅲ—３）は全て、アーチ形もしくは変形アーチ形で、床面積も３・４類の小型のものが多い。開口も方向ほぼ同方向を示している。

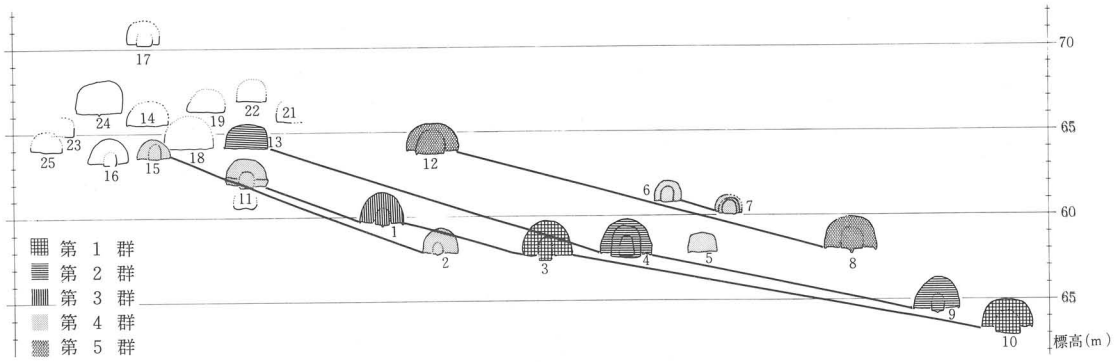
5群は平面形がフラスコ形を呈し、立面形は変形アーチ形のみで、規模の点では、1・2類に属する比較的大型の部類に入る。8号はやや隅丸方形に近く、玄門も明確であるが、12号は楕円形で玄門も判然とせず、1～4群と比較してやや崩れた型態とみられる。

以上の様に分類される横穴墓は位置関係からも、同時期に造営されたとは考えられないことから、数時期にわたる変遷が想定されよう。

各横穴墓は丘陵南西斜面にランダムに位置し、規則性を認め難いが、立地する斜面は南に向かって張り出した屋根の南西側にあたり、横穴墓の前面は同じく南方向に沢状に傾斜している。よって横穴墓群全体の配置関係もこの尾根・沢筋の傾斜を反映して斜面上方から下方にある一定幅をもって斜行する配置関係をとっているものとみられよう。分布する範囲は最南端の10号から最北端の20号まで、およそ78m、全体のレベル差は最下方の10号が標高約53m、最上方の17号が標高約70mで17mの標高差があるが、斜行する分布ゾーン幅はレベル差で6～7m程である。この様な配置関係からみて、横穴墓は斜面下方から徐々に上方に向かって、尾根・沢の傾斜と同方向に斜行して造営されていったものと想定されよう。それが単一ではなく、複数次にわたって徐々に尾根に近い高レベルのルートをとっていったことも想定される。

さらに、玄室平面形が方形から隅丸方形・不整形そしてフラスコ形へと移行するものと仮定すれば、第1・2・3群→第4群→第5群の変遷が想定されよう。各群の配置関係をみれば、第1・2・3群が、斜行分布ゾーンの低段位に位置しているのに対し、第4群は低位から中位に位置し、第5群は高段位に位置している。さらに第1・2・3群については、斜行ルートの想定により、第1群→第2群→第3群の順で上方に順次造営されていったものと考えられよう。

各群の変遷にしたがって、各横穴墓の編年順序を整理してみたいが、尾根・沢の傾斜に沿った斜行ルートを想定すれば次のとおりである。



2．出土遺物の年代

今回の調査によって発見された遺物は土器類、金属製品、玉類の三種である。土器類は土師器（坏・高坏・甕）と須恵器（坏・平瓶・長頸瓶・長頸壷・短頸壷・甕）である。金属製品は鉄製品（直刀・刀装具・鍔・刀子・鏃・両頭金具）と鍍金銅製品（刀装具・耳環）である。玉類は勾玉・管玉・切子玉・丸玉・小玉・臼玉・棗玉等である。ここでは土師器・須恵器について年代的な検討を行なうとともに、多様な遺物の各横穴墓における出土傾向についても若干の検討を行なう。

(1) 土器について

土師器

坏が4号墓から3点、8号・11号・20号墓から各々1点の計6点、高坏が11号墓から1点、甕が1号墓から1点出土している。ここでは図示できた坏5点と高坏片について検討してみたい。5点の坏は大別すれば2類に分類が可能である。

1類：外面に段を有し、調整は上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ。内面はヘラケズリ、黒色処理を施すもので、3種に細別される。

1a類　外面段上部が外傾してたちあがる。丸底。（C—1）

1b類　外面段上部が外傾してたちあがる。浅い平底風。（C—2）

1c類　外面段上部が内弯してたちあがる。丸底。（C—6）

2類：内外面ともヘラミガキを施し、内面黒色処理。

2a類　外面に段を有し、口縁部は外傾してたちあがる。丸底。（C—5）

2b類　内外面とも段・稜をもたず、丸底の底部から内弯気味にたちあがる。黒色処理は外面にも及ぶ。（C—8）

1a類の坏は郡山遺跡のⅠ期官衙段階の遺構から出土する坏類（註1）に類似性が認められる。郡山遺跡は本横穴墓群の南東2km程に位置する官衙遺跡で7世紀後半代から8世紀初頭の間に2時期にわたる官衙跡が発見されている。Ⅰ期官衙は7世紀後半代に位置づけられている。また、細部では若干相異点がみられるが、本横穴墓群の南5.5km程に位置する名取市清水遺跡出土の第Ⅴ群土器（註2）との共通性も認められる。第Ⅴ群土器は東北地方南半域における土師器型式編年の栗囲式（註3）の中でもやや新しい段階に属するものとみている。栗囲式は概ね7世紀代全般にわたる型式と考えられており、両者の年代観によれば、この1a類は7世紀後半代に属するものとみておきたい。

1b類の坏は1a類と同様、郡山遺跡Ⅰ期官衙段階の遺構出土の坏（註4）に類似性が認められ、本横穴墓群でも4号墓で1a類坏と共伴関係にあることから、この1b類も7世紀後半代に属するものとみられよう。

1c類の坏は郡山遺跡II期官衙段階の外郭大溝から出土する坏類（註５）に類似性が認められる。II期官衙は前代Ｉ期官衙に続いて７世紀末葉から８世紀初頭に位置づけられている。また、Ｉ期官衙段階の溝跡最上層の堆積土中出土の坏（註６）との共通性も指摘できるが、1a・1b類に比べやや後出的なものとみておきたい。この1c類坏と共伴する土師器高坏片は裾部が大きくラッパ状に開き出し、縦長の透孔があけられているもので、同様の器形の高坏が郡山遺跡II期官衙外郭大溝の土器群の中に認められる。外郭大溝は堆積土が３層に分けられるが、３層には７世紀後半代、１・２層には７世紀後半から８世紀初頭の土器類が出土しており、８世紀初頭頃には大溝が埋まり始めているとみられている（註７）。これらのことからこの1c類も７世紀末から８世紀初頭に属するものとみておきたい。

2a類は坏は丸底の底部から体部中位に段をもって、口縁部が外傾してたちあがる形状からみれば、1a・1b類と同時期の坏類と同様な特徴を示しているが、外面にヨコナデ、ヘラケズリの後、全面にヘラミガキを施している。坏外面にヘラミガキを施す調整手法は８世紀代と考えられている国分寺下層式（註８）の坏類にみられるものである。隣接する宗禅寺横穴墓群中の７号墓出土の坏（註９）と底面の形状に若干相異点が認められるがほぼ同類の坏とみられる。宗禅寺出土の坏は栗囲式II類と国分寺下層式の要素をあわせて持つものとしている。栗囲式II類とする土器群は型式編年上、明確な位置づけがし難く、研究者によりまちまちな扱いをされているが、ここでは坏内外面ともヘラミガキが施されるものについては、国分寺下層式期のものとみておきたい。

2b類の坏は、器面調整では2a類と同様であるが、内外面とも黒色処理を施し、段・稜をもたない薄手の坏で、これ以外の坏と明らかに区別される。内外面とも黒色処理・ヘラミガキの土師器は椀形の器種が横穴墓より出土する例が多い。この椀形土師器については、銅椀の模倣形態とみられ、８世紀代のものと考えられる。ここでも2b類は１類に続く８世紀代とみておきたい。

須　恵　器

坏が４号墓から１点、平瓶が８号墓から１点、20号墓から２点、長頸瓶が１号墓から１点、20号墓から２点、長頸壷が８号墓から１点、20号墓から３点、24号墓から１点、短頸壷が４号墓から１点、甕が３号墓から１点、４号墓から２点出土している。ここでは図示できた13点について、器種毎に検討しておきたい。

坏は高台をもつもので、外面に稜はみられず、高台付根よりいく分内弯気味に立ちあがるものである。高台付坏は７世紀代になって初めてつくられる器種で、初期のものは高台位置が底端部より中心寄りに付されること、高台内端面が接地すること、底部下端が高台接地面より下方にはみ出す傾向にあることなどが特徴とされる。この４号墓出土の坏Ｅ―３はこれら７世紀

代とみられるものより明らかに後出的要素をもつものであることから、8世紀初頭以降のものとみておきたい。

平瓶は3点出土しているが、2類に分類できる。

1類：丸底で、肩部が丸味をもち、口頸部は斜めに付されている。(E—9)

2類：平底で、体部下半に手持ちヘラケズリが施され、肩部に段をもち、口頸部は直立して付されている。(E—14・15)

1類の平瓶は郡山遺跡のII期官衙外郭大溝より古い土坑から出土したもの（註10）に類似性が認められる。II期官衙の造営開始は前述したとおり7世紀末頃と考えられることから、これより古い土坑はII期官衙段階でも大溝開削以前の古い段階、もしくはI期官衙段階に位置づけられよう。これらのことから本類は7世紀末葉を下限とする7世紀後半代のものとみておきたい。またこの平瓶E—9は器厚が薄手で、自然釉がかかり、胎土も2類のものにくらべ、灰白色を呈する精徴なもので、区別される。

2類の平瓶は同じく郡山遺跡のSI79竪穴住居跡床面上より出土のもの（註11）にやや共通性が認められる。器高と肩部文様帯の有無など細かな相違点や、郡山遺跡出土のものは口頸部が欠損して不明であるが、ほぼ同様の類型とみられよう。この竪穴住居跡は遺構の所属段階・年代は明らかにされていないが、共伴遺物からみて、7世紀末葉から8世紀初頭のものと考えられる。

長頸瓶は3点出土しているが、いづれも異なった形態をとっている。体部は球形で、頸部に2条の沈線がめぐるもの(E—1)、片方が扁平な体部で、頸部に2条の沈線がめぐり、口縁直下にゆるい段がつくもの(E—12)、やや縦長の扁平な体部で、口縁直下に段がつくもの(E—13)である。E—12・13は提瓶としてもよいものであろう。E—1は薄手で、胎土も徴密な自然釉のかかるものでE—12・13とは明らかに区別される。以上のような特徴をもつ土器は他の横穴墓群や色麻古墳群出土の土器群（註12）の中にみられるもので、色麻古墳群の年代観によれば、7世紀末葉から8世紀初頭と考えられている。

長頸壷は4点出土しているが、口縁部・高台を欠損する表採資料（E—4）を除けば、いづれも異なった形態を示している。肩が張って、八の字状に開き出す低い高台をもつもの（E—11)、口頸部は欠損しているが、肩が丸味をもち、底部をえぐって削り出したわずかな高台をもつもの（E—10)、フラスコ形と同様な球形の体部をもち、高台のつかないもの（E—5）がある。E—11はこれまでの横穴墓の調査によれば、7世紀後半代のものとみられるが、薄手で、胎土は精徴、焼成も良好、自然釉がかかり、他の3点とは区別されよう。E—5・10の2点はこれまで調査が行われた横穴墓のものを含め、7世紀から8世紀には類例のないもので、年代推定が不可能である。E—10は精徴な胎土の薄手のもので、削り出しの低い高台と、径の細い

頸部がつく可能性があることから、８世紀代以降に出現する水瓶形の壷の初現かともみられよう。

甕は口頸部に文様帯もない装飾性の乏しいものであることから、年代推定は困難であるが、同様の甕類は郡山遺跡のⅠ期官衙遺構群より新しい遺構や、色麻古墳群などから出土しており７世紀後半代から８世紀初頭にはかなり普遍的に存在していたものとみられる。

(2) その他の遺物について

金属製品

金属製品は鉄製品と金銅製品の２種ある。

鉄製品は直刀・刀装具・鍔等の刀類、鉄鏃・両頭金具等の弓矢類などの武具や刀子がある。金銅製品には耳環があるが、刀装具の中には金銅装のものもある。両頭金具についてはこれまで宮城県内では殆ど報告例がなく、管見の限りでは、古川市朽木橋横穴墓群13号墓出土遺物の中で「両頭金具」として１例報告（註13）されているだけである。福島県ではいわき市の横穴墓の調査による遺跡で出土例が知られている（註14）。この鉄製品は様々な用途･機能が考えられようが、いわき市周辺での横穴墓の調査研究を進める馬目氏によって、弓の飾金具と推定された（註15）。ここでも馬目氏の推定に従ってこの鉄製品を「両頭金具」として、機能的には飾弓金具とみておきたい。今後出土例の増加を待って、密接な関係をもつと考えられる鉄鏃との共伴関係も含めさらに検討を要する。本横穴墓群中での鉄製品の共伴関係は表４のとおりである。鉄鏃と両頭金具との共伴は13号墓（鉄鏃片あり）・18号墓・24号墓で認められたが、１号墓では鉄鏃のみ、８号墓では両頭金具のみであった。鉄鏃･両頭金具をここでは弓矢類としたが、弓矢類と刀類との共伴関係は１号墓と８号墓で認められた。刀子はこれまでは直刀と同類遺物とみられていた。本横穴墓群における出土状況をみると、武具類のみ出土は１号墓・13号墓、刀子のみは６号墓・15号墓であるが、両者が共伴してみられるものが、７号墓・８号墓・12号墓（註16）・18号墓・24号墓と５例あり、必ずしも両者を区別し難いが、刀子の機能・用途を考えるうえで検討が必要であろう。鉄鏃は大別すれば、平根・尖根・細根・無茎の４類がみられるが、１号墓では全てが共伴しており、変遷・年代を推定するのは困難である。また、１号墓出土の鉄鏃の中には柄に装着していたことがわかる木質付着のものや、茎部分にウルシかとみられる樹脂状付着物の見られるものがある。

玉類

玉類は勾玉９、管玉５、切子玉５、丸玉14、小玉353、臼玉12、棗玉２、扁平棗平16の総数416である。扁平棗玉としたものは、これまでの横穴墓の調査の中では琥珀玉とよばれてきたものである。また、臼玉とした12個のうち、24号墓・25号墓出土の11個は材質不明としたが、土製かともみられ、いくつかには黒色塗料状の付着物がみられる。

玉類の出土した横穴墓は4号墓・8号墓・14号墓・24号墓・25号墓の5つである。小玉類は出土数に多少の差はあるものの、全てのものにみられるが、勾玉等の大形玉類はまとまった出土傾向が認められる。4号墓は勾玉、8号墓は翡翠丸玉・切子玉・琥珀扁平棗玉、25号基は勾玉・管玉・琥珀扁玉棗玉が、各々主体的な存在を成している。

ここで金属製品・玉類の出土状況の在り方について、遺物の機能・用途別に整理してまとめれば次の様になろう。刀類・弓矢類は武具類として一括、玉類・耳環は装身具として一括、刀子については文具・携帯具等の用途が想定されたが、限定できず、ここでは刀子として扱う。

1) 武具類中心……1号墓・7号墓・13号墓・18号墓
2) 装身具類中心……4号墓・14号墓・25号墓
3) 刀子中心……6号墓・15号墓
4) 武具・装身具混在……8号墓
5) 武具・刀子混在……12号墓
6) 三者混在……24号墓

8号墓・24号墓のように武具・装身具類が混在するものもみられるが、武具類のみ、装身具類のみといった偏向性があることも認められよう。しかし、玄室の大半が消滅しているものも多く、今回の資料だけでは全体を把握し、本横穴墓群の特質を描出することができなかった。

3．横穴墓の造営年代と周辺社会

(1) 横穴墓の造営年代

これまで行った横穴墓の構造分類による1～5群の設定とその変遷と、各横穴墓出土の主に土器を中心とした年代検討の結果をもとに、ここでは各横穴の年代について考える。

第1群は3号墓・10号墓である。3号墓からは5体分以上かと考えられた人骨の他には須恵器の甕が1点出土のみで、年代判定は困難である。また、10号墓は玄室から玄門まで床面に石敷がみられたが、出土遺物は皆無であり、これも年代を知り得ない。

第2群は4号墓・9号墓・13号墓である。4号墓は玄門前から土師器・須恵器等の土器類、玄室内から金銅製耳環や勾玉を中心とする玉類が出土している。土師器の坏は7世紀後半代、須恵器の高台付坏は8世紀初頭と位置づけられた。9号墓は出土遺物が皆無で年代は不明である。13号墓は両頭金具と鉄鏃片が出土したのみで、年代は不明である。土器類は玄門前であることから、土器類の年代を下限とする8世紀初頭以前をの第2群の年代とみておきたい。

第3群は1号墓・16号墓である。1号墓は玄門前から土師器甕片と須恵器長頸瓶、玄室内から刀装具、鉄鏃等が出土している。玄門前の須恵器は7世紀末葉から8世紀初頭に位置づけられたことから、1号墓はこの年代を下限とする7世紀後半代とみられる。16号墓は出土遺物が

なく年代は不明である。

第4群は2号墓・5号墓・6号墓・7号墓・11号墓・15号墓である。2号墓は玄室内より鉄片が若干、5号墓は同じく炭化物が若干出土したのみで、年代は不明である。6号墓は玄室より刀子片が1点出土、7号墓は玄室内より刀子・鉄鏃片、玄門前より直刀が出土しているが年代は不明である。11号墓は玄室内より土師器坏と高坏片が出土しており、7世紀末から8世紀初頭と位置づけられた。15号墓は玄室内より刀子が1点出土したのみで、年代は不明である。

第5群は8号墓・12号墓である。8号墓は玄室内から土師器坏、須恵器壷・平瓶等の土器類の他、直刀・鍔・刀装具、刀子、丸玉・切子玉を中心とする玉類が出土している。土器類は7世紀末葉から8世紀のものと位置づけられた。12号墓は玄室内より刀子が出土したのみで年代は不明である。

以上の様に第1群は年代不明。第2群は8世紀初頭以前、第3群は7世紀後半代、第4群は7世紀末から8世紀初頭、第5群は7世紀末葉から8世紀と位置づけられた。第1群については第2・3群より先行することが考えられたことから、7世紀代とみておきたい。横穴群全体の年代観としては上限・下限がやや不確定ではあるが、7世紀末葉から8世紀初頭に中心をおく、7世紀後半代から8世紀前半代としておきたい。

(2) 関連遺跡と周辺社会

本横穴墓群の立地する大年寺山麓一帯には多くの横穴群が存在している。大年寺山の北に隣接する愛宕山から越路の沢を介して大年寺山の北側斜面には、愛宕山横穴墓群、大年寺山横穴墓群、宗禅寺横穴墓群があり、横穴墓の総数は100基を超えるものとみられる。また大年寺山の南側斜面には茂ケ崎横穴墓群・二ツ沢横穴墓群があり、30～40基が存在したものとみられる。両群を合わせると150基にもなる横穴墓が、約一世紀の間に造られたことになり、造営母体ともいうべき、当該地域における人間集団の規模の大きさとレベルの高さは、他地域にくらべ抜きん出ていたものと推定される。これまで各群ごとに考えられてきた周辺遺跡との関連性についても、横穴墓群のまとまりを愛宕山・大年寺山一帯に拡大して考えれば、より明瞭になろう。

本横穴群における造営年代の中心とみられる7世紀末葉から8世紀初頭は、本横穴群の立地する丘陵から眼下に望む郡山地区に初期陸奥国を治めた官衙跡である郡山遺跡の年代と符合する。Ⅰ期・Ⅱ期に亘る官衙の年代幅は本横穴群で考えられた年代とほぼ一致し、出土する遺物に共通性をみいだせるものが少ない。郡山遺跡と密接な関係にあったことは理解されようがそれが直ちに、律令制の導入＝横穴墓の造営という単純な結びつきにはならないだろう。「大年寺山北・南横穴墓群」の数からみて、被葬者を官人関係者に限定できるものであろうか。官衙の成立によって整備体系化されていく周辺の村々の首長・家長などの位置づけについても、文献・考古両面からのさらなる検討が必要であろう。

まとめれば次のとおりである。

1．茂ケ崎横穴墓群は大年寺山の南東斜面に入り込んだ沢の南西崖面にあり、尾根張り出しに沿って斜行して分布する。

2．横穴墓は25基調査されたが、同斜面にはさらに多くの横穴墓の存在が想定される。

3．横穴墓からは金銅製品や様々な玉類が出土し、被葬者が上層階級に属していたことが推定される。

4．横穴墓は様々な構造・規模をもち、5群に整理されたが、造営の時間差、被葬者の身分差などが反映されたものとみられ、造営年代は7世紀後半代から8世紀前半代と考えられた。

5．横穴墓群の広がりは、大年寺山の山裾一帯をとり巻く様に分布しており、愛宕山・大年寺山・宗禅寺の各横穴墓群は一括して「大年寺山北横穴墓群」、茂ケ崎・二ツ沢の横穴墓群を一括して「大年寺山南横穴墓群」とすべきであろう。

6．横穴墓の造営母体は、郡山で官衙・寺院の造営に関与した集団と考えられる。

註・参考文献

註1　C—403　第38次調査 SI458　仙文調第64集「郡山遺跡IV」(p. 63)　1984
　　C—573　第48次調査 SI595　仙文調第74集「郡山遺跡V」(p. 74)　1985

註2　「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集『東北新幹線調査報告書V』宮城県教育委員会　1982

註3　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　1957

註4　C—212　第24次調査 SB311 抜取穴　仙文調第46集「郡山遺跡III」(p. 40)　1983

註5　SD35 外郭大溝出土の土器類　第43次調査　註1と同書「郡山遺跡V」(p. 10・11)

註6　C—519　第44次調査 SD552 の1層　註1と同書「郡山遺跡V」(p. 31)

註7　註1と同書「郡山遺跡V」p. 14

註8　氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』　1967

註9　仙文調第9集「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」第22図5・6 (p. 44)　1976

註10　E—225　第43次調査 SK489　註1と同書「郡山遺跡V」(p. 11)

註11　E—76　第19次調査 SI79　仙文調第38集「郡山遺跡II」(p. 60)　1982

註12　「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第100集『宮城県営圃場整備関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県教育委員会　1984

註13　「朽木橋横穴古墳群」宮城県文化財調査報告書第96集『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』(p. 35・36) 第24図18　宮城県教育委員会　1983

註14　馬目順一「中田装飾横穴出土の鉄製両頭金具の本来的形態」『平地学同好会会報（特別号)』　1979

註15　註14と同

註16　12号墓で直刀の出土はないが、玄室床面に直刀のものとみられる錆痕跡がみられた。

参 考 文 献

辻　秀人 「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究１考古学篇』清文堂　1984

中村　浩 「和泉陶邑窯の研究」 柏書房　1981

矢巾町文化財調査報告書第８集「徳田遺跡群詳細分布調査報告書」矢巾町教育委員会　1986

野間清六編 「装身具」『日本の美術』第１集　至文堂　1966

池上　悟 「横穴墓」『考古学ライブラリー』第６巻

表2　横穴墓計測表

（単位：CM）

	玄室						玄門					羨道			備考
	奥行	幅	高さ	立面形	排水溝	台床施設	奥行	幅	高さ	立面形	閉塞施設	奥行	幅	高さ	
1号	265	260	175以上	ドーム	四周・中央	無	55～65	80			溝	150以上	(145)		一部石敷
2号	195	210	150	変形アーチ	中央	無	50	40～60			溝	80以上	(80以上)		右半石敷
3号	330	250～310	210	ドーム	中央	無	90	75	135	アーチ	溝、礫	145以上	140～150		右半石敷
4号	325	300	218	ドーム	四周・中央	無	110	80～110	120	アーチ	無	205以上	(165)～170	190	石敷
5号	150	170	115	アーチ	四周・中央	無	25以上	43以上							
6号	155	155	123	アーチ	中央	無	70	65	83	アーチ	溝、カンヌキ穴				
7号	165	155～172	100	アーチ	無	無	50	75	85～90	アーチ	溝、カンヌキ穴	170以上	93～118	95	石敷
8号	270	310	180：190	変形アーチ	四周・中央	無	40	80			溝	175以上	110～115		
9号	305	265	183～188	アーチ	四周	無	70以上	(60)～70							
10号	320	250～300	170：175	アーチ	四周・中央	無	60	75			溝、礫	65以上	80		石敷
11号	225	253	160	ドーム	無	有縁台床・奥	130	70～75	117	アーチ	溝	125以上	75		
12号	345	307	165	変形アーチ	四周	無	130以上	160							
13号	320以上	272	170	アーチ	四周	無									石敷
14号	85以上	(243)			四周										
15号	205	167～203	115	変形アーチ	中央三叉	無	60	65～70		アーチ	無	30以上	125		
16号	220～260	235	150	ドーム	無	無	70	58～70			溝	65以上	100		
17号	215	200			奥・中央三叉	無	100	68～80							左奥石敷
18号	190以上	(255)～280		(アーチ)	無	無									
19号	80以上	(220)				(無)									
20号							60以上	(100)				200以上	175以上		
21号	75以上	90以上													
22号	60以上	170													
23号	90以上	90以上													
24号	210以上	275	165以上	(アーチ)	四周・中央	無									石敷
25号	125以上	205			中央	有縁棺座・奥									右奥石敷

（ ）数字は現存部分での計測

表3　出土土器と横穴墓

	1号墓	3号墓	4号墓	8号墓	11号墓	20号墓	24号墓	表　採	合　計
土師器　坏			3	1	1	1			6
高坏					1				1
甕	1								1
須恵器　坏			1						1
平瓶				1		2			3
長頸壺				1		3	1	1	6
長頸瓶	1					2			3
短頸壺			1						1
甕		1	2						3
合　計	2	1	7	3	2	8	1	1	25

表4　出土金属製品と横穴墓

	1号墓	4号墓	6号墓	7号墓	8号墓	12号墓	13号墓	15号墓	18号墓	24号墓	合　計
直　刀	1			1	3	○					5
刀装具	1				1						2
鍔					3						3
刀　子			1	1	○	1		1	○	2	6
鉄鏃(平根)	2										2
(尖根)	8										8
(細根)	2								2		4
(無茎)	2									2	4
両頭金具					1		1		5	4	11
耳　環		3									3
合　計	16	3	1	2	8	1	1	1	7	8	48

表5　出土玉類と横穴墓

	4号墓	8号墓	14号墓	24号墓	25号墓	計
勾　玉	5				4	9
丸　玉		10			4	14
小　玉(小)	90	138	6	92	3	329
小　玉(中)	6			1		7
小　玉(大)	6	11				17
臼　玉	1			3	8	12
切子玉		5				5
管　玉					5	5
扁平棗玉		7		2	7	16
棗　玉		1			1	2
計	108	172	6	98	32	416

表6　土器観察表

遺物番号	種別	器形	出土横穴	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	図番号	写真図版
				口縁部	体部(頸部)	底部	口縁部	体部(頸部)	底部	器高	口径	底部			
C－1	土師器	坏	4号墓	ヨコナデ		ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理			4.3	16.0		ほぼ完形	第9図	66－4
C－2	土師器	坏	4号墓	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理			2.5	15.0	13.0	ほぼ完形	第9図	66－5
C－5	土師器	坏	8号墓	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ	ヘラケズリ ミガキ	ヘラミガキ→黒色処理			4.1	14.0		完形	第16図	66－6
C－6	土師器	坏	11号墓	摩耗のため不明　ヘラケズリ			摩耗のため不明→黒色処理			3.8	11.8	10.7	完形	第21図	66－7
C－8	土師器	坏	20号墓	ナデ→ヘラミガキ→黒色処理			ナデ→ヘラミガキ→黒色処理			4.4	14.4		1／2	第34図	66－8
E－1	須恵器	長頸瓶	1号墓	ロクロナデ	ロクロナデ→回転ヘラケズリ 粘土板はりつけ→ロクロナデ					22.1	12.5		完形	第4図 4－1	65－1
E－2	須恵器	大甕	3号墓	ロクロナデ	ヒモ巻き→格子叩き→カキ目 上げ作り　　施紋様		平行当て具痕叩き			44.4	25.0		完形	第7図	66－1
E－3	須恵器	坏	4号墓	ロクロナデ	ロクロナデ	(高台) 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.0	15.0	10.4	1／3	第9図	66－3
E－4	須恵器	長頸壺	表採	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				ほぼ完形	第39図	64－5
E－5	須恵器	長頸壺	8号墓	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	25.1	10.0	8.3	完形	第16図	65－3
E－6	須恵器	大甕	4号墓	ロクロナデ	ヒモ巻き→格子叩き→カキ目 上げ作り　　施紋様		円心円叩き			35.8	19.2		1／2	第9図	66－2
E－9	須恵器	平瓶	20号墓		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				5.8		ほぼ完形	第33図	64－1
E－10	須恵器	長頸壺	20号墓		ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			7.6	2／3	第34図	64－4
E－11	須恵器	長頸壺	24号墓	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ			22.5	9.8	7.8	完形	第34図	64－6
E－12	須恵器	長頸瓶	20号墓	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ			11.1	28.4		ほぼ完形	第33図	65－2
E－13	須恵器	長頸瓶	20号墓	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	25.1	9.4		2／3	第33図	65－4
E－14	須恵器	平瓶	8号墓	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ→ 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ			8.1		ほぼ完形	第16図	64－2
E－15	須恵器	平瓶	20号墓	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ロクロナデ				6.5		ほぼ完形	第33図	64－3

表7　金属製品計測表（1）　（単位：mm）

遺物番号	出土横穴	種別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	刃長(mm)	重ね幅(mm)	茎			鍔			備考	図番号	写真図版
								長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
N—14	1号墓	鍔									29～	18～	3		第4図	73—14
N—18	6号墓	刀子	51	18	9.5	51～								布目状圧痕有り	第15図	
N—19	7号墓	刀子	157～	17	9.5	97～	9	60～	15.5	9.5				木質遺存	第15図	75—19
N—20	7号墓	直刀	513.5～	26	14	464～	10	49.5～	26	14	42～	20～	9	木質遺存・鍔有り	第15図	68—1
N—21	8号墓	鍔									63	43～	5		第15図	67—3
N—23	8号墓	鍔									25～	27	7.5		第15図	67—1
N—25	8号墓	直刀	367.9～	30	14.5	367.9～									第15図	70
N—27	8号墓	鍔									80	65	1.5～5	有窓	第15図	67—4
N—28	8号墓	直刀	351～	32	17	327～	15		20	10.5	33～		7	金銅製吊手孔付足金具有り	第15図	69
N—29	8号墓	直刀	480～	27	8	375～	10	105	25	7.5					第15図	68—1
N—31	12号墓	刀子	198.6～	26.2	8.5	125～	8.5	73.6～	16.5	8.5				木質遺存・目釘有り	第24図	75—3
N—34	15号墓	刀子	162～	13	8	88～	5	74～	12	8				木質遺存	第27図	75—2
N—47	24号墓	刀子	63～	11	6.5	63～									第36図	72—3
N—48	24号墓	刀子	91～	17.5	9	49～	8	44～	17	8				鎺有り・木質遺存	第36図	

表８　出土鉄鏃計測表（2）　（単位：mm）

遺物番号	出土横穴	種　類	全　長	鏃　身　部			頸　　部					備　　考	図番号	写真図版
				最大厚	最大幅	長	茎部長	茎　幅	篦被部長	篦被部幅	全　長			
N－1	1号墓	有茎	68～	4	15.5	34	35～	7～8			35～		第4図	73－8
N－3	1号墓	無茎有孔	31～	2	22		孔径 2.0						第4図	73－12
N－4	1号墓	有茎	47～	3	14	30～	8～	17～				ウルシ(?)付着	第4図	73－4
N－5	1号墓	棘篦被	41.5～				28～		13～	10～8.5	41.5～		第4図	73－9
N－6	1号墓	有茎尖根	46～	3.5	14～		11～	9			11～		第4図	73－5
N－7	1号墓	有茎	28～	2	12.5～	13～	16～	7			16～	ウルシ(?)付着	第4図	73－3
N－8	1号墓	有茎	101～	3	15	14～	82～	6～9			82～		第4図	73－2
N－9	1号墓	棘篦被細根	96～				20～	8	75	9	96～	木質付着	第4図	73－1
N－10	1号墓	有茎尖根	50～	2.5～	15	31	18～	8			18～	ウルシ(?)付着	第4図	73－6
N－11	1号墓	有孔無茎	38	2.0	22	3.8	孔径 2.0					ウルシ(?)付着	第4図	73－11
N－12	1号墓	有茎尖根	47～	4	14	35	13～	6			13～	ウルシ(?)付着	第4図	73－7
N－13	1号墓	有茎	42～	4	24	37	6～	6.2			6～		第4図	73－13
N－35	18号墓	棘篦被細根	146～	6	8.5	33	13～	8	99	8	112～		第31図	71－1
N－45	24号墓	有孔無茎	53	4	27	53	孔径 2.0						第36図	72－1
N－46	24号墓	有孔無茎	50	4.5	24	50	孔径 2.0～3.5						第36図	72－2
N－51	8号墓	細根	38～	4.1	9.1	38～							第17図	71－2

表9　金属製品計測表 (3)　(単位：mm)

遺物番号	出土横穴	種別	法量 (mm)						備考	図番号	写真図版
			全長	板金縁径	円頭径	筒金長	筒金径	筒金厚			
N—24	8号墓	両頭金具	32	8.5	8.2	25.5	6	1.5～1.7		第17図	67—2
N—32	13号墓	両頭金具	33.5	9.1～10.3	7.5～8.6	20	6～6.5			第24図	71—3
N—36	18号墓	両頭金具	24.8		4.9	18.9	5.9～6.5	1.4～1.8		第31図	71—4
N—37	18号墓	両頭金具	17			15	6.1	2.2		第31図	
N—38	18号墓	両頭金具	24.5			21.5	8			第31図	71—5
N—39	18号墓	両頭金具	25	9	5.8	19	5			第31図	71—6
N—40	18号墓	両頭金具	24.1	8	5.7	21.9	5.6			第31図	71—7
N—41	24号墓	両頭金具	38.4	10.8	6	22.3	5.6～5.8	0.5～1	ウルシ(?)付着	第36図	72—1
N—42	24号墓	両頭金具	32.4		4.9	24.1	6.4			第36図	72—2
N—43	24号墓	両頭金具	29.9	8	5.5	22.7	6			第36図	72—3
N—44	24号墓	両頭金具	29		4.6～7	20	5.5～7	1～1.5		第36図	72—4

遺物番号	出土横穴	種別	外径		内径		太さ	隙幅	備考	図番号	写真図版
			最大径	最小径	最大径	最小径					
N—15	4号墓	耳環	20	18	11	10		2	金銅製	第10図	74—2
N—16	4号墓	耳環	25.5	23	14	12.5		1.5	〃	第10図	74—1
N—17	4号墓	耳環	17	15.9	9.9	9		2～2.9	〃	第10図	74—3

表10　4号墓出土玉類分類表

	勾玉	小玉(小)	小玉(中)	小玉(大)	臼玉	計
瑪瑙	4					4
ガラス	1	89	6	4		100
ガラス(茶)		1				1
蛇紋岩				2	1	3
計	5	90	6	6	1	108

表11　8号墓出土玉類分類表

	丸玉	小玉(小)	小玉(大)	切子玉	扁平棗玉	棗玉	計
ガラス		138	10				148
琥珀					7		7
翡翠	10						10
水晶				5			5
不明			1			1	2
計	10	138	11	5	7	1	172

表12　14号墓出土玉類分類表

	小玉(小)	計
ガラス	6	6
計	6	6

表13　24号墓出土玉類分類表

	小玉(小)	小玉(中)	臼玉	扁平棗玉	計
ガラス	92	1			93
琥珀				2	2
不明			3		3
計	92	1	3	2	98

表14　25号墓出土玉類分類表

	勾玉	丸玉	小玉(小)	臼玉	管玉	扁平棗玉	棗玉	計
瑪瑙	4							4
ガラス			3					3
蛇紋岩		2						2
琥珀						7		7
碧玉					5			5
不明		2		8			1	11
計	4	4	3	8	5	7	1	32

表15 勾　　玉

種　別	遺構番号	玉番号	材　質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
勾　玉	4 号 墓	K—22	ガラス	17.35	9.05	5.3×4.55	0.80	透明淡青　C字	第10図	76
		K—23	瑪　瑙	38.45	21.2	13.5×8.8	9.70	コ字	第10図	76
		K—24	瑪　瑙	37.9	20.7	13.4×11.7	10.90	コ字	第10図	76
		K—25	瑪　瑙	34.65	23.2	13.7×11.4	12.20	コ字	第10図	76
		K—26	瑪　瑙	38.9	23.3	15.0×12.4	14.55	コ字	第10図	76
	25 号 墓	K—78	瑪　瑙	33.3	20.2	13.3×9.9	8.90	コ字	第38図	81
		K—79	瑪　瑙	33.0	19.4	11.4×8.0	6.20	コ字	第38図	81
		K—80	瑪　瑙	28.35	18.15	10.8×8.2	5.50	コ字	第38図	81
		K—81	瑪　瑙	33.2	18.7	12.15×10.4	8.25	コ字	第38図	81

表16 丸　　玉

種　別	遺構番号	玉番号	材　質	高さ(mm)	径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
丸　玉	8 号 墓	K—51	翡　翠	9.15	11.65	1.65	淡黄緑　½破損	第17図	78
		K—52	翡　翠	9.5	12.0	1.40	〃　½破損	第17図	
		K—53	翡　翠	9.2	11.5	1.40	〃	第17図	78
		K—54	翡　翠	8.8	11.6～11.8	1.60	〃	第17図	78
		K—56	翡　翠	9.15	11.1～11.35	1.40	〃	第17図	78
		K—57	翡　翠	—	—	—	〃　破片		
		K—58	翡　翠	8.95	10.95	0.90	〃　½破損	第17図	78
		K—59	翡　翠	8.9	11.1～11.5	1.45	〃	第17図	78
		K—60	翡　翠	8.15	11.0	0.60	〃　½破損	第17図	
		K—64	翡　翠	—	—	—	〃　破片		
	25 号 墓	K—82	蛇紋岩	10.2	11.45	0.95		第38図	82
		K—83	蛇紋岩	7.5～9.3	11.6～12.0	1.10		第38図	82
		K—84	?	10.2～10.35	11.4～11.5	0.95		第38図	82
		K—85	?		13.0～13.6	1.05	一部破損	第38図	82

表17 切 子 玉

種　別	遺構番号	玉番号	材　質	長さ(mm)	径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
切子玉	8 号 墓	K—65	水　晶	12.8	11.6～13.35	2.60	六角形	第17図	78
		K—66	水　晶	21.4～22.1	14.15～16.1	6.65	六角形	第17図	78
		K—67	水　晶	24.8～26.0	14.7～16.3	7.40	六角形	第17図	78
		K—68	水　晶	18.35	14.5	5.00	円形(算盤玉)	第17図	78
		K—69	水　晶	21.4	14.45～15.7	6.20	六角形	第17図	78

表18 扁平棗玉

種別	横穴番号	玉番号	材質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
扁平棗玉	8号墓	K—44	琥珀	—	8.1～13.8	1.05	一部破損	第17図	78
		K—45	琥珀	—	12.4～13.75	1.75	一部破損	第17図	78
		K—46	琥珀	14.0	8.6～10.7	0.75		第17図	78
		K—47	琥珀	—	11.35～14.3	2.80	一部破損	第17図	78
	25号墓	K-100	琥珀	20.25	9.4～12.2	1.55		第38図	82
		K-101	琥珀	—	—	1.75	一部破損	第38図	82

表19 管玉

種別	横穴番号	玉番号	材質	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
管玉	25号墓	K—86	碧玉	32.95	14.4～15.2	2.75～2.9	14.30	濃緑	第38図	81
		K—87	碧玉	26.05	9.6～10.0	1.2～2.6	4.90	〃	第38図	81
		K—88	碧玉	38.35	14.4～15.2	1.1～2.7	16.45	〃	第38図	81
		K—89	碧玉	34.5	12.7～13.4	1.15～3.0	11.80	〃	第38図	81
		K—90	碧玉	33.7	12.55～13.0	1.0～4.4	10.85	〃	第38図	81

表20 棗玉

種別	横穴番号	玉番号	材質	長さ(mm)	径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
棗玉	8号墓	K—32		12.2～13.2	7.75～8.8	0.65	黒色	第17図	
	25号墓	K-106		12.0	8.4～9.7	0.75	〃	第38図	

表21 臼玉

種別	横穴番号	玉番号	材質	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
臼玉	4号墓	K—20	蛇紋岩	8.15～8.3	3.9～6.2	2.75～2.9	0.50		第10図	76
	24号墓	K—75		8.5～8.8	2.9～4.5	2.9～3.0	0.40		第36図	80
		K—76		7.55～8.1	5.45	1.45～1.7	0.35	黒色塗料付着	第36図	80
		K—77		7.3～7.6	3.4～4.65	1.7～1.9	0.25		第36図	80
	25号墓	K—91		6.9～7.7	3.3～5.25	1.35～1.4	0.25	黒色塗料付着	第38図	82
		K—92		7.8～8.35	4.6～5.0	1.9	0.35		第38図	82
		K—93		7.0～7.7	5.1～5.85	1.5～1.65	0.30	黒色塗料付着	第38図	82
		K—94		8.1～8.6	5.75	1.8～1.95	0.40	黒色塗料付着	第38図	82
		K—95		7.4	4.35～4.95	1.7～1.8	0.30		第38図	82
		K—96		6.95～7.3	4.2～6.95	1.5～1.6	0.30	黒色塗料付着	第38図	82
		K—97		7.15～7.7	4.2～5.9	1.4～1.75	0.30	黒色塗料付着	第38図	82
		K—98		7.05～7.3	4.1～4.95	1.6～1.7	0.25	黒色塗料付着	第38図	82

表22　ガラス小玉（小）　(1)

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
4 号 墓	K－2－①	3.65	3.4		濃紺		
	②	4.45	2.8		〃		
	③	3.9	2.3		〃		
	④	4.75	2.8		〃		
	⑤	3.85	2.25		淡紺		
	⑥	3.85	2.4		濃紺		
	⑦	3.9～4.1	3.2		紺		
	⑧	3.3～3.8	2.7		透明淡青		
	⑨	3.6	1.7～2.1	計　0.95	淡青緑		
	⑩	3.9～4.1	3.1	平均　0.056	緑		
	⑪	3.7	1.9		紺		
	⑫	3.85	2.2		淡紺		
	⑬	3.7	2.3		濃紺		
	⑭	4.15	2.75		紺		
	⑮	4.0	2.15		〃		
	⑯	3.8	2.3		〃		
	⑰	4.1	2.25～2.7		淡紺　白濁		
	K－4－①	3.7	2.3		紺		77
	②	3.55	2.1		〃		
	③	3.8～3.95	2.35		〃		
	④	3.75～4.0	1.75～2.0		〃		
	⑤	3.8	2.2～2.5		〃		
	⑥	3.5	2.7	計　0.60	〃		
	⑦	3.85	3.3	平均　0.05	〃		
	⑧	3.75	1.95		〃		
	⑨	4.0	2.1～2.7		〃		
	⑩	4.1	2.2		〃		
	⑪	4.3～5.0	3.0～3.35		透明淡紺		
	⑫	3.7	2.3		紺		
	K－6－①	3.9	2.3		淡紺		77
	②	3.8～4.2	2.4		紺		
	③	3.9	2.35	計　0.25	淡紺		
	④	3.65	1.8～2.5	平均　0.05	〃		
	⑤	3.8	2.1		〃		
	K－7－①	3.75	2.0		淡紺		77
	②	3.7	2.2		濃紺		
	③	3.95	2.2		淡紺		
	④	3.8	1.95		濃紺		
	⑤	4.1	2.0～2.2		淡紺		
	⑥	3.75	1.8～2.2		〃		

(2)

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
4 号 墓	K—7—⑦	3.4	2.3	↑	淡紺		77
	⑧	3.5	2.0	計 0.45	〃		
	⑨	3.2	1.55～1.75	平均 0.041	紺		
	⑩	4.0	1.85		淡紺		
	⑪	3.6～3.75	2.7		紺		77
	K—8	4.0	2.4	0.05	淡紺		77
	K—9—①	3.65	2.0		淡紺		77
	②	3.8～3.9	2.3		〃		
	③	3.7	1.8～2.1		〃		
	④	4.1	2.25		〃		
	⑤	3.8	1.9		〃		
	⑥	3.8	2.35		〃		
	⑦	3.9	2.25		〃		
	⑧	3.8～4.0	2.1		紺		
	⑨	3.35～3.6	2.35		淡紺		
	⑩	3.65～3.8	2.8		〃		
	⑪	3.8	1.9～2.1		〃		
	⑫	3.4	2.0～2.4		〃		
	⑬	3.7～3.9	2.1		紺		
	⑭	3.85	1.9	計 1.20	〃		
	⑮	3.3	2.2	平均 0.041	淡紺		
	⑯	3.5～3.95	2.35～2.45		紺		
	⑰	3.75	2.2		濃紺		
	⑱	3.85	1.85～2.35		淡紺		
	⑲	3.75～3.9	1.9～2.3		濃紺		
	⑳	3.75	1.75～2.0		淡紺		
	㉑	3.8	2.0～2.2		〃		
	㉒	3.5	2.1		濃紺		
	㉓	3.7	1.85～2.0		淡紺		
	㉔	3.6～4.05	2.2～2.9		〃		
	㉕	3.7～3.95	1.6～1.95		〃		
	㉖	3.8～4.0	2.3		濃紺		
	㉗	3.3	1.9		淡紺		
	㉘	4.0	2.35～2.6		濃紺		
	㉙	3.7	1.85		〃		
	K—10—①	3.85	2.0		淡紺		77
	②	3.65	1.8～2.0		〃		
	③	3.65～3.8	1.75～1.9		紺		
	④	3.55	1.9	計 0.35	淡紺		
	⑤	3.75	1.9	平均 0.039	〃		
				↓			

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
4 号 墓	K—10—⑥	3.7	2.1		淡紺		77
	⑦	3.7	1.95		〃		
	⑧	3.75	2.1～2.35		紺		
	⑨	3.55	2.0		〃		
	K—13	3.9～4.4	3.0	0.05	紺 $\frac{1}{4}$破片		
	K—14	4.25	2.9	0.1	紺		77
	K—15	4.0～4.35	3.5	0.1	紺		77
	K—16	3.6	2.45	0.05	淡青		77
	K—17	3.7	2.65	0.05	紺		77
	K—21	4.6～4.65	4.45～4.8	0.15	茶 半透明		77
8 号 墓	K—27—①	2.8～3.0	1.55		スカイブルー		79
	②	4.0	2.6		濃紺		
	③	3.8	2.1～2.8		淡紺		
	④	3.95	2.1～2.45		紺		
	⑤	4.0～4.3	2.0～2.4		淡紺		
	⑥	3.9～4.15	2.3		紺		
	⑦	4.0	1.9～2.15		淡紺		
	⑧	4.2	1.8～2.25		〃		
	⑨	4.1～4.25	2.45		紺		
	⑩	3.85	2.1		淡紺		
	⑪	3.45～3.6	1.4～1.7		〃		
	⑫	3.45	2.1		〃		
	⑬	3.5～3.75	1.6～2.1		〃		
	⑭	3.7～3.9	2.25～2.6		紺		
	⑮	3.8	2.25		淡紺		
	⑯	3.5～3.9	2.1		〃		
	⑰	4.3	2.5		〃		
	⑱	3.5	2.0		〃		
	⑲	3.9	2.1		〃		
	⑳	3.55～3.8	2.1		紺		
	㉑	3.85	2.15～2.3		淡青		
	㉒	3.55～3.7	2.05～2.2		青		
	㉓	3.7	1.9		淡紺		
	㉔	3.95	2.25		濃紺		
	㉕	4.05	2.35		淡紺		
	㉖	4.65	3.1		緑		
	㉗	4.2	1.8～2.2		淡紺		
	㉘	3.5	2.0		〃		
	㉙	3.6～3.75	2.45		〃		
	㉚	3.4	1.7		〃		

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
8 号 墓	K—27—㉛	3.75	2.6		淡紺		79
	㉜	3.5	1.9		〃		
	㉝	4.0	2.15		〃		
	㉞	3.5	1.9		〃		
	㉟	3.9	2.4～2.7		〃		
	㊱	4.1～4.6	1.8～2.45		〃		
	㊲	3.7	2.1		〃		
	㊳	3.6	1.75		〃		
	㊴	3.8～4.0	2.05		〃		
	㊵	3.85～4.0	2.1		〃		
	㊶	3.6～3.85	3.05～3.2		〃		
	㊷	3.95	1.9～2.3		〃		
	㊸	3.7	2.6～3.4		〃		
	㊹	3.6	2.05		〃		
	㊺	3.85	2.35～2.5		〃		
	㊻	3.4	1.55～2.1		〃		
	㊼	3.35	1.9	計 4.15	〃		
	㊽	3.7	2.9～3.3	平均 0.045	〃		
	㊾	4.1～4.3	2.2		〃		
	㊿	4.05～4.25	2.15		〃		
	(51)	4.2	2.35		〃		
	(52)	4.0～5.25	2.55		〃		
	(53)	3.7	1.85		〃		
	(54)	3.75	2.3		〃		
	(55)	3.3	1.9		〃		
	(56)	3.75	2.25～2.4		〃		
	(57)	4.0	2.4		青		
	(58)	3.75～3.9	2.8		〃		
	(59)	3.75	2.2		〃		
	(60)	3.95	1.85		淡紺		
	(61)	3.9	2.8		〃		
	(62)	3.5	1.9～2.2		〃		
	(63)	4.0	2.0		〃		
	(64)	4.0	1.8～2.2		〃		
	(65)	3.7	2.1		〃		
	(66)	3.65	2.1～2.35		青		
	(67)	3.9	1.95～2.2		淡紺		
	(68)	4.0～4.4	2.5		〃		
	(69)	3.7～3.9	1.9～2.1		〃		
	(70)	3.8	1.95～2.2		青		

(5)

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
8号墓	K—27—㉑	3.9	2.3～2.7		青		79
	㉒	3.85	2.35		〃		
	㉓	4.25	2.6～2.8		淡紺		
	㉔	3.75	2.5～2.75		青		
	㉕	3.5	2.0		淡紺		
	㉖	3.5	2.3～2.7		〃		
	㉗	3.65	1.85		紺		
	㉘	3.6	1.9		青		
	㉙	3.55	1.75～1.9		淡紺		
	㉚	3.85～4.0	2.1		〃		
	㉛	3.8	1.85～2.2		〃		
	㉜	3.75～3.9	2.6		〃		
	㉝	4.0	2.25		〃		
	㉞	3.35～3.5	1.6～2.0		淡青		
	㉟	3.8～4.0	2.0		淡紺		
	㊱	3.75	2.75		〃		
	㊲	3.75～4.0	2.0～2.6		〃		
	㊳	3.9～4.05	2.6		〃		
	㊴	3.5～3.7	2.35		〃		
	㊵	3.55	1.65～1.9		淡青		
	㊶	3.65～3.9	2.4		スカイブルー		
	㊷	2.5	1.0		透明淡青		
	K—28—①	3.85	2.05		淡紺		79
	②	3.4	1.9		〃		
	③	3.45	1.75～1.9		〃		
	④	3.7	2.0～2.2		〃		
	⑤	3.7	2.3～2.7		〃		
	⑥	3.5	1.7～2.0		〃		
	⑦	3.85～4.2	2.75～2.9		濃紺		
	⑧	3.8～4.0	2.3		紺		
	⑨	3.3～3.7	2.4		淡紺		
	⑩	3.85	2.35		紺		
	⑪	3.7～4.0	1.95		淡紺		
	⑫	3.8	2.2		〃		
	⑬	3.6	1.85		紺		
	⑭	3.55	2.45		淡紺		
	⑮	3.85	1.95		〃		
	⑯	3.85	2.2～2.45		紺		
	⑰	3.4	1.8		スカイブルー		
	⑱	3.9	2.1		淡紺		

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
8 号 墓	K—28—⑲	3.8	2.0	↑	淡紺		79
	⑳	3.5～4.0	2.3	計 1.65	〃		
	㉑	3.6～3.9	1.8～2.35	平均 0.042	スカイブルー		
	㉒	3.35	1.65		淡紺		
	㉓	3.85～4.0	1.4～1.95		〃		
	㉔	3.65	1.85		〃		
	㉕	3.5	1.55		〃		
	㉖	4.0～4.15	2.0～2.5		〃		
	㉗	4.0～4.2	2.7		〃		
	㉘	3.8	2.0		〃		
	㉙	3.3	1.75～1.9		〃		
	㉚	3.75	1.95～2.2		〃		
	㉛	4.1	2.7		〃		
	㉜	4.15	1.6～2.0		〃		
	㉝	3.65～3.8	2.4～2.7		〃		
	㉞	4.0	2.5		〃		
	㉟	3.5	2.05		〃		
	㊱	3.85	1.75～1.9		〃		
	㊲	3.5	2.0		〃		
	㊳	3.45～3.7	2.1		〃		
	㊴	3.7	2.55	↓	〃		
	K—29—①	3.5～4.15	2.2～2.4	計 0.1	淡紺		79
	②	3.6	1.9	平均 0.05	紺		
	K—31—①	3.75	2.15	┐	淡紺		79
	②	3.95	2.1～2.25	計 0.15	〃		
	③	4.05～4.2	2.15～2.25	平均 0.05 ┘	紺		
	K—43	3.85	2.15	0.05	淡紺		
	K—118	4.5～4.75	2.95～3.2	0.1	濃紺		
14 号 墓	K—12—①	3.8～4.7	2.15～2.3	┐	淡紺		80
	②	3.2～3.3	2.3		紺		
	③	3.6	2.0	計 0.30	〃		
	④	4.15	2.3	平均 0.05	淡紺		
	⑤	3.9～4.05	2.1	┐	〃		
	⑥	4.1	3.0	┘	〃		
24 号 墓	K—70—①	3.6	2.5	┐	淡紺		80
	②	3.95	2.35		〃		
	③	3.9	3.0～3.2		〃		
	④	3.3	2.05		濃青		
	⑤	3.3	2.3		淡紺		
	⑥	3.9～4.2	1.8～2.15	↓	〃		

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
24 号 墓	K—70—⑦	3.9	2.55	↑	淡紺		80
	⑧	3.7～4.35	1.95	計 0.65	〃		
	⑨	3.7	2.1	平均 0.043	〃		
	⑩	4.0	2.25		〃		
	⑪	3.3～3.6	1.8～2.2		〃		
	⑫	3.9	2.15		〃		
	⑬	3.5～3.8	1.5～1.8		〃		
	⑭	3.7	2.0		〃		
	⑮	4.2	3.0		〃		
	K—71—①	3.1～3.7	1.85		淡紺		80
	②	4.0	2.35		〃		
	③	3.7～4.0	1.85～2.1		〃		
	④	3.4	2.35		〃		
	⑤	3.85～4.15	2.15	計 0.45	〃		
	⑥	4.2～4.4	2.25～2.45	平均 0.045	〃		
	⑦	3.25～3.6	1.6		〃		
	⑧	3.4～3.7	2.0		〃		
	⑨	3.85～4.1	2.95		〃		
	⑩	3.9	2.7		〃		
	K—72—①	3.35	2.05～2.45	計 0.1	淡紺		80
	②	4.05	2.1～2.4	平均 0.05	〃		
	K—73—①	3.75	2.2		淡紺		80
	②	3.8～4.0	1.7～1.95		〃		
	③	4.35	2.75		〃		
	④	3.4～3.7	1.65		〃		
	⑤	3.65	2.5		〃		
	⑥	3.85	2.3		〃		
	⑦	3.75	2.2～2.4		〃		
	⑧	3.5	2.0		〃		
	⑨	3.4～3.55	1.85		〃		
	⑩	3.35	1.8～2.2		〃		
	⑪	3.75～4.05	2.8		〃		
	⑫	3.75	2.6		〃		
	⑬	3.55	1.9～2.1		〃		
	⑭	3.9	2.1		〃		
	⑮	3.5～4.0	2.25		〃		
	⑯	3.6	2.0		〃		
	⑰	3.4	2.0		〃		
	⑱	3.9	2.1		〃		
	⑲	3.55	2.1	↓	〃		

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
24 号 墓	K—73—⑳	3.35	2.5		淡紺		80
	㉑	3.85	3.2		〃		
	㉒	3.5	2.25		〃		
	㉓	3.3	2.5		〃		
	㉔	4.0	2.3～2.5		〃		
	㉕	3.3	2.55		〃		
	㉖	3.95	2.6		〃		
	㉗	3.9	2.15		〃		
	㉘	3.8	1.85～2.25		〃		
	㉙	3.85	2.2～2.45		〃		
	㉚	3.5	1.95		〃		
	㉛	3.3～3.45	2.4		〃		
	㉜	3.5	1.8		〃		
	㉝	3.6	1.75		〃		
	㉞	3.9～4.05	2.0～2.55		〃		
	㉟	3.5	1.7～2.0		〃		
	㊱	4.0	2.2～2.45		〃		
	㊲	3.95	2.1～2.45	計 3.05	〃		
	㊳	3.8	2.2	平均 0.047	〃		
	㊴	3.9～4.1	2.55		〃		
	㊵	3.45～3.7	2.3		紺		
	㊶	4.0～4.25	2.5		〃		
	㊷	4.0	3.2		〃		
	㊸	3.6～3.85	2.2		〃		
	㊹	3.4	2.3		淡紺		
	㊺	3.9	2.3		淡青		
	㊻	3.75	2.0		紺		
	㊼	3.7～3.9	2.8		〃		
	㊽	4.15	1.85～2.5		〃		
	㊾	3.8	2.0		〃		
	㊿	3.45	1.75～2.2		〃		
	(51)	3.75	2.55～2.7		〃		
	(52)	3.75	2.1～2.35		〃		
	(53)	3.7	2.1		〃		
	(54)	3.9	2.7～3.0		〃		
	(55)	3.6～3.75	1.35～2.0		〃		
	(56)	3.9～4.3	2.45		〃		
	(57)	3.4	1.8		〃		
	(58)	3.6	1.8～2.0		〃		
	(59)	3.7	2.5		〃		

遺構番号	玉番号	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
24 号 墓	K—73—⑥⓪	3.4	2.6		濃紺		80
	⑥①	3.8～4.3	2.7～3.0		〃		
	⑥②	4.3～4.45	2.2		透明淡青		
	⑥③	4.6～5.0	3.2		スカイブルー		
	⑥④	4.35～4.8	3.25		〃		
	⑥⑤	4.25～4.5	3.8		〃		
25 号 墓	K—107	3.9～4.1	2.0～2.3	0.05	紺		82
	K—108	3.85～4.0	2.2	0.05	紺		
	K—109	3.85	2.2～2.35	0.05	紺		

表23 小　　玉（中）

種　別	遺構番号	玉番号	材　質	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
小玉(中)	4 号 墓	K-112	ガラス	5.75～6.2	3.6～4.2	1.55	0.20	紺	第10図	77
		K-113	ガラス	5.45～5.5	3.1～3.4	1.4～1.5	0.15	〃	第10図	77
		K-114	ガラス	5.3～5.4	3.3～3.55	1.1～1.2	0.15	〃	第10図	77
		K-115	ガラス	5.3～5.4	3.15～3.3	1.5～1.55	0.15	〃	第10図	77
		K-116	ガラス	4.45～5.1	2.9～2.75	1.5	0.10	透明青	第10図	77
		K-117	ガラス	5.3	2.8～3.1	1.2～1.25	0.15	透明淡青	第10図	77
	24 号 墓	K—74	ガラス	6.25	2.85～3.3	1.25～1.3	0.20	透明淡青	第36図	80

表24 小　　玉（大）

種　別	遺構番号	玉番号	材　質	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	図番号	写真図版
小玉(大)	4 号 墓	K—1	ガラス	9.65～9.9	7.2～7.7	3.5	0.95	濃紺	第10図	76
		K—3	ガラス	9.0～9.9	6.3～7.2	1.7～1.75	0.95	紺	第10図	76
		K—5	ガラス	9.5～11.6	4.75～6.1	2.7	0.85	濃紺	第10図	76
		K—11	ガラス	9.0～9.85	6.05～6.4	2.6～2.7	0.85	紺	第10図	76
		K—18	蛇紋岩	10.0～10.2	6.45～7.95	3.1～3.3	0.95	?	第10図	76
		K—19	蛇紋岩	8.5～8.7	7.2～7.8	2.2～2.4	0.65	?	第10図	76
	8 号 墓	K—33	ガラス	9.75～10.5	6.5～7.4	1.6～1.7	1.15	紺（数本の白帯）	第17図	79
		K—34	?	8.2～8.65	3.5～7.0	2.9	0.35	風化	第17図	79
		K—35	ガラス	7.6～8.2	5.9～7.2	1.9～2.0	0.65	紺（数本の白帯）	第17図	79
		K—36	ガラス	7.6～8.4	5.15～5.7	1.6～1.7	0.55	〃	第17図	79
		K—37	ガラス	8.1～9.5	6.45～6.6	1.9	0.75	〃	第17図	79
		K—38	ガラス	6.25～6.75	4.6～5.0	1.5～1.7	0.35	〃（多数の白帯）	第17図	79
		K—39	ガラス	8.0～8.45	4.95～5.3	2.2～2.3	0.50	〃	第17図	79
		K—40	ガラス	7.75～9.2	5.6～6.1	1.6～1.7	0.65	〃	第17図	79
		K—41	ガラス	8.2～9.5	5.9～6.1	1.7～1.75	0.75	〃	第17図	79
		K—42	ガラス	10.1～10.6	7.0～8.1	1.5	1.30	〃	第17図	79
		K—30	ガラス	7.2～8.0	5.3～6.85	2.85～2.9	0.45	〃	第17図	79

付章　仙台市茂ケ崎横穴墓群3号横穴出土の人骨について

札幌医科大学解剖学第2講座
石田　肇

3号横穴から出土した人骨は残念ながら断片が多く、この人骨の人類学的特徴を明らかにすることはできなかったが、その所見を報告する。

No.3－4　頭蓋骨の一部である。前頭骨の右半、右頭頂骨、右側頭骨および後頭骨が残存する。乳様突起は大きく、乳突上稜も発達することから、この個体の性別は男性と推定される。縫合は内板で完全に癒合し、外板では一部癒合しているので、年齢は壮年に達していたと思われる。外耳道骨腫は認められない。

No.3－5　頭蓋冠の破片が二つ存在する。一つは前頭骨、左右の頭頂骨の一部からなり、冠状縫合、矢状縫合ともに内外板ともに癒合している。このことから、この個体の年齢は熟年と考えられるが、性別は明らかではない。もう一つは左右の頭頂骨および後頭骨からなる。頭蓋骨は薄く、縫合はすべて開いており、小児のものと推定される。

No.3－6　頭蓋冠が残存する。全体として小さく前頭結節が発達するので、女性と考えられる。縫合は内板で完全に癒合し、外板ではほぼ開いていることから、この個体の年齢は壮年程度と思われる。前頭縫合はなく、縫合骨も認められない。

No.3－7－a　矢状縫合を含む頭蓋冠の一部と右側頭骨岩様部が保存される。縫合は内板で癒合しており、また大きさからみて壮年の個体と推定される。性別は不明。

No.3－8　大腿骨の骨体部が4本残存する。

1)　右大腿骨の骨体上半部　転子下窩が発達し扁平である。男性。

2)　大腿骨骨体中央部　左右不明。柱状形成が著しい。男性。

3)　右大腿骨の骨体上半部転子下窩が発達し扁平である。女性。

4)　大腿骨骨体中央部　左右不明。柱状形成がほとんどなく断面は丸い。女性。

下肢骨はかなり頑丈な形態をしめす。

以上のことから、3号墓には少なくとも5体の人骨が葬られ、1体は小児、4体は成人であったことが判明した。

写　真　図　版

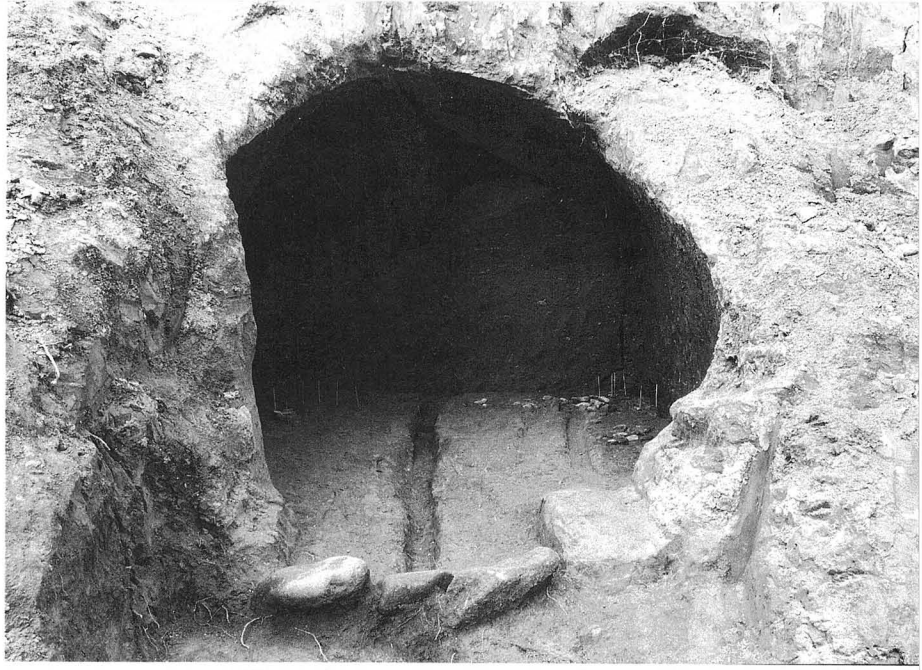
図版１　茂ヶ崎横穴墓群航空写真（昭和22年撮影）

図版 2
茂ヶ崎遠景

図版 3
1 次調査遠景

図版 4
2 次調査遠景

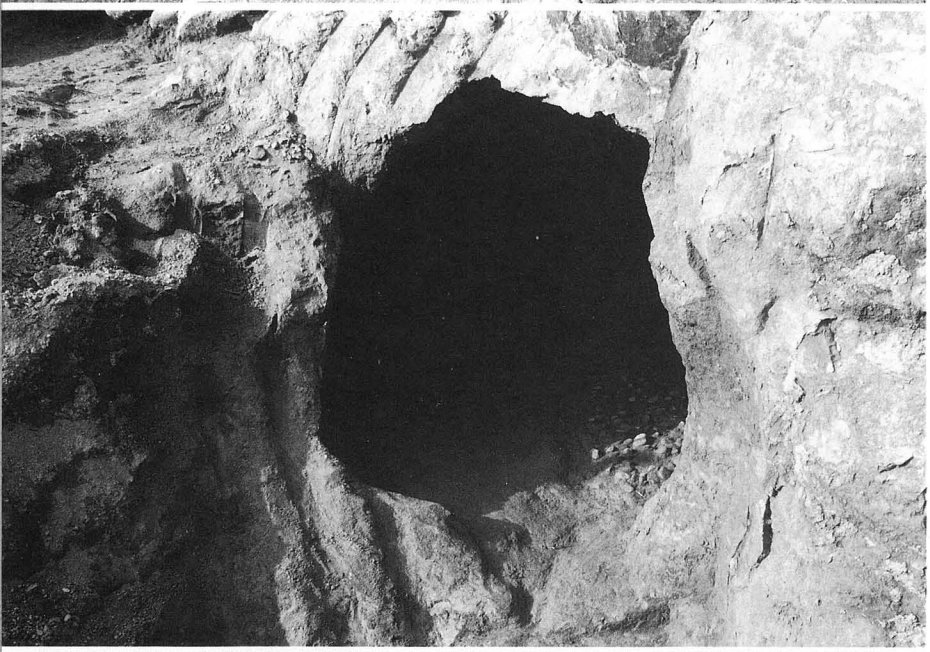
図版 5
1 号 墓



図版 6
1 号墓奥壁

図版 7
1 号墓玄室右側壁

図版 8
1 号墓鉄製品
出土状況

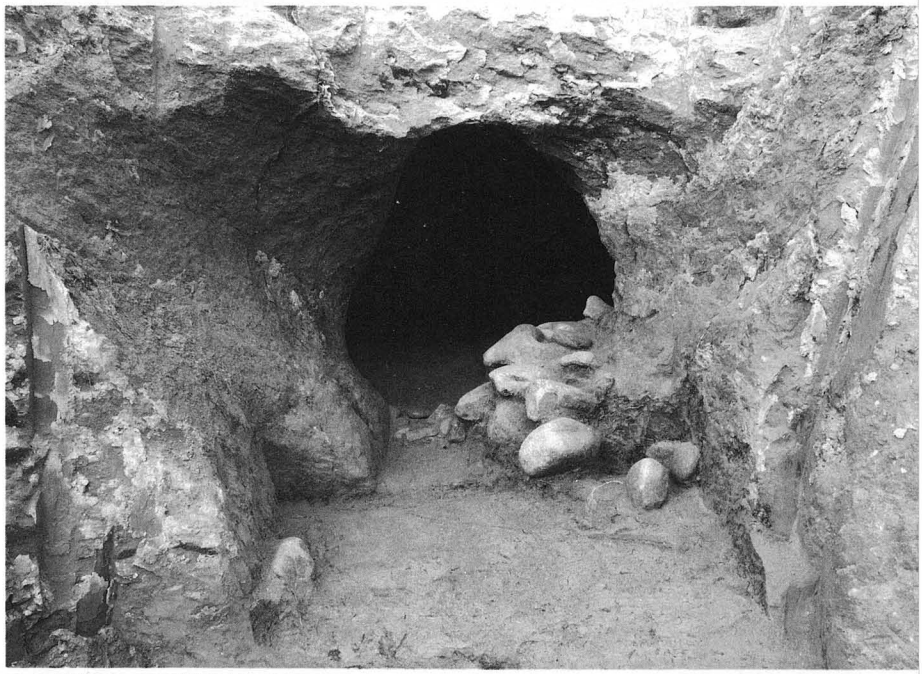


図版 9
2 号 墓

図版10
2 号墓奥壁

図版11
2号墓棺座

図版12
3　号　墓



図版13
3号墓玄門
（玄室から）

図版14
3号墓天井

図版15
3号墓玄室内

図版16
3号墓人骨
出土状況

図版17
4　号　墓

図版18
4号墓敷石

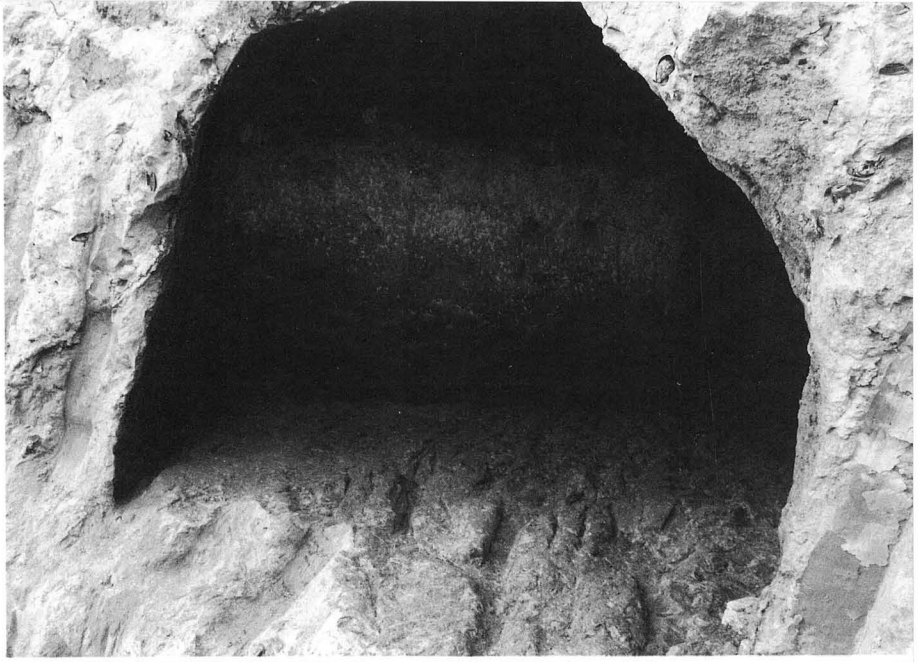
図版19
4号墓玄室床面

図版20
4号墓遺物
出土状況

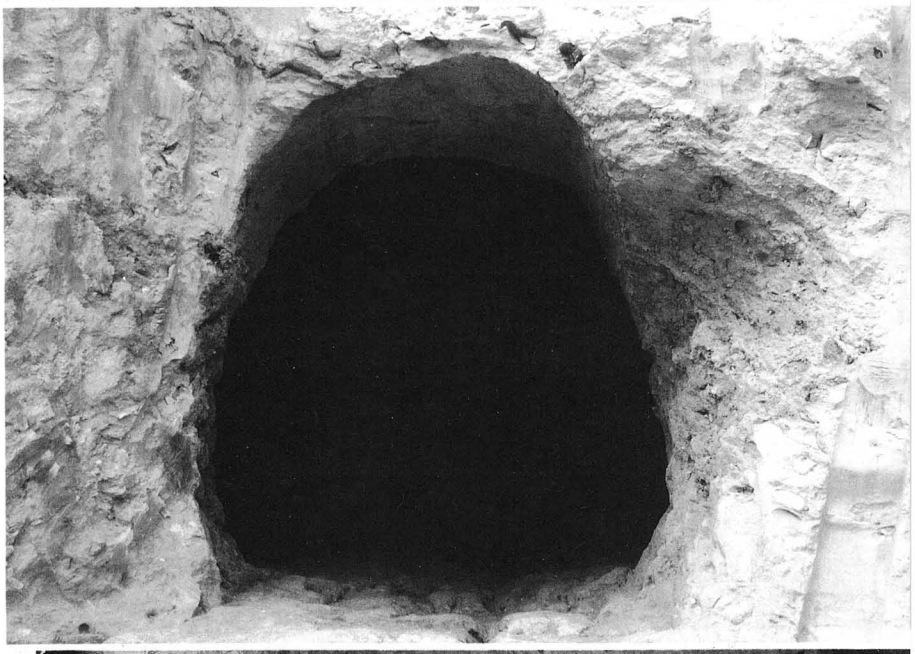
図版21
4号墓遺物
出土状況

図版22
5　号　墓

図版23
5　号　墓

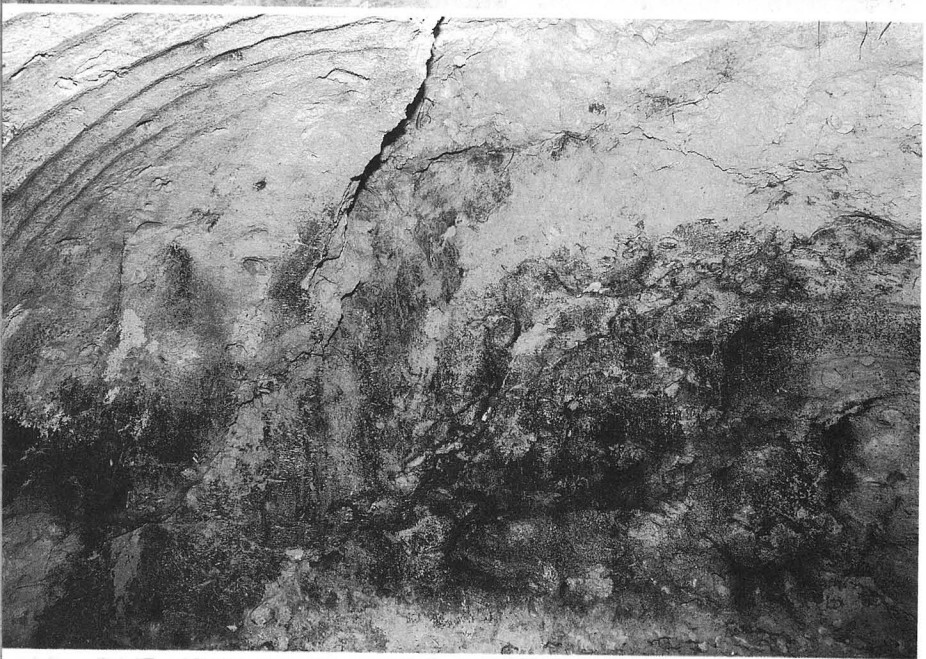


図版24
6　号　墓

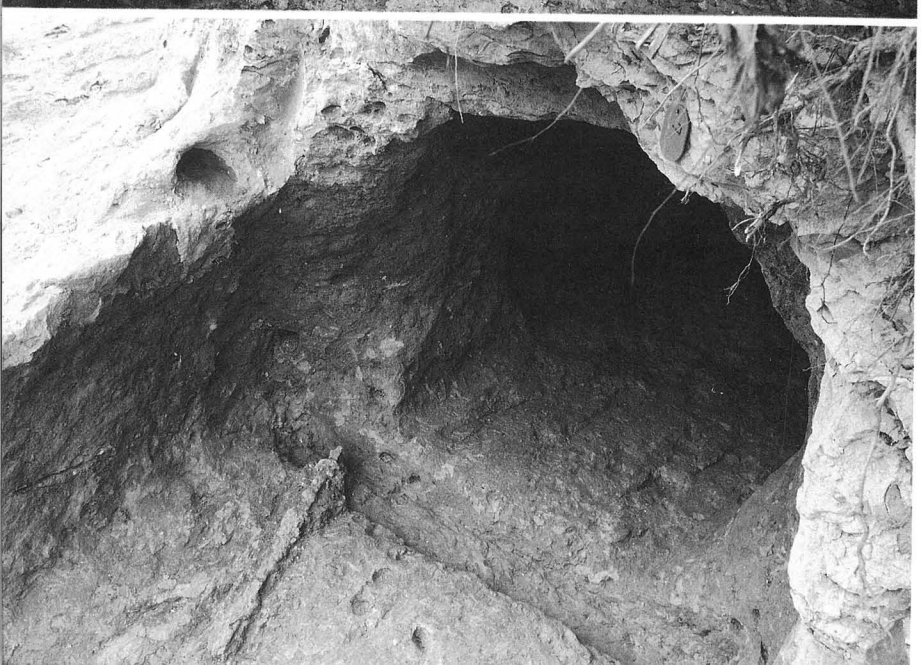


図版25
6号墓玄室内

図版26
7号墓玄門



図版27
7号墓奥壁



図版28
7号墓直刀
出土状況

図版29
8　号　墓

図版30
8 号墓閉塞石

図版31
8 号墓敷石

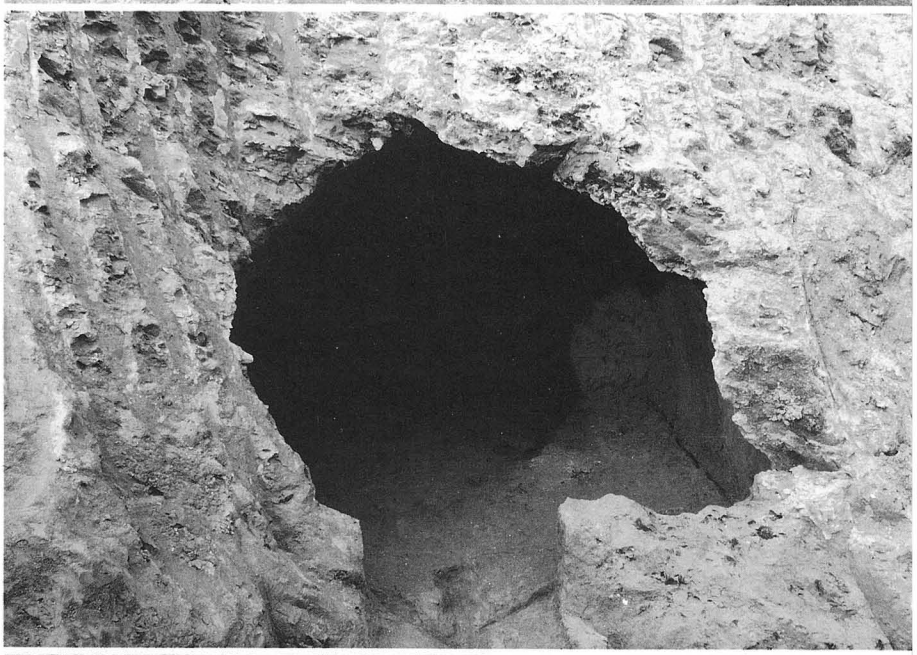
図版32
8号墓敷石

図版33
8号墓遺物
出土状況

図版34
8号墓遺物
出土状況

図版35
8号墓遺物
出土状況

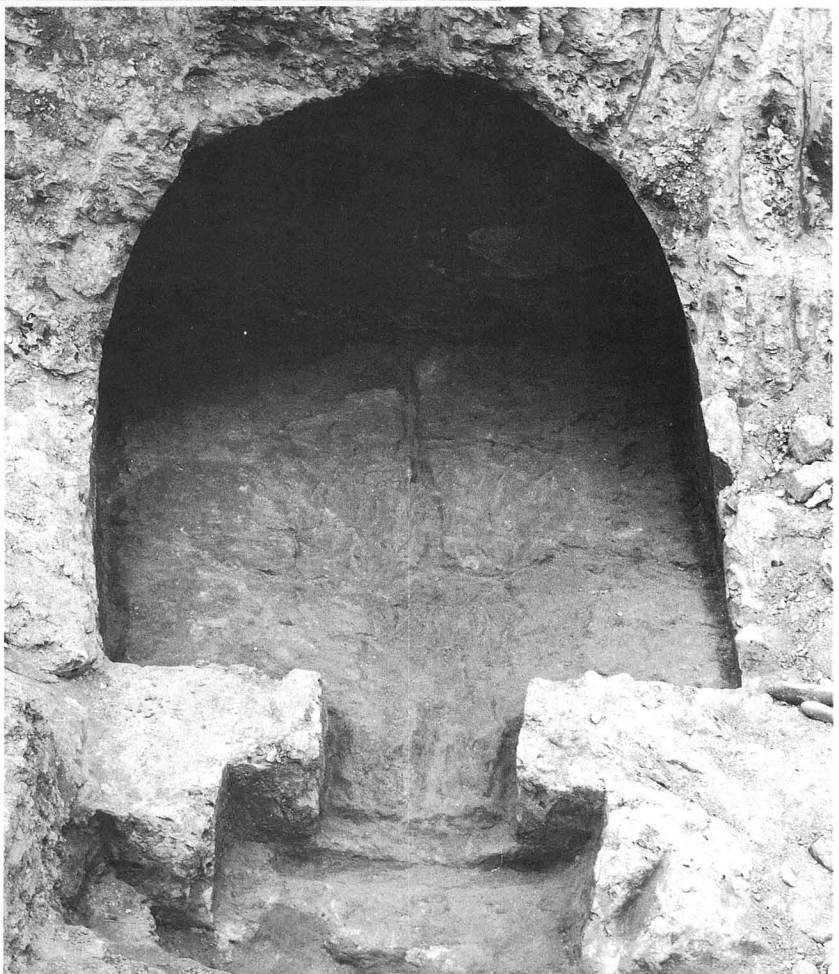
図版36
9　号　墓



図版37
9・10号墓

図版38
10 号 墓

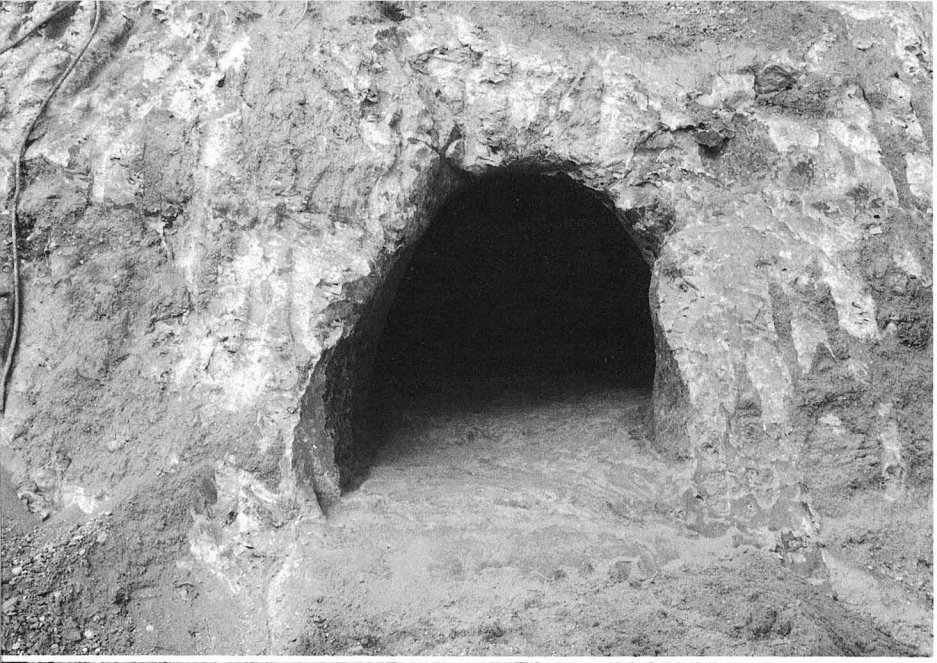
図版39
10 号 墓



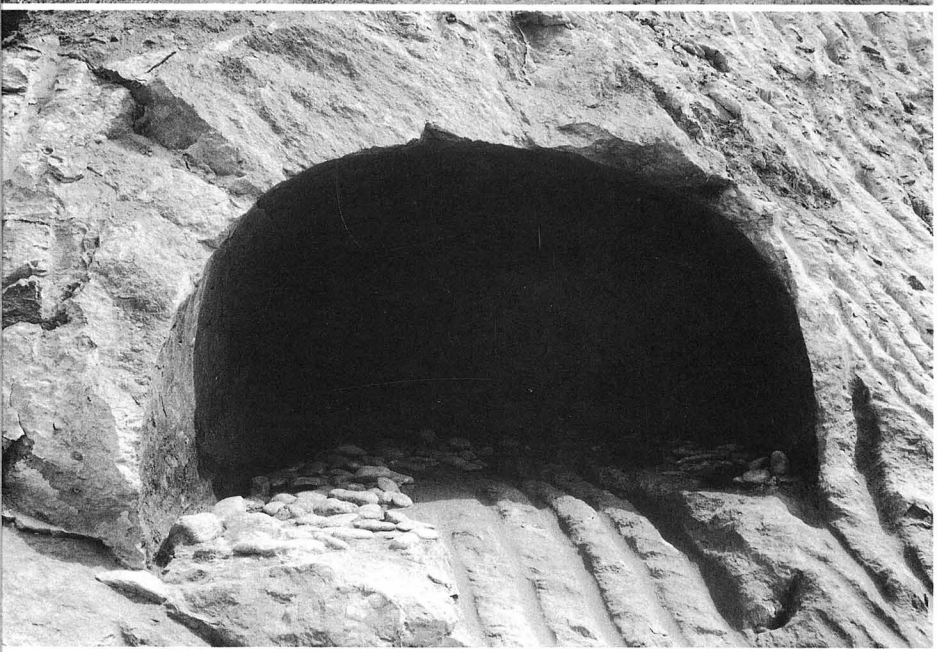
図版40
11　号　墓

図版41
11号墓玄門
（玄室から）

図版42
11号墓棺座



図版43
12 号 墓

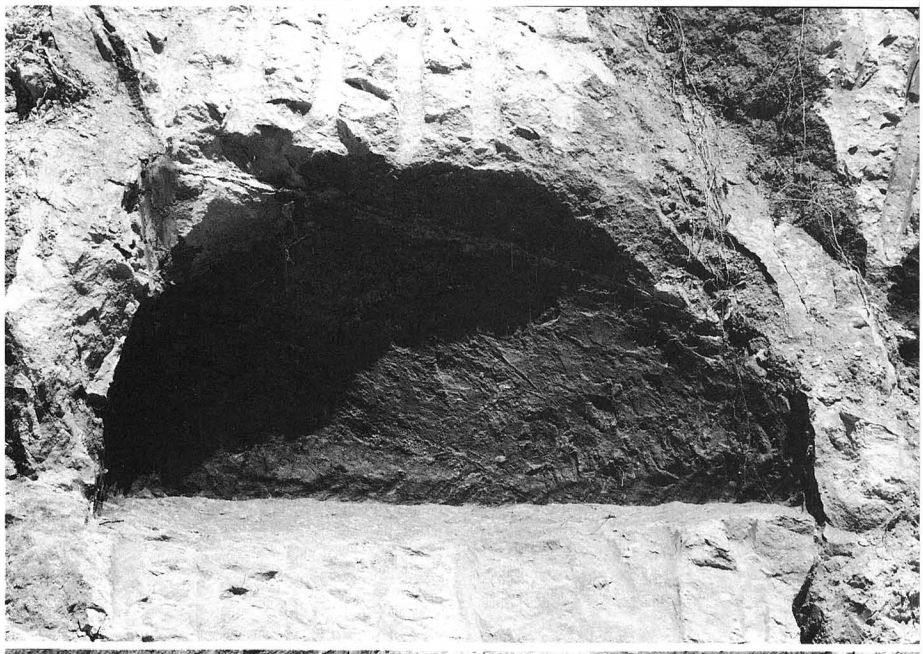


図版44
13 号 墓

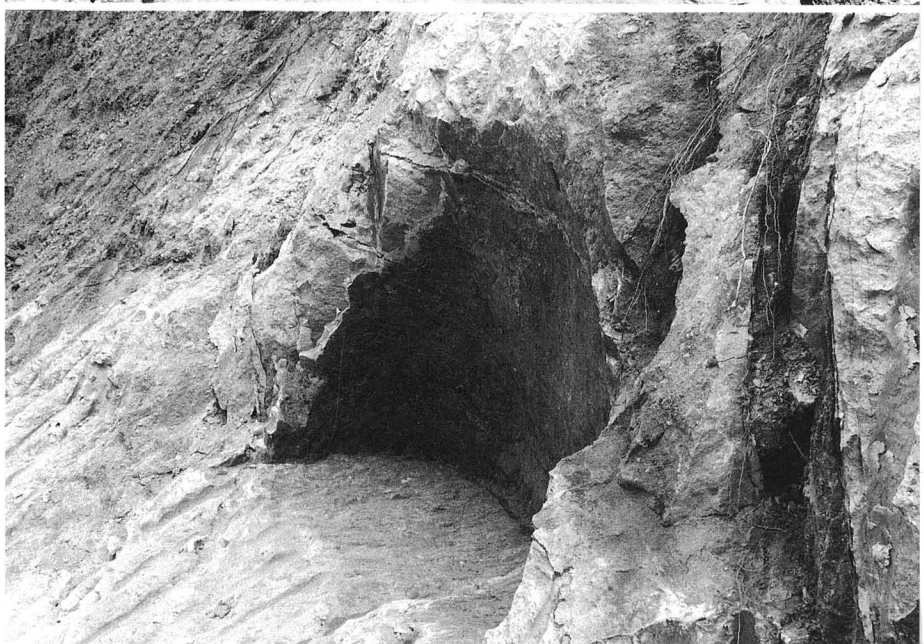
図版45
13 号 墓

図版46
13号墓敷石

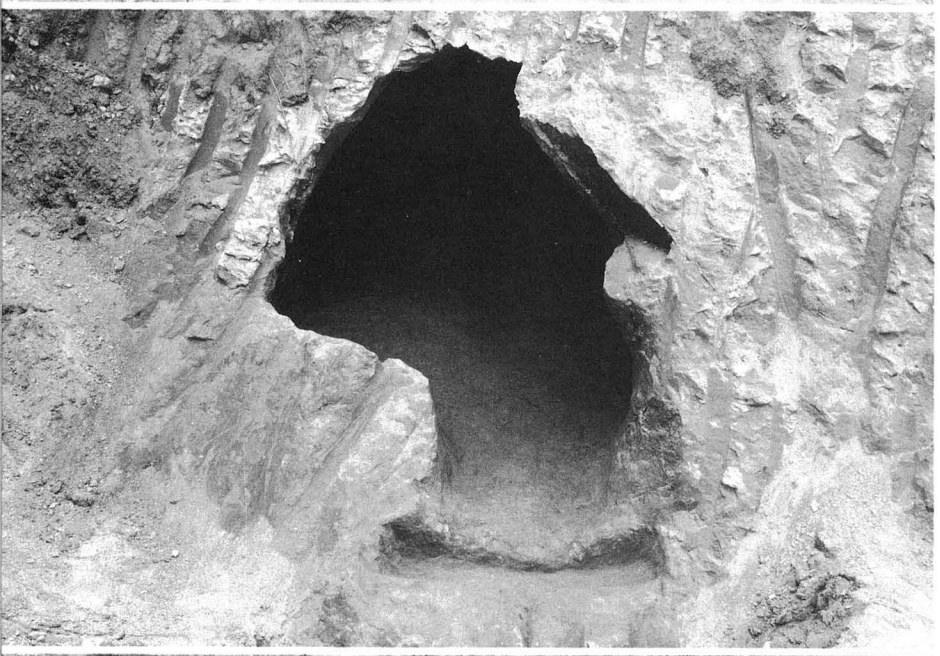
図版47
14　号　墓



図版48
14　号　墓



図版49
15 号 墓



図版50
16 号 墓

図版51
17 号 墓

図版52
17号墓全景

図版53
17　号　墓

図版54
18　号　墓

図版55
19 号 墓

図版56
20 号 墓

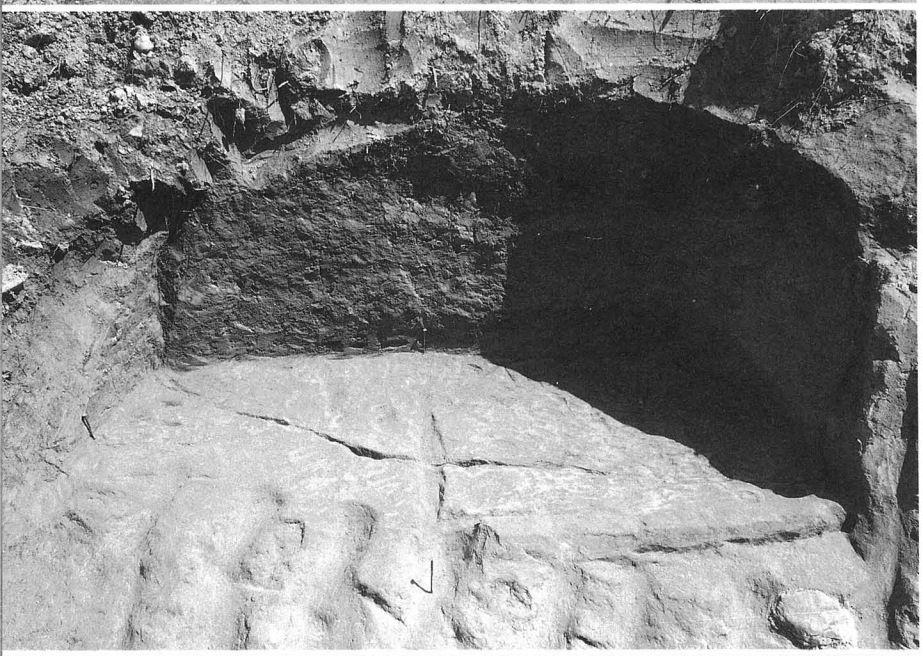
図版57
21 号 墓

図版58
22 号 墓

図版59
23 号 墓

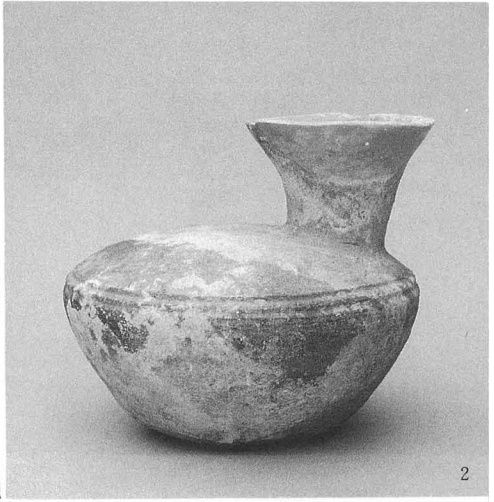
図版60
24 号 墓

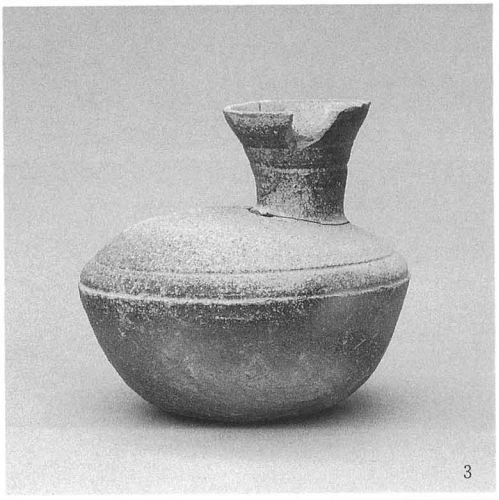
図版61
25号墓敷石

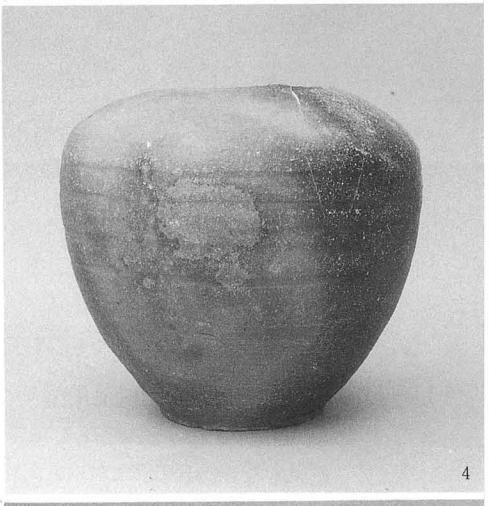


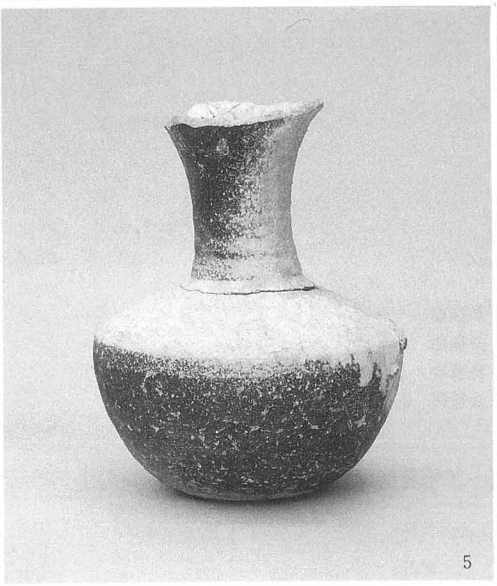
図版62
25 号 墓

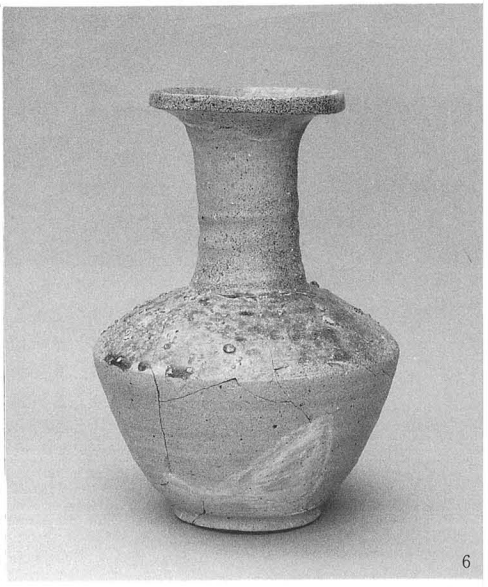
図版63
25号墓遺物
出土状況





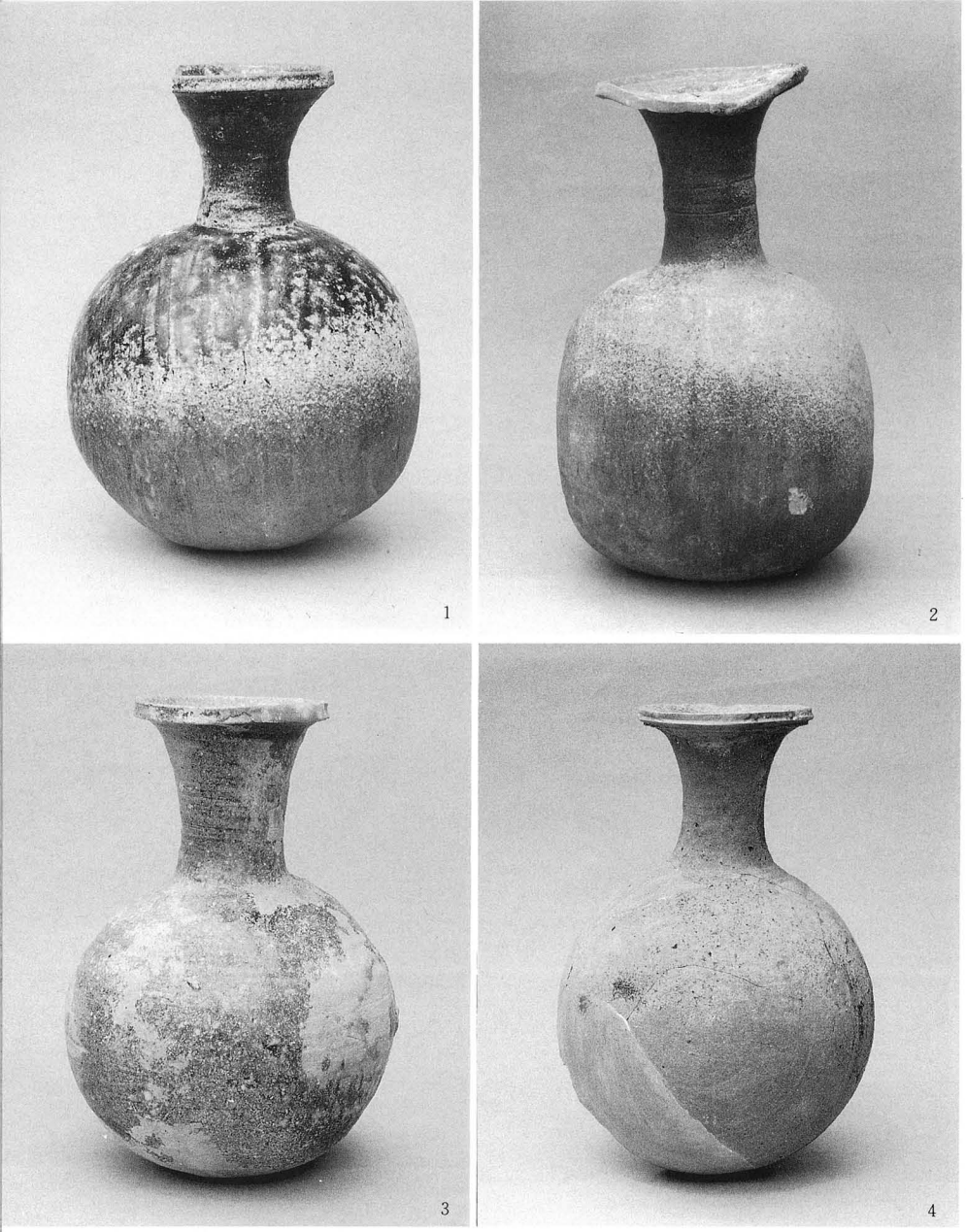






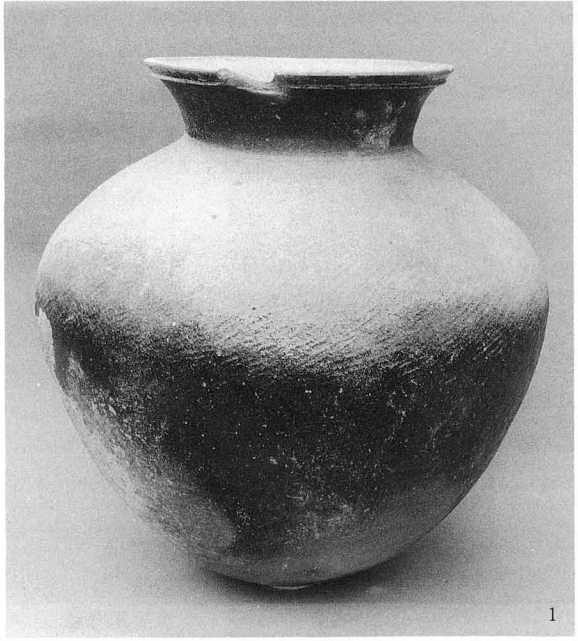
1．E－9　平瓶　20号墓　　4．E－10　長頸壷　20号墓
2．E－14　平瓶　8号墓　　5．E－4　長頸壷　6号墓
3．E－15　平瓶　20号墓　　6．E－11　長頸壷　25号墓

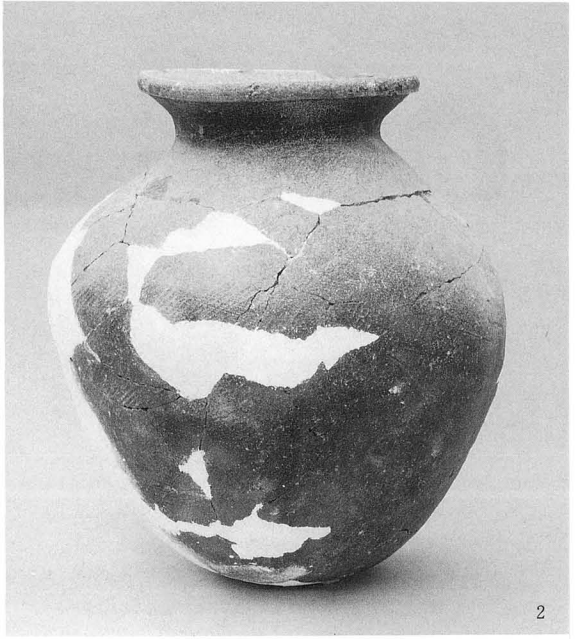
図版64　6・20・25号墓出土遺物



1．E－1　長頸瓶　1号墓
2．E－12　長頸瓶　20号墓
3．E－5　長頸壷　8号墓
4．E－13　長頸瓶　20号墓

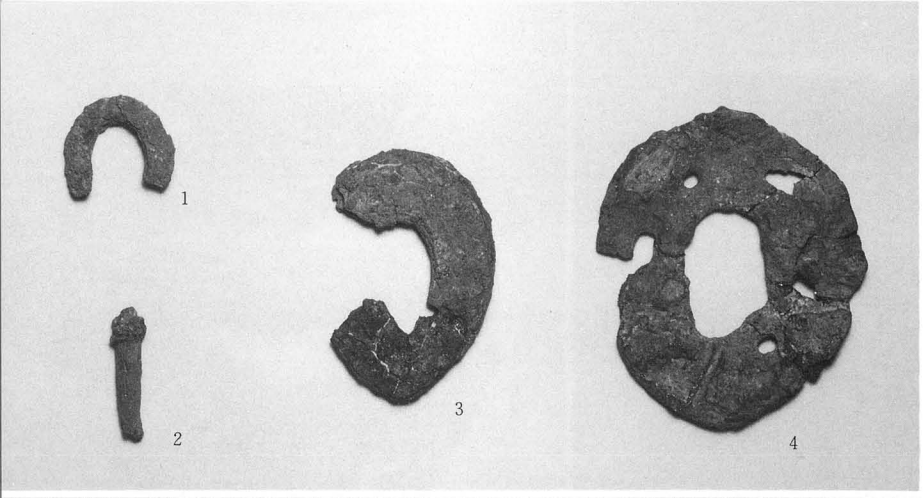
図版65　1・8・20号墓出土遺物





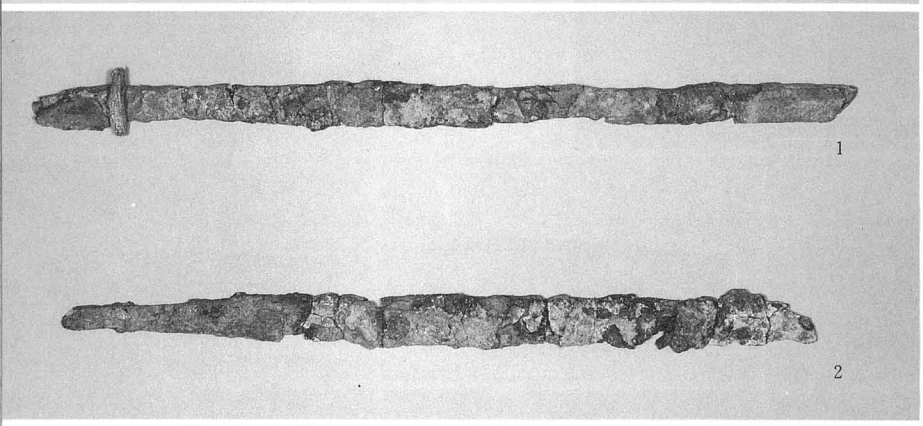
1．E－2　甕　3号墓
2．E－6　甕　4号墓
3．E－3　坏　4号墓
4．C－1　坏　4号墓
5．C－2　坏　4号墓
6．C－5　坏　8号墓
7．C－6　坏　11号墓
8．C－8　坏　20号墓

図版66　3・4・11・20号墓出土遺物



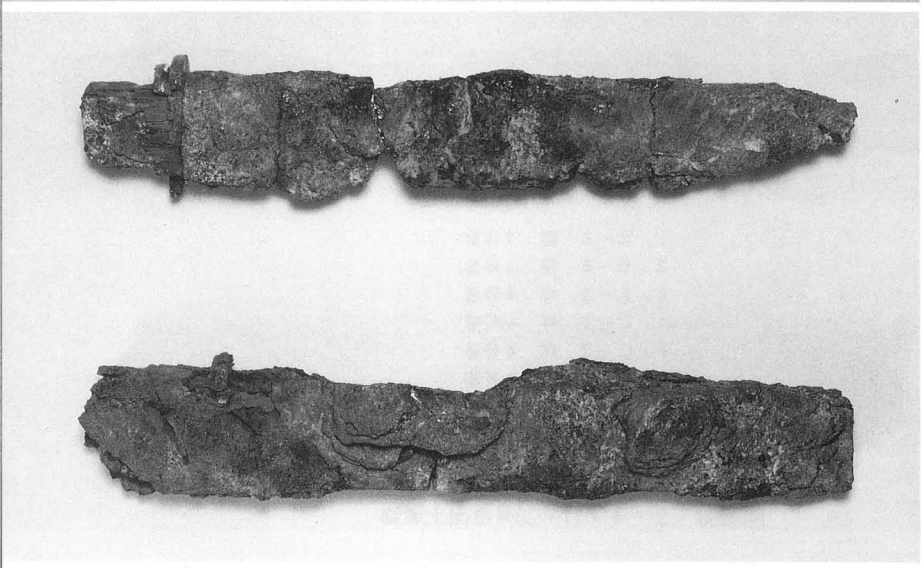
図版67
8号墓出土鉄製品

1．N－23
2．N－24
3．N－21
4．N－27



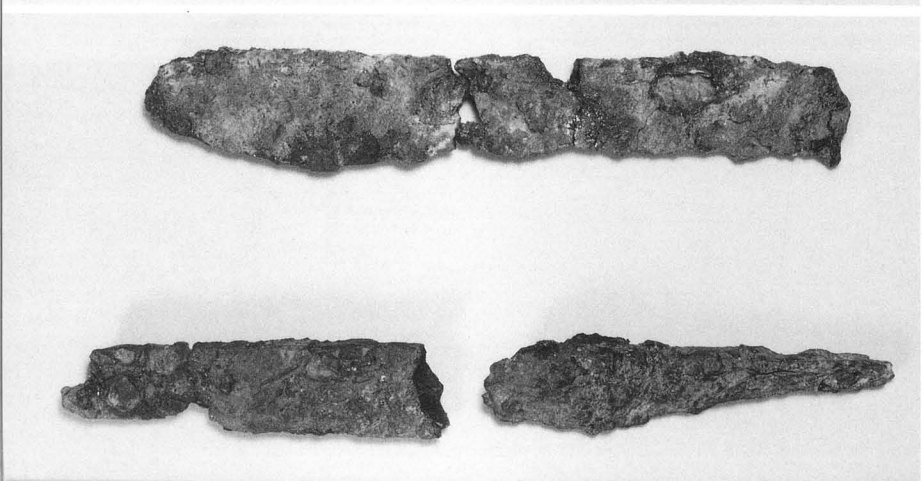
図版68
7・8号墓
出土遺物

1．N－20
2．N－29



図版69
8号墓
出土鉄製品

N－28

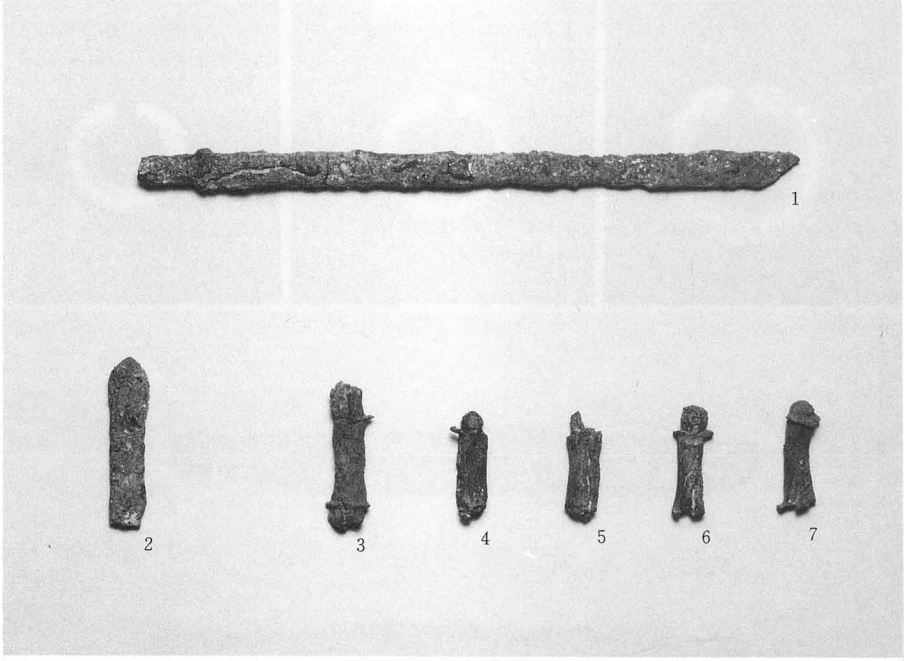


図版70
8号墓出土直刀

1．N－25

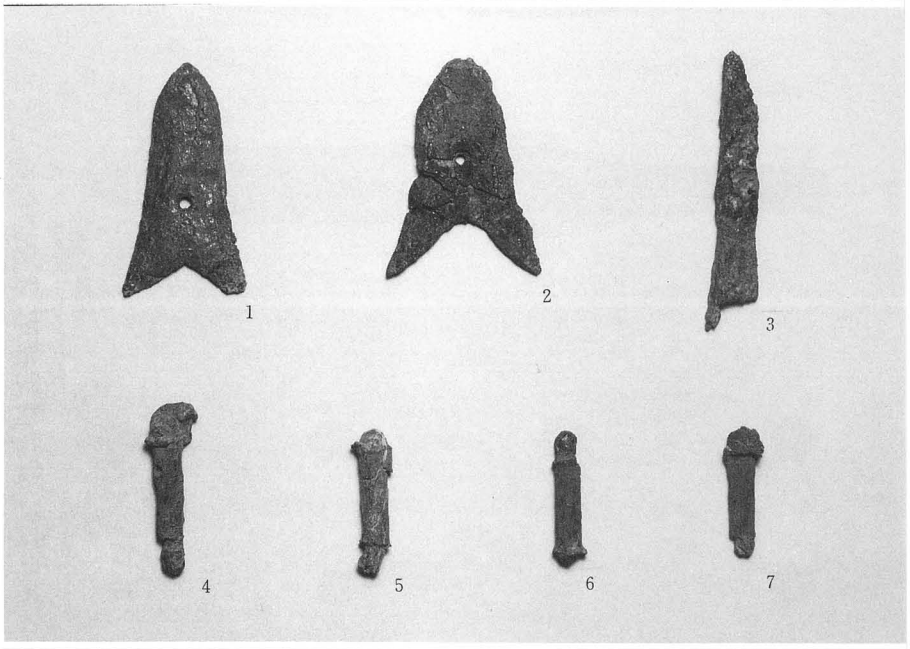
図版71
18号墓出土鉄製品

1．N－35
2．N－51
3．N－32
4．N－36
5．N－38
6．N－39
7．N－40



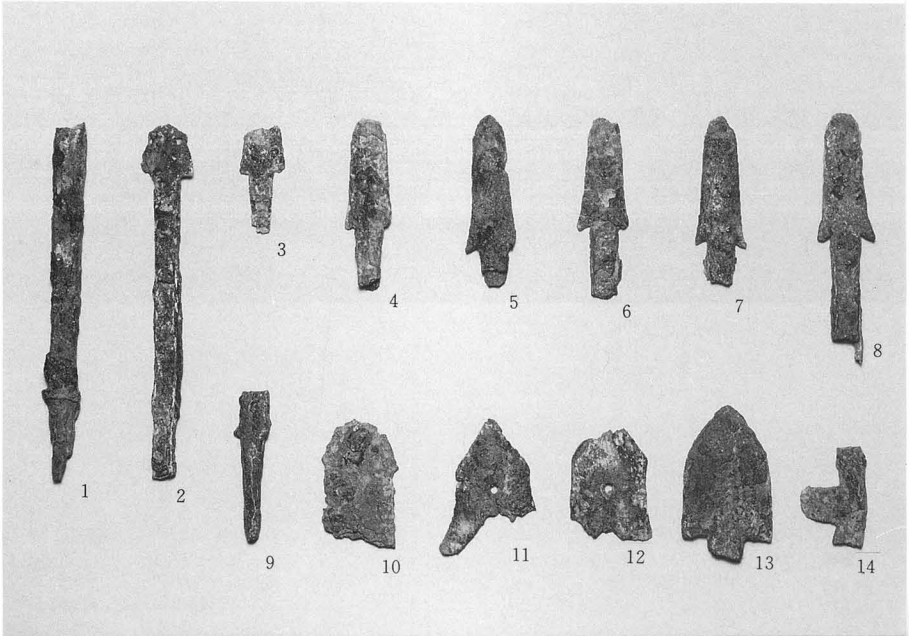
図版72
24号墓出土遺物

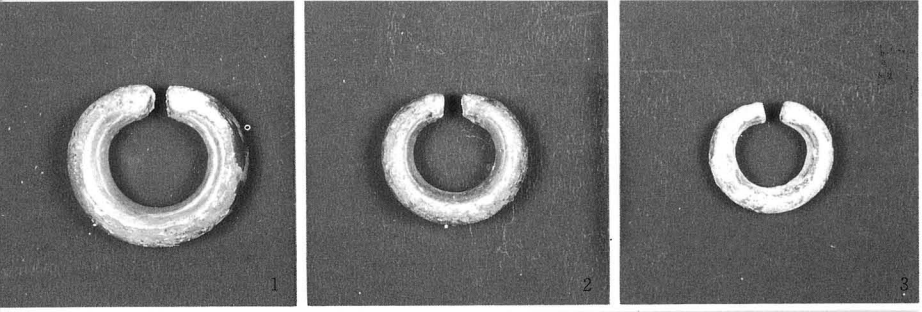
1．N－45
2．N－46
3．N－47
4．N－41
5．N－42
6．N－43
7．N－44



図版73
1号墓出土鉄製品

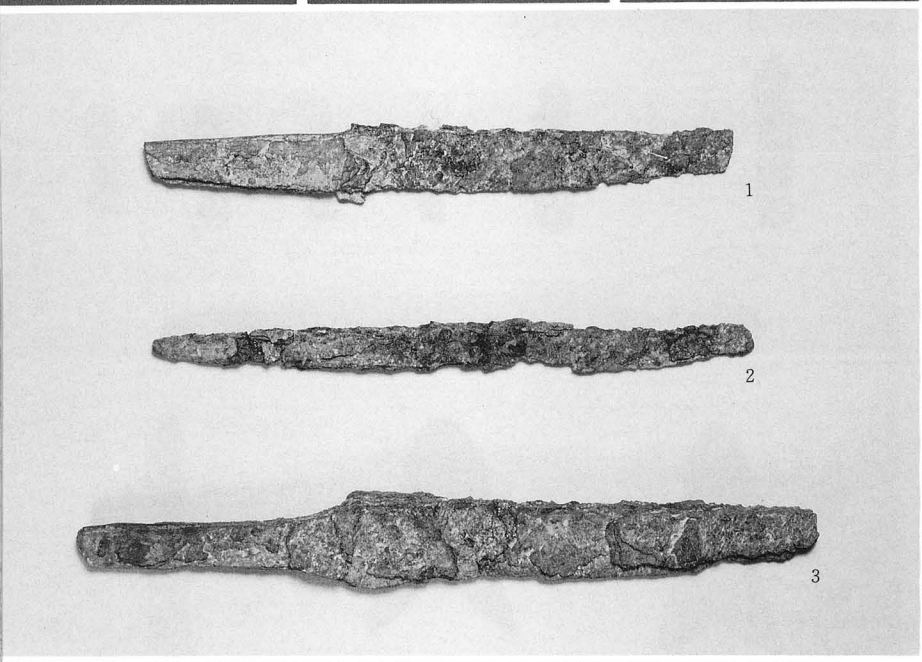
1．N－9　　8．N－1
2．N－8　　9．N－5
3．N－7　　10．N－2
4．N－4　　11．N－11
5．N－6　　12．N－3
6．N－10　　13．N－13
7．N－11　　14．N－14





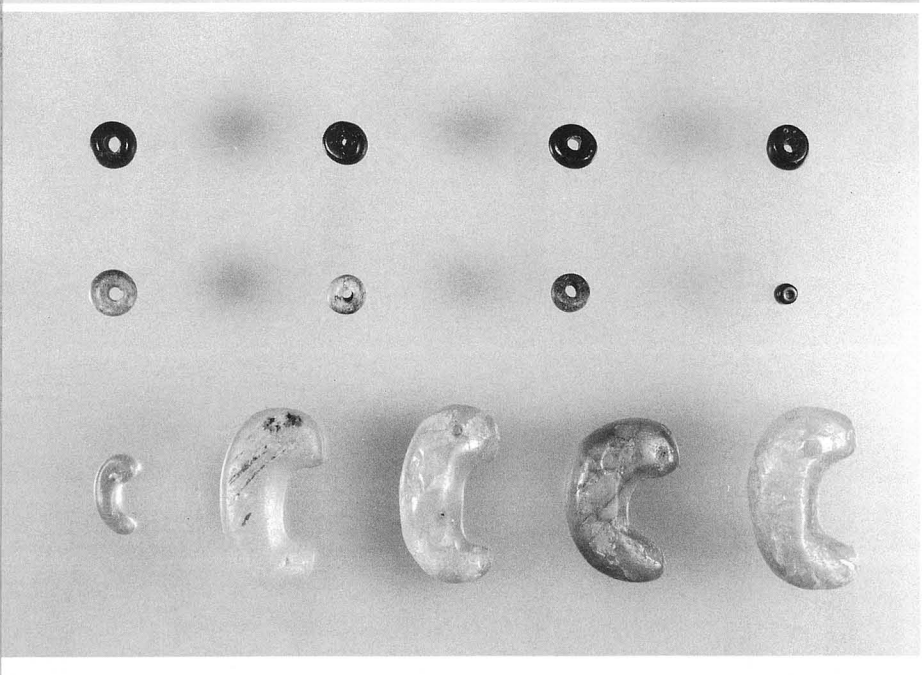
図版74
4号墓出土耳環

1，N－16
2，N－15
3，N－17



図版75
7・12・15号墓
出土鉄製品

1．N－19
2．N－34
3．N－31

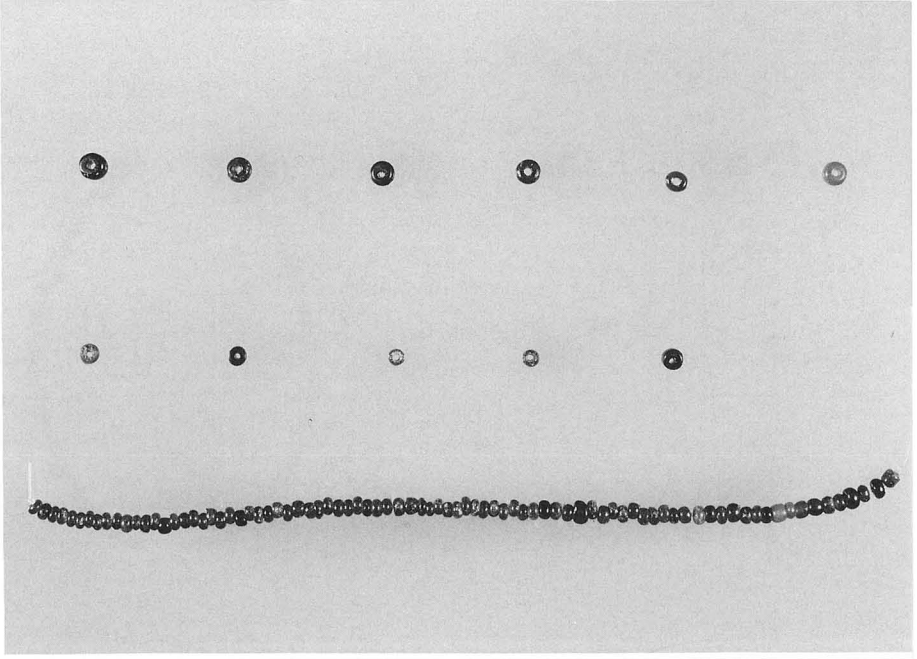


図版76
4号墓出土玉類

K－1・3・5・11
18・19・20・21
22・23・24・25・26

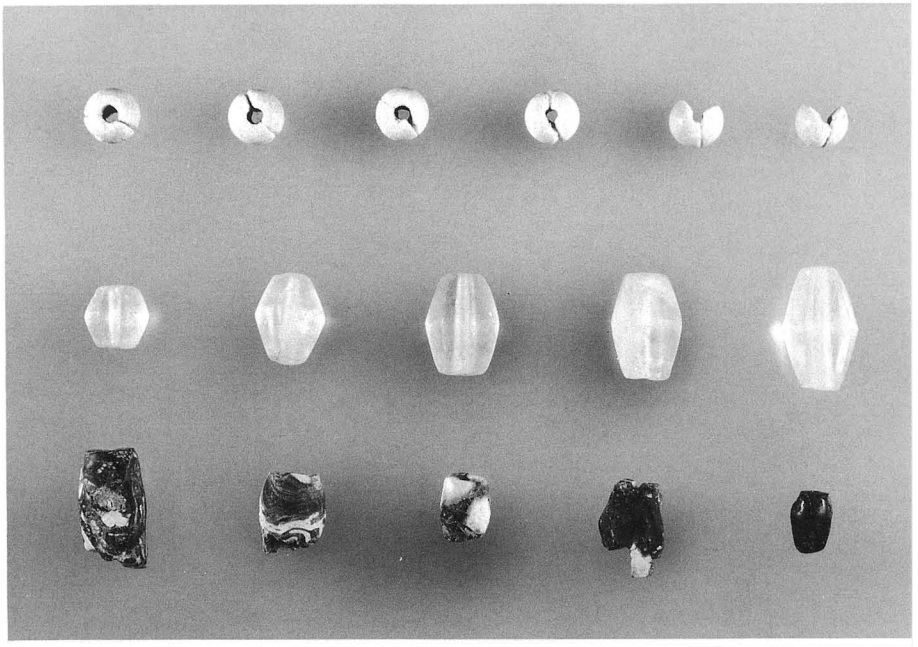
図版77
4号墓出土玉類

K－112・113・114・115・116・117
14 ・ 15 ・ 16 ・ 17 ・ 21
10 － 9 － 8 － 7 － 6 － 4



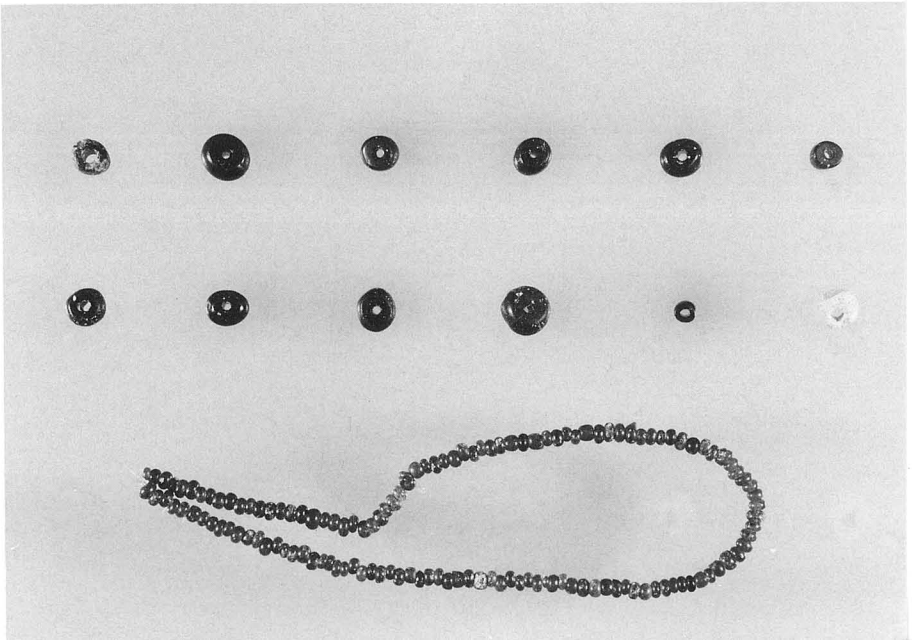
図版78
8号墓出土玉類

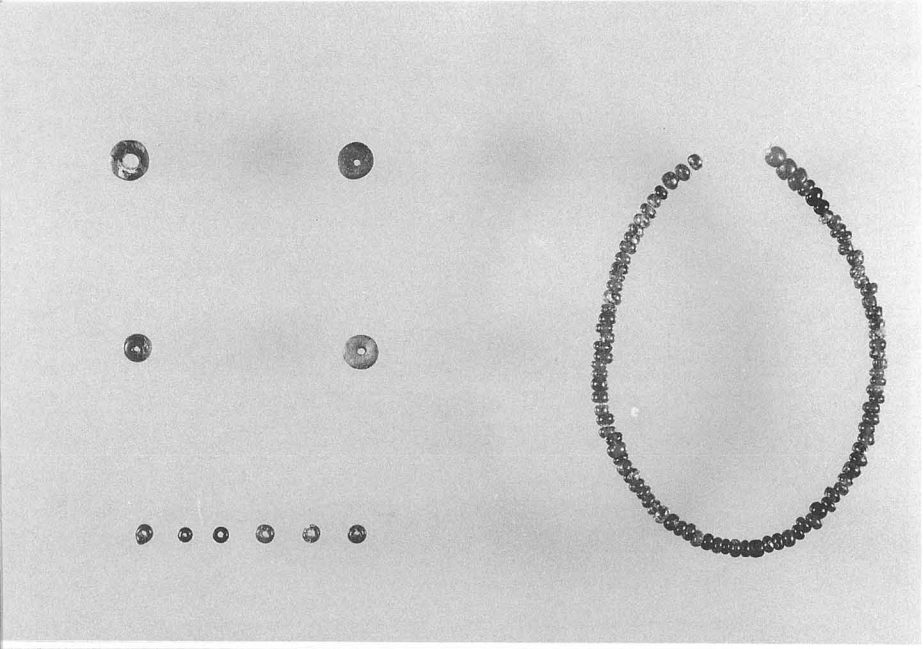
K－51・54・56・59・53・58
65 ・ 68 ・ 69 ・ 66 ・ 67
47 ・ 45 ・ 46 ・ 44 ・ 32



図版79
8号墓出土玉類

K－30・33・35・36・37・38
39・40・41・42・118・34
27 － 28 － 29 － 31

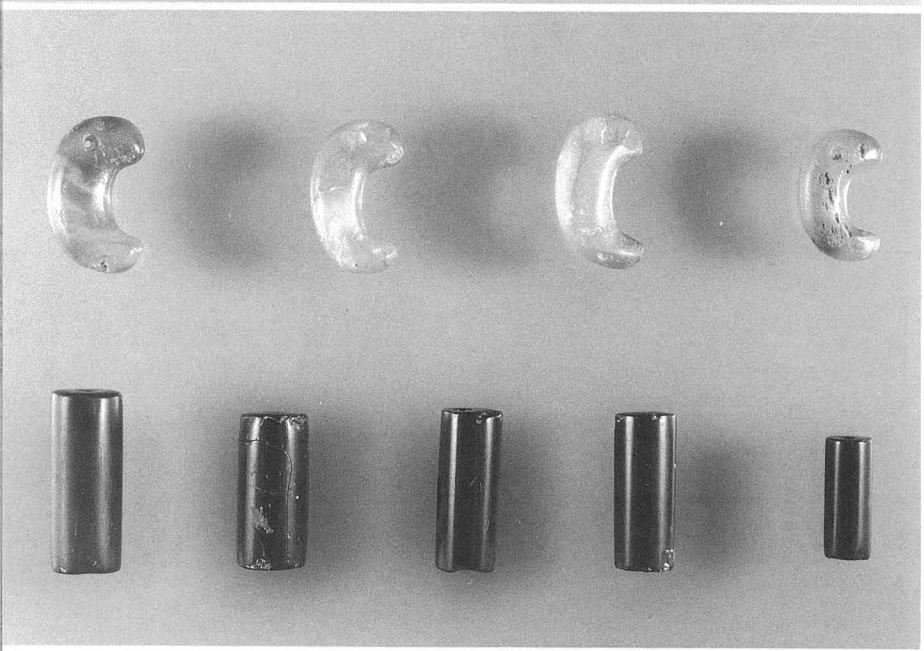




図版80
24号墓出土玉類

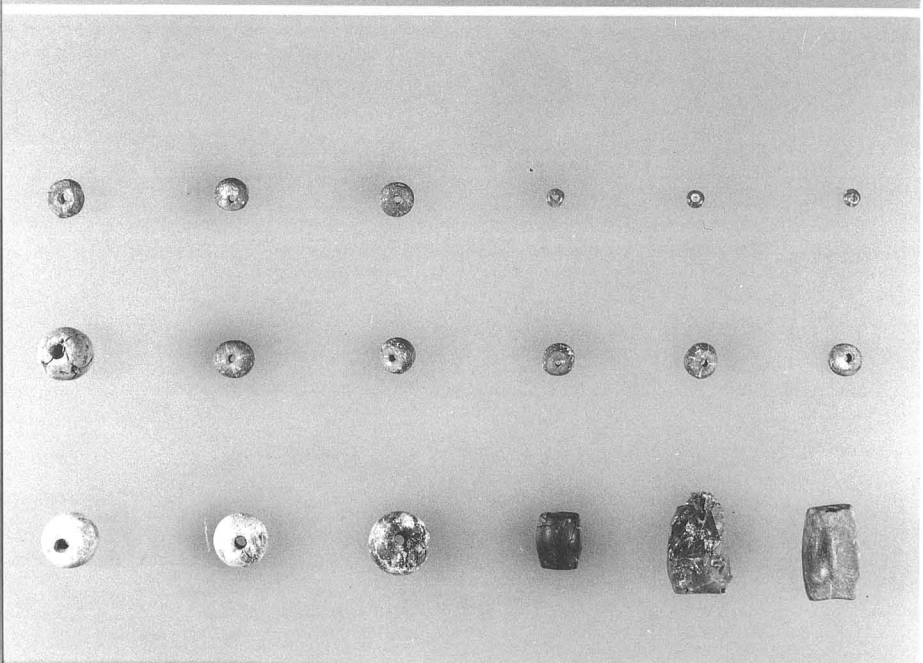
K－75・76
74・77
12

70—73
71—72



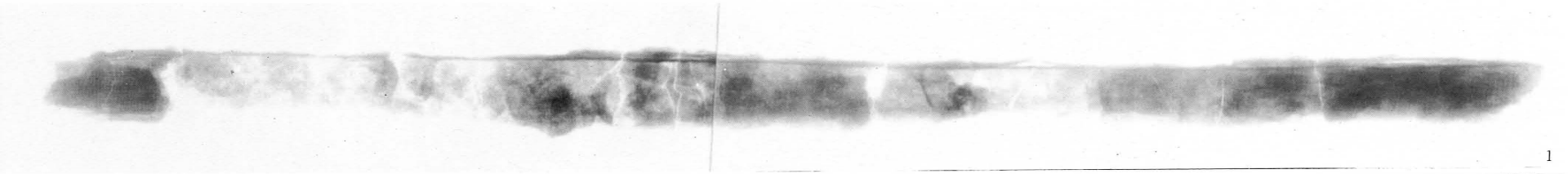
図版81
25号墓出土玉類

K－78・79・81・80
88・86・89・90・87

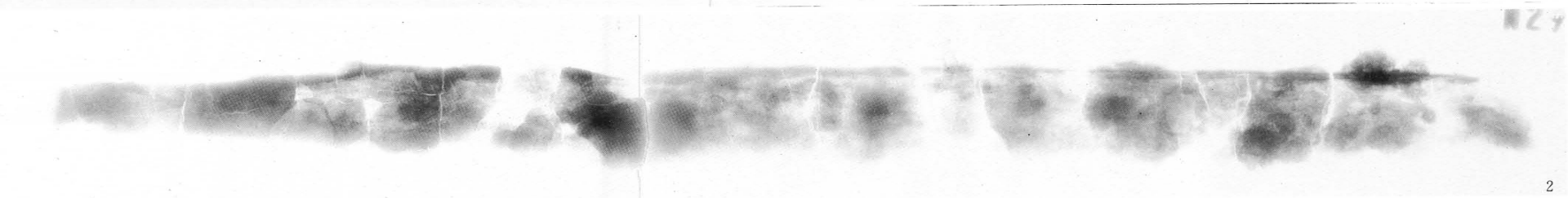


図版82
25号墓出土玉類

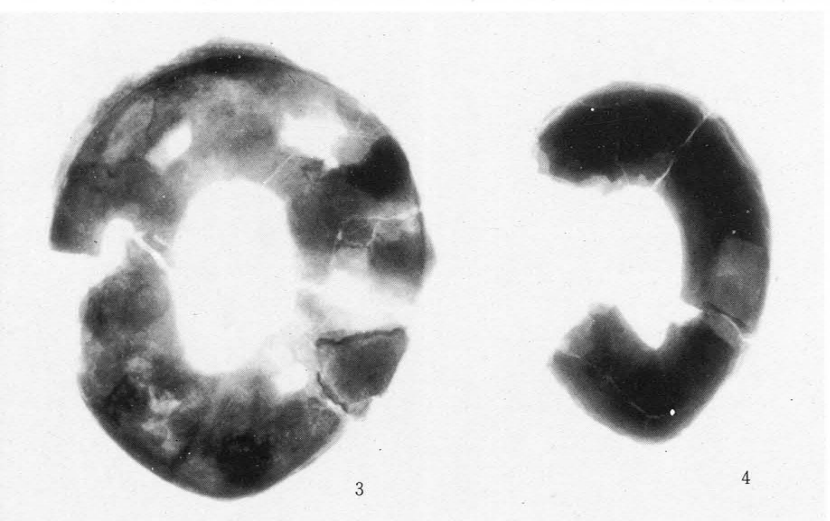
K－92・96・95・107・108・109
84・94・97・91・93・98
83・32・85・106・101・100



1



2



3

4

1，N－20　直刀
2，N－29　直刀
3，N－27　鍔
4，N－21　鍔

図版83　鉄製品Ｘ線写真

仙台市文化財調査報告書第130集

茂ヶ崎横穴墓群

――発掘調査報告書――

１９８９年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24―24 電話 263)1166